

# ブチギレ立香ちゃんの漂白世界旅

白白明け

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

立香ちゃんは激怒した。必ずやかの邪知暴虐のクリプター達を除かなければならないと!!

# 目次

立香ちゃんは激怒した①	1
立香ちゃんは激怒した②	12
立香ちゃんは激怒する①	24
立香ちゃんは激怒する②	31
誰でもない彼は怒らない	40
ロシア異聞帯編	
立香ちゃんは許さない①	42
立香ちゃんは許さない②	52
立香ちゃんは許したくない①	60
カドツク君はがんばりたい	71
立香ちゃんは許したくない②	77
立香ちゃんは拳を握る①	83
立香ちゃんは、拳を、握る②	94
遙かなる旅路の果てを	102
立香ちゃんは歩く	114
門幕	
新たなる旅路を	121
立香ちゃんに行く	132
中国異聞帯編	
立香ちゃんは全速前進DA!	140
芥ヒナコは頑張っている	147
立香ちゃんはやはり怒っている	155
芥ヒナコには戦う理由がある	166

立香ちゃんは救われた！

## 立香ちゃんは激怒した①

質問①―なぜ世界を救おうと思ったのか。

逆に聞きますが、なぜ世界を救わないという選択を選べるのですか？地球に生を受けた一個の生命体として、宇宙船地球号の一員として、世界を救わないなんて選択肢は初めから存在しなかった。カルデア以外の場所が消えてしまった地球で、一年間を愉しく過ごすなんて出来なかった。

質問②―自身が優秀なマスターであると思っているか。

思っています。私は人類最悪のマスターです。それは魔神王からのお墨付きなんですよ？

質問③―君は自身の行いを正しかったと思っているのか。

当然です。私は世界を救った。どうあれ救ったんです。私はその偉業を否定しない。誇りに思っています。私が居なければ、世界は滅んでいた。私が居なければ、目の前で偉そうに踏ん返っている貴方たちも居なかった。そうでしょう？

質問④―問②、問③の回答を以って、君が聖女では無い事は証明された。ならば、問①の回答には虚偽が含まれていたと我々は判断する。再度、問う。質問①―なぜ世界を救おうと思ったのか。―二度目の虚偽は、許されない。

……あは。あはは、アハハ！なんだ、やればできる子じゃないですか。うんうんうん。その目です。最初から、その目で私に聞いてくれればよかったのに…貴方たちは私を人と見て居なかった。魔術師故の傲慢ですか？非魔術師は自分よりも劣る存在だと？浅慮です。眩暈がします。

質問⑤―質問①の回答を求む。以降、他の言動を許可しない。

答えている最中です。急かさないでください。早漏は嫌われます

よ？——なんて、冗談ですって、そんな目で睨まれると怖いです。答えないのではなく、答え難いなんてこと、察してくれてもいいじゃないですか。

：確かに私は魔術の素人でレイシフト適性が辛うじてあるだけの一般人に過ぎない。サーヴァントに十分な援護も出来ない最悪のマスターです。けれど、どうあれ私が世界を救った。大勢の人の力を借りて、沢山の英雄の助力を得て、…多くの犠牲を払って世界は救われた。

私は、世界を救った。その偉業を誇ります。ええ、誇りますとも、絶対的にそこだけは譲らない。

けれど、どうして世界を救おうと思ったのか。その切っ掛けは、残念ですけど、誇れないんですよ。私は—— “死にたくない”。ただその一念のみを以って世界を救ったんです。

質問⑥——その回答は回答足りえていないと我々は判断する。 “死にたくない”、その思いを我々は軽んじない。命への執着は我々魔術師もまた持ちえるもの。不死の探求により始まった魔道は数多く存在する。だが、しかし、人類焼却式、彼らとの対峙において、それは世界を救う回答足りえない。世界を救う過程で、君は死よりも辛い苦痛を味わったのではないか。

：ええ、なんだ、知っているじゃないですか。はい。その通りです。私はレイシフトした時代で沢山の英雄たちと出会い一緒に様々な “世界” を旅してきました。そして、沢山の綺麗なものと沢山の醜悪なものを見てきました。国が滅ぶのを何度も見てきました。いわれのない虐殺を繰り返して見えてきた。正義の蛮行を睨に焼き付くほど見えてきた。人間狩りを、奴隷制度を、仲間割れを、非人道兵器を、人身売買を、姥捨てを、親殺しを、子滅らしを、文化の弾圧を、遺産の大量破壊を、資源の枯渇を、差別と偏見を、復讐と逆襲を、男尊と女卑を、飢餓と疫病を、見てきた。私自身、何度も酷い目にあっただけれど、それでも私は諦めきれなかった。生きることを——諦めたくなかった。だから、いつか、いつか、いつか、いつか、いつか、いつか世界を救える

と信じて戦った。

質問⑦――その結果、君は世界を救った。それは紛れもない事実である。では、その救われた世界で君はなにを成すのか。人類最後、人類最悪を自称するマスター。

決まっているじゃないですか。家に帰るんです。

質問⑧――自身と周囲の安全の保障。それのみが望みか。世界を救った割には殊勝に過ぎる願いに不信を覚えるものもいる。

そんなの知りません。一年分の労働の対価はダ・ヴィンチちゃんからしっかりと貰いましたから、貴方たちから貰うものなんて小石一つもありません。せいぜい、私が居なくなったらカルデアで私が残した残飯でも漁っていればいいんですよーだ。あは、アハハ！貴方たちにとつてはそれがとても価値のあるものなんでしょう？

質問⑨――我々の中には君が望むのならば君をそれなりの待遇で迎えると言う者もいるが、どうする。

あれれ、おかしいな。私みたいな素人マスターに価値なんてないんじゃないかったですか。まあ、別に貴方たちの心変わりなんて、どうでもいいですけど。答えはノーですし！おすし！言ったでしょう。私はお家に帰るんです。陰気な貴方たちの顔なんて見ていたくもないですし！おすし！

質問⑩――では、これが最後の質問となる。君は本来、世界を救うはずだったマスター達。カルデアのAチームのマスター7名をどう思うか。

……別になんとも思わないかな。顔も名前も知らないですし、まあ、あえて無理やり感想を出すならそうですね。寝坊助さん達ですかあ？あは、アハハ！残念でしたー。貴方たちが救うはずだった世界はこの美少女☆マスター・立香ちゃんがもう救っちゃいましたよーだ。アハハ！

2017年12月31日。

人類焼却式―魔神王ゲーティアの3000年の大望が藤丸立香の手によって碎かれ、世界が救われてから数日後、世界を救った英雄として称えられるべき藤丸立香は拘束されながらの6時間に及ぶ審問会からようやく解放されカルデアの廊下―独房となった謹慎室への帰り道を歩いていた。その頭の上には小さな白い獣。元・災厄の獣であり現・可愛らしい小動物であるフォウ君が乗っかっている。

「うんうん。そうだよ。あはは、わかりみが深いよ、マジで」  
頭の上に乗せたフォウ君の鳴き声に合わせて返事をしながら若干時代遅れのギャル言葉を駆使する立香をカルデアから魔術協ロンドン会に送られた報告書の通りに「普通の一般人」と見るかは判断の別れる事であったが、少なくとも立香を拘束し謹慎室へ送り届ける役目を負ったNFFの傭兵からすればどう見ても「普通の一般人」には見えなかった。

いや、この年頃の少女が碎かれ意味すら捨てた言語を話すこと自体は何も珍しいことではない。

ただ拘束されているという普通とは言えない状況で普段通りの言葉遣いで、よりにもよって小動物と会話しているという事態が、「普通」ではないのだ。

そう拘束だ。立香は傭兵に見張られているのではない。拘束されている。白と黒と金属で出来た拘束具を着せられた状態で歩かされている。

普通ではない状況。普通ではない。日本という小国で生まれ魔術を知らぬ普通の一般人とされた藤丸立香は普通では無かった。否、カルデアから魔術協会に送られた藤丸立香のプロフィールに嘘偽りはなかった。



立香は普通の一般人だった。ただ変わってしまった。レイシフト。人理の航海をへて普通の少女は変わり果ててしまった。一介の傭兵にはそうとしか思えなかった。

「ねえ、傭兵のお兄さんのお給料っていくらなんですか？」

立香から唐突に掛けられた質問に答える権利を傭兵は持たない。彼に許されている権限は審問会を終えた立香を謹慎室まで送り届けることだけ。だから、質問に沈黙を返す傭兵に対して立香は返事なんて期待していなかったと言わんばかりに直ぐに言葉を重ねる。

「私、実はお金持ちなんですよ。人生を遊んで暮らせるくらいの無駄金が世界を救ったら転がり込んできたんです。だから、傭兵のお兄さんが貰っているお給料の倍くらいは出せると思うんです。だから、NFFなんかじゃなくて私に雇われませんか？」

立香の口から出る笑えない冗談に笑う権利も傭兵は持たない。それは彼の領分を越えている。許されているのは、立香から許されているのは、彼女を謹慎室まで送り届けることだけだ。

拘束具で拘束されているものが拘束している側に権利を課す。その異常な事態は言うまでもなく異様なもので、傭兵にとって初めての経験で、マスクの下で流れる汗に苛立ちながら、銃を握る手が震えることだけは必死にとどめていた。

その様子を見ながら、立香は嗤っていた。

「あは、アハハ！そんなにおっかなびつくりしないでくださいよー。冗談ですよ。私の、私たちの救世の冒険の対価を貴方なんかにあげる訳ないじゃないですか。ねー。フォウ君」

そう嗤う立香の微笑は美しく可愛らしかった。けれど、その言葉の中には傭兵への、いや、カルデア乗っ取りを考える新所長―ゴルドルフ・ムジークとそれに与するNFFへの嫌悪を感じずにはいられなかった。否、立香はそれを隠そうともしていないのだろう。だからこそ、嗤う。美しく嗤う。可愛らしく嗤う。世界を救った自分を拘束し、家に帰りたいだけの少女を監禁する奴らを差別なく侮蔑していた。

それを傭兵は子供の様な駄々だと思った。そうだ。カルデアを手

に入れようとしたゴルドルフのやり方は決して責められるような手段ではなかった。むしろ真つ当に私財を投じてカルデアの機関すべてを買い取り纏め上げようとする正道だった。

勘違いされそうになるがゴルドルフのやろうとしたことは只の合併と買収だ。その上でゴルドルフは職を失うカルデア職員の再就職先まで面倒を見ようとしていた。善良なやり方だと、言っても良かった。

それに対して悪感情をむける立香こそ、責められて然るべきだった。子供の様にとーいや、もとより少女であるのだから、子供の様な駄々は仕方ないしろ、それを咎める者くらいはいても良かった。

傭兵である彼は自分をできる人間だと思っていた。けれど、それが間違いであったことを知ったのは…ほんの数日前のことだった。

2017年12月26日。

その出来事はカルデアの新所長となったゴルドルフがNFFの傭兵を率いてカルデアの心臓部である管制室にやって来た時に起きた。ゴルドルフを迎え入れる場にはカルデアの代表代行であった現存する唯一のサーヴァントーレオナルド・ダ・ヴィンチの他に多くの職員。そして、立香もいた。この時はまだ立香は只の普通の少女ー(世界を救ったマスターに対してそんなことを言うのもどうかと思うが)ーでしかなかった。すくなくともゴルドルフやNFFの傭兵達。そして、傭兵達を束ねるNFFの代表である美女ーコヤンスカヤでさえ、そうであった。

ゴルドルフに対応したのはダ・ヴィンチで立香はダ・ヴィンチとゴルドルフとの会話に入って来ようともせず頭の上に乗せたフォウ君と戯れつつ、隣にいた色素の薄い少女ーカルデアの報告書にも載っていたデミ・サーヴァントであるマシュ・キリエライトにちよつかいを掛けてケラケラと嗤っていた。それがゴルドルフの目に留まった。ゴルドルフとしても自身の威厳を示さなければいけない場で、ふざけて居る子供がいれば、一言二言は言わないわけには行かない。それで

もその場でのゴールドルフは言葉を選んで立香を注意していたように思う。少なくとも罵倒を浴びせて詰つたりはしなかった。——「能天気な顔だね。君い。まるで蜂蜜をかけたマフィンの様だ」くらいの事は言ったかも知れないが、その程度だ。

それに対しては立香も別に気にした様子はなかった。自分の第二の故郷とも言えるほど濃い時間を過ごした場所を奪いに来た太っちよに苛立つてはいたのだろうが、——「あはは、マシユ。見てよ。でっかいマシユマロが喋ってる」くらいの事しか言わなかった。

だから、間違えたのはその後の対応だった。雇い主が威厳を示さなければいけない場の御ふぎけを注意されて軽口を返した少女に対して一人の傭兵が銃口を向けた。

それは責められることだったかもしれない。少なくとも雇い主の命令もなく立香に銃口を向けてしまったその傭兵を同じ傭兵である彼は傭兵失格だと思つたし、雇い主であるゴールドルフ自身も直ぐにその銃口を下げるように命じようとした。

けれども、それは、決して、両腕で贖わなければならない罪では無かった。

——「おいおい、テメエ、誰のマスターにちよっかい掛けてんだ？

立香に銃口を向けていた傭兵の両腕が切り落とされた。鮮血が、舞う。一瞬、止まった時間を動かしたのは両腕を失った傭兵の悲鳴だった。誰もが目を疑う中で「ソレ」は「ソコ」に確かに存在していた。

人一人を容易く串刺しにするだろう大きな直槍。重厚な具足を身に纏いながら兜は無く、血の様に赤い髪は無造作に束ねられていた。そして、何より印象的なモノはその眼——明らかに正気ではない狂気に呑まれた眼。

言われるまでもなくその場の誰もが理解した。「ソレ」が、「コレ

「こそが、「英<sup>サーヴァント</sup>霊」。

ダ・ヴィンチ以外に存在しない筈のサーヴァ

ントが其処に居た。しかも、厄介なことにそのサーヴァントはダ・

ヴィンチとは違い立香<sup>マスター</sup>に敵対行為を取った者に対して一切の容赦を

見せなかった。否、そのサーヴァントの正体がかの戦国武将・森長可だと知る者なら斬り捨てられなかったただけ容赦はしたのだと言つた

だろうが問題は其処ではない。

鮮血が舞った。悲鳴が響いた。居ない筈の「モノ」が存在していた。その現実にも誰かが絶句する。まさかカルデアの代表代行を務めていたダ・ヴィンチが、万能の人である彼女が魔術協会への虚偽の報告を行い、あまつさえこんなお粗末な形でそれを露見させるとはゴルドルフはおろかコヤンスカヤでさえ思わなかった。

けれど、それは違った。確かにダ・ヴィンチは魔術協会に虚偽の報告をしていた。確かにダ・ヴィンチの他にサーヴァントは存在していた。しかし、それは森長可ではない。万能の人であるダ・ヴィンチが居るかもしれない「見えない敵」への対応策として用意していた。敵には見えていない味方<sup>サーヴァント</sup>は今も工房の奥で気配を消している筈の名探偵シャーロック・ホームズだけだ。

この瞬間までダ・ヴィンチの頭には森長可の「も」の字もなかった。

だからこそ、ダ・ヴィンチは目を見開きながら立香を見た。それを見てその場の誰もが理解した。ダ・ヴィンチもまた立香を守る為にずっと存在し続けていただろう森長可を知らなかったことを――

――あは、あはは、アハハ！

立香は嗤った。美しく嗤った。可愛らしく嗤った。驚く大切な仲間たちと戸惑う可愛い後輩も置き去りにして嗤いながら両腕を切り落とされた傭兵へと近づいた。

――もう、森君つてば、駄目だよ。私、ちゃんと大人しくしてつてお願いしたのに。

――でもよ、コイツ、マスターに筒なんて向けやがったんだぜ。殺されても仕方ねえよなあ。

――そうかもね。でも、そうじゃないんだよ。ありがとう。でも、ごめんなさいなんだよ。森君。わかった？

――…………意味わかんねえけど、了解<sup>おう</sup>。

誰もその会話に入り込めなかった。立香の大切な仲間たちも、立香の可愛い後輩も、誰も主人<sup>マスター</sup>と使い魔<sup>サーヴァント</sup>の会話に入り込むことは出来なかった。手負いの傭兵へと近づきながら、欠片もその傭兵への関心を

割かずにサーヴァントと会話をしている立香が何処かオカシイトと気が付きながらも、口に出せなかった。

立香は両腕を切り落とされ痛みで失神しかける傭兵の元へと辿り着くと白い制服が血に塗れるのも厭わずに跪き傷口を見る。そして、緑色の光が傷口を包むと血が止まった。それは難しい魔術ではない。立香の着る制服―魔術礼装・カルデアに装備されたただの応急手当てだ。血が止まろうとも傭兵の失われた両腕がまた生える訳でも繋がる訳でもない。それでも、微笑みながら傷を癒す立香の姿はまるで聖女の様にも見えた。

その光景を見て後輩―マシユは安堵した。傷を癒すその優しさはマシユの知る立香そのものだった。

ただその傷は立香のサーヴァントである森長可の負わせたもので、その傷を癒した後の立香は何とか意識を保つ傭兵に対して微笑みながら、嗤いながら、言った。

――腕、無くなつちやつたね。でも、命があつてよかつたって感謝して義手でも付けければ良いよ。まあ、ダ・ヴィンチちゃんとは違つて貴方には義手なんて似合わないと思うけどね！

その言葉は悪意に満ちていた。隠す気のない嫌悪に塗れていた。そうして、ゴルドルフやコヤンスカヤはおろかダ・ヴィンチやマシユもようやく気が付いた。立香が、怒つていたことを―第二の故郷とも呼ぶべき濃い時間を過ごした場所、カルデア。人理継続保障機関・カルデアに、人生に良い事なんて一度も無かつたと泣きながら消えていった彼女のカルデアに、無遠慮にも土足で踏み入ってきた者達に対して、あまつさえ自分に銃口を向けた者たちに対して、立香はただ普通に苛立ちではない怒りを覚えている。

――あは、あはは、アハハ！………ほんと、嫌になる。どうして私にそんな態度がとれるのかな。私はカルデアを代表する、人理を救ったマスターだよ？

こうして立香は拘束されることとなった。

ゴールドルフやコヤンスカヤ、NFFの傭兵達にとって意外だったのはそんな立香が易々と拘束具を着せられることを受け入れたことだった。大聖杯やそれに連なる膨大な魔力の使用なく単身でのサーヴァントの使役というどう考えても魔術の域を出た文字通りの“奇跡”を起こす立香がその気になればそれこそカルデアからゴールドルフ達を追い出すことだって出来たかもしれない。

しかし、立香はそうせずに現界した森長可を消した後、直ぐに拘束を受け入れた。立香とて魔術協会に正式にカルデアの新所長と認められたゴールドルフと本気で戦う気などない。業腹ではあるが、彼女は既にカルデアからの退去を受け入れている。そもそも挑発されて森長可が勝手に現れなければ自分は何の問題も起こす気なく日本に帰国していたと立香は嗤う。

その笑顔は今までの立香の笑顔となにも変わらないもので、拘束具を着せられた状態で彼女と再会したマシュは何処かオカシイ彼女の事を変わずに“先輩”として“大切な人”として受け入れると決めた。

ダ・ヴィンチは“今の立香”を測りかねていた。見た目に記憶、他の身体的情報、魔術的に見ても“今の立香”は“前の立香”と何の変りもない。けれど、なにかが違っている。それを測ろうとしているダ・ヴィンチに対して立香は少しだけ寂しそうに笑うのだった。

ダ・ヴィンチにとってそれは時間を掛けなければならぬことだった。立香は拘束された。しかし、それは立香の脅威が消えたことを意味しない。現界を解き姿を消した森長可は未だ“ソコ”に居て立香を守っている。彼がその気になれば立香から拘束具を外す事なんて容易いこと、そして、立香はだからこそ拘束を受け入れたことにダ・ヴィンチは気が付いていた。悪辣だと思いましたが、形だけでも拘束され周りを安心させている優しさだとも思いたかった。少なくともゴールドルフはあの後の立香の謝罪を受け入れ、拘束されることを約束した彼女をおっかなびつきりしながらも尊大な態度で許した。先走った傭兵にも非はあると認める事すらした。そのことからダ・ヴィンチはゴールドルフを悪人ではないとみていた。居るかもしれない

いと思った。『見えない敵』は少なくともゴルドルフではない。

『見えない敵』は、ゴルドルフの裏に潜む何者かか、あるいは立香を変えてしまったかも知れない何かか、万能の人にして簡単には答えの出ない問だった。

だから、致命的とも言える時間が過ぎてしまっていた。

## 立香ちゃんは激怒した②

2017年12月31日。

拘束具を着せられた立香の寝台は“壁”だ。両腕は胸の前で交差クロスさせられ動かせない。辛うじて歩くことの出来るように調整された両足の拘束も謹慎室の壁に備え付けられた器具に嵌めることで完全に身動きはできなくなる。他のカルデア職員たちとは違い完全拘束を約束させられた立香が動くことの出来る時間は審問会の行き帰りと食事・排泄の短い時間だけだった。

ガシユンと機械音が鳴る。立香の身体が完全に“壁”に嵌め込まれ拘束されたことを確認すると傭兵は安堵のため息を漏らしながら部屋から出ていった。

「……これ見よがしなため息に立香ちゃんはプンプンだよ。ねえ、フォウ君もそう思うでしょ」

立香の頭の上で白い毛玉―フォウ君がもぞもぞと動き鳴き声を上げた。拘束されて以降、立香の話し相手はフォウ君だけだ。マシユとダ・ヴィンチとは一度しか会えていない。審問会の送り迎えをする傭兵は声を掛けても返事もくれない。拘束されている立香を揶揄いに来た―（立香視点）―美人秘書・コヤンスカヤや神父・言峰は立香と一度だけ話をするともう現れなくなってしまう。

つまりは立香は――暇なのである。

「はあ、フォウ君をクンカクンカするのでもいいけど、そろそろマシユに会いたいなー。マシユと一緒にお風呂に入りたくないなー。どさくさに紛れて脇をペロペロしたいなー」

だいぶ人としてどうかと思うことを素直に口に出しているが、コレはダ・ヴィンチの言うところの変わってしまった部分ではなく、立香（※この物語の立香）の平常運転である。立香は明らかに自分に“先輩”として以上の好意を向けてくれる後輩とイケナイことをしないほど、出来た人間ではなかった。人類救済の旅という限界の状況で呼び起こされる生存本能を抑えられなかった。だから、立香はマシユと



色々といけナイことをした。そしたら、歯止めは利かなくなった。仕方ない。立香は健全な少女で、その周りには自分に好意を向けてくれる数多くのサーヴァントたちがいた。そんなサーヴァント達は皆、綺麗で、格好良くて、素敵だった。仕方ない。立香は色々なサーヴァントといけナイことをした。歯止めは利かない。

具体的には清姫の前でマッシュと※※※※して、嫉妬でベッドを燃やしそうになった清姫にマッシュと一緒に※※※※してあげたりした。またある時はデイルムッドに無理を言って魅了の魔術をかけて貰って本気でイチャイチャラブしながら朝まで※※※※したりした。またある時は大勢のハサン達と※※※※したりした。またある時は恩着せがましくベデイヴィエールに迫り※※※※して貰ったりした。またある時は酒呑童子と一緒に茨木童子に※※※※したりした。またある時はシエヘラザードと一緒にフェルグスの部屋に突撃して返り討ちにあい朝まで※※※※されたりした。なんかもうめちやくちやだった。立香の部屋のベッドが濡れていない日は無かった。やり過ぎて(ジャンヌとジルの絡みが見たいと言って)殺されそうになったり、ナイチンゲールに立香の個室が性病の温床にならない様にと(立香は綺麗な身体で相手はサーヴァントなので心配はないが)監視されるようになったりしたが、それは立香には些細なことだった。

ともかくとして立香が言いたいのは人肌が恋しいということだった。いや、フォウ君の獣肌はとてもモフモフで心地いいがそれだけでは物足りない。立香は普通に欲深い。

「もーいくつ寝るとーお正月ー。お正月になったら、家に帰ってゴロゴロするんだー。それでマッシュの検査が終わったら、マッシュを家に呼んでお父さんとお母さんに紹介しなきゃ。私の可愛い後輩で、お嫁さんですって！あは、アハハ！同性婚の出来る国に引っ越さなきゃなー」

年明けと共に立香は解放される。以後、カルデアと魔術協会は立香に干渉しない。それがゴルドルフと審問会と立香の間で交わされた約束だった。

立香は純粹だった。純粹で無垢で、  
“そこ”は普通の少女だった。

だから、立香は約束は果たされるものだと思つてはいなかった。

太つちよ紳士―ゴルドルフの名譽の為に一応は断言しておこう。彼は立香との約束を守る気でいた。ゴルドルフが欲したのはカルデアであり、正直、**「奇跡」**を起こす少女は手に余つた。それにいくら立香が他に類を見ないほど貴重な存在だったとしても、意に沿わない形で少女を従わせるというのはゴルドルフの主義に反するものだった。それが彼が経営者には向いても魔術師には向かないと言われる**「甘さ」**であつたが、立香に対する対応として正しかつた。

間違いを犯そうとしていたのは魔術協会。彼らは立香との約束を守る気はなかつた。单身による英霊の使役という**「奇跡」**を起こす立香は魔術師にとつて文字通り喉から手が出る程に欲しい貴重な存在だ。魔術協会は何としても立香を手に入れようとしただろう。少女が帰りたいと願つた場所を踏み躪り―少女の両親すらも利用したに違いない。そうなれば、立香は**「※※※」**する。激おこぶんぶん丸どころではない。怒髪、天を衝くどころではない。ダ・ヴィンチの言うところの**「今の立香」**は確実に**「※※※」**する。それをできるだけの意思と力を立香は持つている。

英霊・戦国武将―森長可。だけではない。立香の中にはあと5騎。あの時、あの場所で、マシユもダ・ヴィンチも誰も見ていない場所で、誰でもない彼と最後に戦つた時に力を貸してくれた英霊が居る。

立香との約束を魔術協会が破れば、彼らを率いて立香はたった一人で時計塔ロンドンに攻め込むだろう。そして、攻め込んできた立香と魔術協会は戦うことになる。その戦いの結末は、わかりきつてのことだ。いくら英霊、いくら英雄と言えどたった6騎と一人のマスターでだけでは魔術協会は倒せない。魔術協会は立香に勝利する。ただし、甚大な被害を出しながら、ロンドンを火の海に変えながらの勝利になつたことだろう。そして、死の間際、立香は最後の意地として自分の遺骸をサーヴァントの宝具によつて塵も残さず消し去つたに違いない。

魔術協会はロンドンを火の海に沈めながら何の成果も得られずに立香に勝利する。

そんな最悪の結末が十分にあり得た。否、今から起こる最悪な出来

事が無ければ物語は最悪な結末を辿っていた。けれど、だから、これから起こることに感謝しろなどとは立香の前では決して言うてはならない。何故ならばこれから起こる最悪は、立香のこれまでの旅の否定である。カルデアへの否定である、人理への否定である。

そして、最後まで泣いて消えていった彼女と誰でもない彼への否定であると立香が思わずにはいられないからだ。

2017年・12月30日。この日、世界は「漂白」される。

カルデアに非常事態を知らせる警報が鳴った。

立香は目を見開きながら、その音を聞いていた。

ゴルドルフは痛みと絶望の中にいた。

「…ああ…ああ、誰か、誰か…！誰かいないのか！誰でもいい、誰か、誰か——！」

人理継続保障機関・カルデアは、彼のモノとなる筈だった場所は、現在、正体不明の軍勢に占拠されようとしていた。カルデアの心臓と言えるカルデアス。それに繋がれたコフィンの中で眠っていた世界を救うはずだった7人のマスターの救出。その術オペレーション式は完璧だった。万能の天才たるダ・ヴィンチ。そして、自分が指揮をとるのだから万に一つの失敗も無いと信じていたゴルドルフだったが、それが成功した時は思わず小躍りしてしまっただった。

しかし、喜びも束の間。この瞬間を以って、世界の「漂白」が明るみに出た。

オペレーションは完璧だった。けれど、コフィンの中に7人のマスター。世界を救うはずだったカルデアAチームの姿は何処にもなかったのだ。

そして、鳴り響いた警報が電磁波の一切の検知を、宇宙線の一切の検知を、人工衛星からの映像が、マウナケア天文台からの通信が、消失したことを知らせてきた。

星からの映像が、マウナケア天文台からの通信が、消失したことを知らせてきた。

其処から先は電光石火の出来事だった。称賛する他にない制圧だった。カルデアに攻めて来たのは黒い装束の兵隊とそれを率いる白い少女。彼らの制圧により、既にゴルドルフの私兵―NFFの傭兵たちは壊滅。遂に黒い兵隊たちはゴルドルフの眼前に迫ってきていた。

黒い兵隊の持つ鎌で切り裂かれる。鮮血が舞う。痛みが走る。抵抗する様に打ち出した魔銃の玉が黒い兵隊を貫く。倒れる。起き上がる。その繰り返しだ。黒い兵隊は減らない。増えることはあるが減ることがない。明らかに人ではない。人間でない。

「ひいいい!?誰か、誰かいないのかあ!なんだって私がこんな目にあう!?くそう、私を誰だと思ってるんだ!私はゴルドルフ・ムジークだ!ムジーク家の長男なんだぞ!」

館内放送用の手持ち小型マイクを握り助けを求める。返事はない。黒い兵隊は耳を貸さない。切り裂かれる。鮮血が舞う。痛みが走る。

「あがつ!?き、今日という日からカルデアを栄光に導く男!栄光、そう、栄光!そのはずだったのに……………」

黒い兵隊は耳を貸さない。切り裂かれる。鮮血が舞う。痛みが走る。

「ひいいい、いたい、いたいいいい……………!ああ……………!あ……………!ひっぐ、うう、うううう……………!なぜだ。なぜなんだ。なんでいつも、最後になって裏切られるんだ!」

切り裂かれる。鮮血が舞う。痛みが走る。

「ああ、いつもこうだ!私はいつもこうだった……………!」

切り裂かれる。鮮血が舞う。痛みが走る。

「何処に行っても私はのけ者だった。敗者だった。つまはじき者だつ



ゴルドルフには目の前の光景が信じられなかった。目の前には拘束具を着たままの立香が、まるで自分を守るかの様に、黒い兵隊と自分との間に何時の間にかに立っていた。

「は……え……なぜ、お前が此処にいる？なぜ、お前が私を守ろうとしている？だって、お前は、私の事が……憎んでいた、はずだろう？嫌悪を、隠そうともせずに、それなのに、なぜ？」

ゴルドルフの言葉の通りだった。立香はゴルドルフが嫌いだった。だから、見ていた、ずっと見ていた。

カルデアに異常事態を告げる警報が鳴り響き、謹慎室の「壁」の拘束を破壊し抜け出して、ゴルドルフを見かけてから、ずっと見ていた。ゴルドルフが黒い兵隊に追われるのを見ていた。ゴルドルフが鎌で斬られるのを見ていた。ゴルドルフの抵抗を見ていた。ゴルドルフが痛みで涙を流すのを見ていた。最後まで、見ていただけのつもりだった。だって、立香はゴルドルフが嫌いだから。

立香だって現カルデアの解体が仕方のないことだということを知解していた。ゴルドルフが悪くないこと位わかっていた。それでも、立香はゴルドルフが嫌いだった。それは仕方のないことだ。普通の少女が持つ普通の嫌悪感だ。

ゴルドルフは運が悪かったのだ。仕方のない。此処に立香が居るといふ幸運は本来なら起きるはずのない幸運だったのだから、立香がゴルドルフを助けられないのも仕方のないことだ。

そう思い立香は最後まで見ていただけのつもりだった。大勢の一般人がそうであるように。

だが、しかし、立香はゴルドルフの最後の言葉を見無視できなかった。

人生に良い事なんて一つも無かったと泣きながら消えていった女性がいいた。立香の手は、彼女には届かなかった。救えなかった。助けられなかった。助けたかった、はずなのに。

「古傷がね、痛い。ゴルドルフさん、女の子をイジメたら、駄目なん

だぞ」

「な、なにを、君は言っている。やはり、君は何処か、オカシイのか？」  
「あは、あはは、アハハ！ゴルドルフさんってばひどーい。折角助けてあげようかと思っただのにー。そんなこと言われちゃうと立香ちゃん  
のやる気はダダ下がりなんだぞ。助けるの止めちゃおうかな？」

「な!?ま、待て待て待て!?此処までやって来てそれはないだろう!?敵  
とはいえ、目の前で死にそうなのを救助しないのは国際法違反だ!そ  
して私は別にお前の敵という訳ではなからう!？」

「私、そういう難しいこと知らないから。素人だから。……………ねえ、ゴ  
ルドルフさん。酷い事言って、ごめんなさいは？」

「……………すまん」

「うん。許しちゃう。まあ、正直、今はゴルドルフさんと遊んでいる時  
間も惜しいみたいだしねえ。ねえ、黒い兵隊さん。貴方たちは、誰?  
どうして此処に来たの?どうして、カルデアを滅茶苦茶にするの?ど  
うして、彼女の夢を土足で踏み躪って平気な顔をしていられるの?」

黒い兵隊―殺戮猟兵は答えない。彼らは皇帝ツァーリの威光を示す為のみ  
に存在し、ただその為だけに動く人形に過ぎない。だからこそ、立香  
の問いに答えない。ただ鎌を振り上げるだけである。

「…そう。言葉が通じないなんて、哀しいね」

立香の言葉には嘘がない。この時の立香は本当に心の底から悲し  
んでいた。カルデアをこんなにした黒幕の正体が知れなくて、  
殺戮猟兵オブリチキニが仕える皇帝ツァーリが誰なのかを知らなくて心底、ガツカリした。  
そして、その悲しみに答えるように現れた猛き武将の手によって  
殺戮猟兵オブリチキニは四散に割れて消滅した。

ゴルドルフは目の前の光景を疑った。

「(これが、これが、報告書にあった未熟なマスターだというのか?)」  
立香の命もなく現れ消えた森長可。去り際に自分の事を虫けらで  
も見るように見下して消えていったサーヴァント。彼は完全に立香  
の意思を命令もなく遂行し魔力の消費を最小限に抑えて消えていっ  
た。

「(英霊との完璧なまでの意思の疎通。これで未熟だと言うのなら、一

流のマスターは目配せ一つで超高度な作戦内容をサーヴァントに伝えられる化け物だともいうのか?!?」

拘束具を着たままに殺戮<sup>オブリチキニ</sup>猟兵を容易く蹴散らした立香はゴールドルフの方へと改めて向き直ると、床に腰を落としているゴールドルフと視線を合わせる為にしやがみながら言った。

「ねえ、ゴールドルフさん。この拘束具、そろそろ外してもらえませんか?」

「え、あ、ああ、うん。まあ、そうだな。非常事態だ。仕方なかろう。しかし、その、あれだ。別にお前、自分でもこれは外せるだろう?なぜ私に許可を求める?」

「あは、他人<sup>ひと</sup>に嵌めて貰った物は他人<sup>ひと</sup>に外して貰うから意味があるんじゃないですか」

「そうなのか?いや、意味が分からんな。まあ、いいか」

ゴールドルフが立香の拘束具の留め金を外す。立香は拘束具から解放された。拘束具を脱いだ立香の肢体が晒される。オレンジの下着姿だった。当然だ。拘束具と拘束服は一体型で、それは決して制服の上から着るようには造られていない。

立香の下着姿を見てしまったゴールドルフは目を逸らしながら、上着を脱いで立香に渡した。

「…私の上着を着なさい。少女が下着姿でうろつくのは、問題がある」

「えー、汗臭いから要らない」

「いいから着なさい!紳士である私の前ではしたない格好をするんじゃない!?!」

「…仕方ないなあ」

澁々と言った様子でゴールドルフの上着を羽織りながら、立香はゴールドルフに問いかける。

明らかにサイズの合っていない上着を羽織った立香は図らずも裸ワイシャツを想わせる意外と煽情的な姿に成ってしまったが、ゴールドルフは真つ当な大人であったので、少女である立香には欲情しなかった。ゴールドルフはコヤンスカヤの様な蠱惑的な美女が好みだ。

「ねえ、私、拘束されていたせいで状況がよく分かってないんですけ



ど、敵はどうやってカルデアの防衛ラインを突破したんですか?」

「それは私も知らん。ただ奴らは外から押し寄せ東区画から侵入した。既に東区画は奴らの手に落ちている」

「ふーん。東から攻めてきて、そのまま進んでたら、今頃は管制室まで来てますかね。よし、じゃあ、向かう先は管制室で決まりですね!ゴルドルフさん!行きましょう!レッツゴーです!」

「いやいやいや、待て待て待て待て、君、何を言っているのかね?君自身が言ったことだからね?管制室には奴らの大群がいるのだぞ?」

「ええ、そして、たぶん奴らの親玉がいる場所ですよ」

「そうだよ?だから、絶対に近づいちゃ駄目だろう?」

「だから、行くんでしよう?」

かみ合わなかった。太つちよ紳士—ゴルドルフと半裸少女—立香の言葉と考え方は明らかに致命的にかみ合っていなかった。立香は呆れたようにため息を吐きながら、変な事を言っているゴルドルフに物事の考え方を一から説明してあげることにした。

「いいですか、カルデアを、こんなににした敵の親玉はたぶん、管制室にいるんですよ?なら、行かなくちゃ。戦わなくちゃ。此処は私の大切な思い出の一杯あるカルデアで、ゴルドルフさんの栄光はこのカルデアから始まるんでしよう?なら、取り戻さなくちゃ駄目です。私、なにか間違ったことを言ってますか?」

「…」

言っていないかった。立香は何も間違ったことを言っていないかった。正体不明の勢力からカルデアを取り戻す。それは言うまでもなく「正しい選択」だ。出来るかどうかという問題を棚上げするなら、それ以外に取るべき手段なんてない。ただその棚上げする問題が、問題なのだ。敵は未知数。されどその勢力は膨大で強大であることは予想できる。

それに対して今の此方の戦力は立香とゴルドルフの二人のみ。確かに立香にはサーヴァントと言う強力な力がある。しかし、サーヴァントは強力だが絶対の存在ではない。戦って勝利は約束されない。

負ければ待っているのは「死」だ。

ならば此処はいつたん引き、反撃をするにしてもダ・ヴィンチ達と合流してから考えるべきだと思うゴルドルフの考えが真つ当だ。しかし、ゴルドルフはそれを口に出さなかった。

気が付いてしまったのだ。敵は未知数。されど膨大で強大。そう約束された戦場で戦ってきたマスターこそが、立香だった。

人類焼却式―魔人王ゲーティア。おそらくゴルドルフが逆立ちして百回戦っても勝てない相手に勝利し世界を救ったマスターが立香なのだ。

かみ合わない筈だ。初めから人間としての種類が、違っていたのだとゴルドルフは思った。

「…付き合いきれん。私は逃げるぞ。戦うのなら、一人で戦え」

「そうですか。まあ、そうなりますよね。じゃあ、ゴルドルフさん。さようなら！無事に逃げられて、もしダ・ヴィンチちゃんやマシユに会うことがあったら伝えてください。立香は立派に戦って何処かで死んでいるかもって！あは、アハハ！」

そう言つて立香はゴルドルフの前から消えた。走つて消えた。管制室に向かうその小さな背中を見送りながら、ゴルドルフは奥歯を噛んだ。

「なんだ、あの娘、狂つてなどいないではないか。…自分が死ぬかも知れないと、理解しているでは、ないか」

何もできない。ゴルドルフでは、立香の隣に立つて戦えない。それに対する悔しさをゴルドルフが持たない訳ではない。只一人で戦場に向かった立香に対して、ゴルドルフが出来ることは館内放送用の手持ち小型マイクを持つことだった。

先ほどまでのゴルドルフはコレで助けを呼んだ。《誰かいないのか》と叫んだ。

「…カルデア内にいる私ではない誰かに伝える。助けてくれ。…頼む。助けてやってくれ。あの娘が、藤丸立香が、管制室に向かった。…カルデアを救う為に、一人で、戦いに行った。…頼む。…誰か、助けてやってくれ」

“ ゴルドルフはもう叫ばなかった。けれど、その言葉は確かに “誰か” に届いていた。

## 立香ちゃんは激怒する①

敏腕美人秘書—もとい今回のカルデア襲撃の首謀者の一人であるコヤンスカヤは目の前の光景を疑った。まさか馬鹿正直に本当にやってくるとは思ってもみなかった。ゴルドルフの館内放送。それはゴルドルフが立香に出来る唯一の助力。そして、少し考えればわかることだが、それはゴルドルフがやってはいけなかった敵への助力でもあった。

立香が管制室に向かった。それを敵側に知らせてしまった。それを立香も聞いて知っていた。

だから、来る筈が無いと考えていた。来たとしても裏をかくとか裏口を使うとかそれくらい的事はしてくると思っていた。けれど、そんなことはなかった。人類最後のマスター。汎人類史最後のマスターは、堂々と正面から管制室に乗り込んできた。

半裸で。

「くしゅん。…なんか部屋が寒くないですか？」

寒い。どこの話ではない。管制室の床や壁は既に凍り付いていた。それを成したのは殺戮猟兵オブリチキニを率いる白い少女—初雪の様に白い皇女はコヤンスカヤの隣に立ちながらやってきた立香を残念そうな目で見た後、コヤンスカヤにコレが私の敵なのかと視線で問いかけた。

コヤンスカヤにそんなことを言われても困る。管制室にやっているとされたのだから、まさかとは思いつつも待ち構えない訳にはいかない。だからコヤンスカヤは大量の戮猟兵オブリチキニと白い皇女と共に立香を待っていた。それだけなのだ。やってきたのがコレであったことは、コヤンスカヤには責任がない。責任者は何処か。

「皇女様。一応、あんな成りでも汎人類史最後のマスターです。その上、彼女は単身でのサーヴァント召喚を可能とする『奇跡』でもあります。異聞帯のサーヴァントである貴女が遅れを取るとは思いませんが、一応、気をつけてくださいね」

「…まあ、いいわ。皇帝ツァーリの威光に従わない者には死を。裏切り者には肅清を。ヴィイ、私が願います。私が呪わたくしいます。石に、氷に、頑なに。我らはあらゆる「善き者」を砕きましょう。「邪眼」を開きなさい、ヴィイ！」

白い皇女はサーヴァントだった。しかも、何やら立香の知らない何処かで何処かから呼び出された普通ではないサーヴァントらしい。異聞帯いぶんたい?あまり難しい言葉は使わないで欲しい立香だったが、まあ、ある程度の事は理解した。目の前のコヤンスカヤと白い皇女はカルデアの敵であり、管制室が凍り付くほど寒いのは白い皇女のサーヴァントの所為だということは理解した。

「白くて、可愛いのに、残念。でも、白くて可愛い子は大勢いるから、まあ、いつか。こんにちは！カルデアへとようこそ！早速だけど死んでもらおう！」

魔王の様な事を言いながら、立香は腕を組み犬歯を見せて嗤った。堂々と、あくまで堂々と自分の正しさを欠片も疑うことなく凶太く堂々とした態度にコヤンスカヤは眉をひそめ、白い皇女のサーヴァントーアナスシアは目を細めた。

立香の姿は自信に満ち満ちていた。敵に囲まれ吐く息が凍りそうなほどに寒い劣悪な環境に置かれながらもその自信は轟くほどに揺ぎ無く、驚くほどに隙が無い。

「今更、身構えないですよ。私の事を侮っていたんですよ？私の事を馬鹿だと思っていたんですよ？なら、そう思い続けなよ。自分の考え曲げるなよ。最後まで、自分を信じて、潔く終わりなよ。あは、あはは、アハハ！愚かにも、ね！」

立香は手を挙げた。誰にも邪魔はさせなかった。そして、つかみ取る。立香にしか見えないモノをつかみ取る。「奇跡」は何時だっつかみ取ると決めた者の前に転がってくるものであることを立香は知っている。そして、これは奇跡ではない。

英霊が召喚される。たった一人の少女の願いに答える為に、人理に刻まれた英雄はやってくる。

「ねえ、やっぱりこの部屋は寒いよ。だから、貴女の炎で温めて！ノツ

ブさん！」

召喚陣など無かった。詠唱もしなかった。あるのは只、触媒のみ。藤丸立香という触媒のみをもってその召喚は成立していた。

まさしく『奇跡』だとコヤンスカヤは吐き捨てた。自身のマスターの敵をアナスタシアは見定めた。

そして、立香は嗤った。美しく嗤った。可愛らしく嗤った。だから、これは『奇跡』ではない。この召喚は只の人間の感情。誰も知らない場所で、誰でもない彼と立香と共に戦った6騎の英雄―6人の人間が、抱かすには居られなかった感情。

「あは、あはは、アハハ！わーお！登場しながら炎で温めてくれるノツブさんってばやさしかっこいい！」

「くは、くはは、クハハ！よもや寒いからなどと言う理由で我を選び呼ぼうとは！相変わらず我がマスターはぶっ飛んでおるな！」

立香の笑い声に反響するように声が響いた。光は収縮する。人の形が現れる。それは現代日本において最も有名であろう英雄―天下布武を謳い全国支配にあと一步まで迫りながら夢破れた戦国武将。

地獄の業火の様な深紅の長髪は腰の下まで伸びていた。女性でありながら大抵の男性を見下すだろう長身。漆黒の具足を身に纏い瞳は赤く輝いている。その口元は英雄と呼ぶにはあまりに歪に世の全てを嗤っていた。

それこそは数多の可能性の総体でありながら、あらゆる可能性から最も遠く、最も深淵に近い者。『彼あるいは彼女』の物語が生んだ最も強い姿の一つ。彼岸にて燃えさかる、ヒトの形をした炎。つまりは『戦国武将』『織田信長』ではない。

『第六天魔王』―魔王信長の君臨である。

コヤンスカヤは魔王信長の召喚に舌打ちをした。異聞帯のサーヴァントは汎人類史のサーヴァントより強い。それは異聞帯が劣悪な環境であるからだ。異聞帯とはそれ故に消え去った世界であるの

だが、その説明は置いておいてコヤンスカヤが言いたいのはハードモードで出てくるモンスターの方がノーマルモードより強いということだ。劣悪な環境で生き延びる生命体のいる異聞帯の「英霊」だからこそ、汎人類史の英霊サーヴァントよりも強力だ。それは間違いない事実であるのだけれど、「魔王信長」。あれは反則だろうと、コヤンスカヤは舌打ちしたのだ。

「人間どもに弄られたあらゆる可能性信長の集合体。人でありながら変性した神仏衆生の敵。劣悪な環境で生まれたサーヴァントが強いと言うなら、その法則はアレにもあてはまっちゃうんですよね〜」

事実、管制室を覆っていたアナスタシアの氷が魔王信長の登場と共に現れた炎によって溶けはしないまでも勢力を弱めていた。既に吐く息が白くないほど、管制室の気温は上がっている。まだアナスタシアが本気を出していないにしろ、それは魔王信長も同じ。ぶつかり合えばどうなるかはわからない。

「(こんな時にあの神父はどこで何をやっているんでしょうかねえ)」  
コヤンスカヤは此処には居ない同胞の事を考えながらも状況を的確に進める為にアナスタシアに指示を出した。

「皇女様。言うまでもなく分かっていると思いますが、目の前のサーヴァントはおそらく藤丸立香の持つ者の中でも最上級の代物です。正直、皇女様でも相手にするには厳しいですが、逆に言えばこの場で魔王信長を失えば藤丸立香の脅威は半減したと言って良いでしょう。貴方のマスターの「偉業」もぐつと近づきますよう?」

「…そう。正直、貴女の口車に乗るのは嫌なのだけれど…彼の助けになるなら、まあ、いいわ。ヴィイ。私が願います。私が呪います。邪眼を開きなさい。あらゆる「善き者」を砕きましょう。遍くものに皇帝ツァーリの威光を!」

「我を善き者? 我に威光だど? くはは、クハハ! 笑わせてくれる! 貴様の方こそ恐れよ我を! 臆せよ生を! 我こそは第六天魔王信長なる!」

アナスタシアと魔王信長がぶつかり合う。その戦闘は凄まじかった。氷塊が飛ぶ。炎熱が飛ぶ。アナスタシアの影から現れた「獣」

を魔王信長の拳が押しとどめる。蹴撃がアナスタシアを吹き飛ばす。魔王信長の脚が凍る。炎が氷を溶かした。氷が炎を凍らせた。

その激しい戦闘の中でコヤンスカヤは立香に対して何度も攻撃魔術を放とうとした。しかし、その度にコヤンスカヤの直感はその攻撃が無駄であることを告げていた。

「私が以前に見たサーヴァントは魔王信長ではなかった。なら、あの子は一騎サーヴァントを使役している。いえ、魔王信長の口ぶりからすると少なくとも三騎は抱えていると見ていいでしょう」

只一人で三騎のサーヴァントを使役する。それが出来るのなら、たとえ魔術の素人であっても『藤丸立香』はもう三流マスターではない。一流、いや、超一流と言っても良かった。

厄介な事になったとコヤンスカヤは思った。普通の一般人は誰も知らない何時の間にかに異常なほどの重要人物に変貌していた。

「(こんなことなら、独房で磔にされている間に殺しとくんでした)」  
自分の詰めめを後悔しながら、コヤンスカヤは立香を『奇跡』を『起こせる三流マスター』という枠組みから外した。

そして、コヤンスカヤは正しかった。

「ねえ、白いお姫様。貴方のマスターは、コヤンスカヤさんなのかな？」

戦いの最中に立香は声を掛けた。無論、アナスタシアはその声に答えない。魔王信長との戦闘において、アナスタシアが立香に意識を割く余裕はない。けれど、立香の声はよく響いていて、否応なしにアナスタシアの耳に届いていた。

自他ともに認める通り、立香は魔術師としては三流以下だ。礼装なしでは魔術の一つも使えない彼女は戦いの最中にサーヴァントを支援する術に乏しい。半裸であり礼装を着ていない今においては立香には魔術的に魔王信長を支援する術は皆無だ。

けれど、立香は何もできなからと言って何もやらないことを選ぶほどに怠惰ではなかった。



魔術が使えない？—だからどうした。肉体的にも脆弱？—乙女に筋肉を求めるな。なにもできない？—そんな筈はない。

何もできない者は、何もやろうとしていない者だけだ。

立香は違う。何時だって何かをやろうと足掻いてきた。それが意味のあることなのか、そもそも出来ることなのか、そんなこと、関係なかった。ある紅い皇帝は言った。自分に出来ることをやればいいと—それは其方<sup>立香</sup>にしかできないことである—その通りだ。

だから、立香は口を開く。堂々と自信しかない声を上げる。

「違うよね？お姫様のマスターは別に居るんだよね？見てればわかるよ。けど、じゃあ、お姫様のマスターはどこにいるのかな？—どうして此処に、いないのかな？」

コヤンスカヤがまずいと思つた時にはもう遅い。立香のよく通る声が、囁い声を上げた。

「知ってるよ！お姫様のマスターは前線に出て来られない臆病者<sup>チキン</sup>なんだよね！私はお姫様のマスターの顔も名前も何にも知らないけど、知ってるよ！きつとその人は前線に立てない意気地なしで、根暗で、ジメジメする陰気な人なんだよね！あは、あはは、アハハ！女の子を戦わせて！自分は後ろでスケベ心ばかり丸出しで！お姫さまはそんなマスターのハーレム要員になるのが望みなんだよね！」

あまりにもあまりな品性下劣の嘲笑だった。立香はアナスタシアのマスターのことなど何も知らない。だから、口から出た言葉は全て立香の想像でしかない。少し考えればその言葉の全てがアナスタシアから少しでも理性を奪おうとする挑発でしかないと気が付けただろう。

しかし、立香は知らなくてもアナスタシアは、彼のマスターを知っていた。彼が苦しみの中で足掻き異聞帯のサーヴァントである自分のマスターになったかを知っていた。彼が守ろうとする世界を知っていた。彼が張ろうとする意地を知っていた。彼が、彼が、彼が、どんな思いで汎人類史に反旗を翻したのかを、知っていた。

だからこそ、立香の言葉を許せないと思つた。

それは隙と呼ぶにはあまりにアナスタシアの小さな揺らぎ。それ

を魔王信長は見逃さなかった。

「勝敗の差は、やはりマスターの有無であるか」

魔王信長の炎を纏う拳がアナスタシアの身体を捕らえた。衝撃が走る。氷の大地が碎ける音がした。アナスタシアの身体は吹き飛ばされ、壁にぶつかり、動かなくなった。

## 立香ちゃんは激怒する②

異聞帯のサーヴァント―白い皇女アナスタシアを打ち破った可能性の集合体―魔王信長は紅い瞳を次はコヤンスカヤへと向けた。アナスタシアがいくら強力な英霊<sup>サーヴァント</sup>だとしても所詮、使い魔<sup>サーヴァント</sup>でしかない。カルデア占拠の首謀者が誰かをまだ魔王信長も立香も知らないが、どう考えてもコヤンスカヤは首謀者側の人間だ。

魔王信長の拳はアナスタシアの霊基を砕くには至らなかったが、深手は負わせた。この戦いにおいてアナスタシアは既にリタイアしている。ならば、次に倒すべきは誰であるかを魔王信長と立香は間違えない。

対しコヤンスカヤは目の前で起きた光景を認めることにした。認めよう。魔術師としては三流以下であろうが、マスターとしての立香は超一流だ。加えて戦術家としても優秀だった。

立香のやり方は万人に受け入れられるものではない。他人の誇りに唾を吐きかけ、尊厳を踏み躪り、その上で勝利しようとする在り方は英雄的ではない。彼女のやり方を否定する者はそれこそ星の数ほども存在するに違いなかった。それでも、コヤンスカヤは立香を認めよう。

そのいじらしい抵抗を認めたで上でコヤンスカヤは優しく微笑んでみせた。

「まずは、おめでとうございます。貴女のカルデアを凍らせた敵を見事に取ってみせましたね。…そして、実に面倒くさいことをしてくれました。本来、カルデアの占拠は少しの障害もなく進行する筈でしたのに」

皇帝の眷属である戮<sup>オブリチキニ</sup>兵とアナスタシアによるカルデア占拠作戦。それは電光石火で遂行され終了すべき作戦だった。なぜならコヤンスカヤにとってカルデアの占拠など前哨戦に過ぎない。これから始まる大偉業。世界の「漂白」の為の前準備に過ぎないのだ。

2017年。この惑星<sup>ほし</sup>の歴史は終了する。汎人類史は抹消され、新たに異星の神が惑星<sup>ほし</sup>を造り直す。コヤンスカヤはその為に異星の神

が派遣した眷属の一人。

「いえ、だからこそ、ある意味は幸運でした。この段階で私たちは『藤丸立香』というフアクターを認知することができた。普通の一般人？とんでもございません。汎人類史最後のマスター。いえ、人類最悪のマスター——立香ちゃん♪」

「あは、アハハ！嬉しいな。コヤンスカヤさんが私を名前で呼んでくれるなんて、謹慎室であった時は私を見てもくれなかったのに」

「ええ、その節は申し訳ありませんでした。あの時の私の眼は節穴だったと認めざるをえません。この眼を抉り出してでも、非礼を詫びる所存ではあるのですが…どうでしょうか。一つ、私の商談に乗ってみませんか？」

「商談？」

「ええ、それは——」ぐふっ!?

それ以上の言葉をコヤンスカヤは口に出来なかった。息は全て腹部に空いた穴から漏れた。一瞬、瞬きの間にコヤンスカヤの腹部を魔王信長の拳が貫いていた。口から鮮血を漏らしながら、コヤンスカヤは魔王信長を睨む。サーヴァントの暴走。そう思った。けれど、それは違った。魔王信長の目には理性の光があった。彼女は復讐者アヴェンジャーであり、狂戦士バーサーカーではない。ならと、逸らした視線の先にいた立香は余りに冷たい目でコヤンスカヤをみていた。

「…知らないよ。貴女から貰うものなんて、何もないよ。言葉は知らない。言い訳も聞かない。命乞いも、謝罪だって求めない。私ね、わかつちやうんだ。貴女たちが何をしようとしているのかは知らないけど、それが彼女のカルデアを土足で踏み躪っているものでないことは、わかるよ」

とても哀しいと立香は思った。言葉で分かり合えないと言うのはとても悲しいことだと立香は知っていた。だから、立香はせめて笑う。せめてもと笑う。自分とは違う思考回路を備えた誰かを、嗤う。そして、言葉にありったけの憎悪を込めた。言葉で分かり合うことは出来ないけれど、せめてこの気持ち伝わりますようにと——願いを込めて。

「そして、それが誰でもない彼が悔しがりながらも認めた世界を台無しにするなら：許さない」

コヤンスカヤは諦めた。立香との対話を諦めた。そして、それで正解だった。もし仮にコヤンスカヤが尚も立香と対話を、あるいは敵意を持ち対抗しようとしたのなら、魔王信長の手はコヤンスカヤの霊基を握り砕いていた。いや、握り砕くのが早まっていた。そうなればコヤンスカヤは物語から退場していただろう。

そう成らなかつたのは魔王信長がコヤンスカヤを握り潰すより数秒早く―管制室に一人の神父がやってきたからだつた。

「ここまでだ。藤丸立香。彼女から手を引き給え。そうすれば私も、この少女から手を引こう」

聖堂教会から派遣された神父―言峰。彼もまたコヤンスカと同じく異星の神側の人間だつた。それに対する立香の驚きはない。同時にカルデアにやってきた彼らがグルであることは立香でも少し考えればわかることだ。だから問題はない。問題なのは―言峰神父が引きずる様にマシユを連れていることだつた。

色素の薄い白い肌は青く腫れていた。うっ血した皮膚は見るに堪えない。立香の視界が赤く染まった。それでも唇を噛み切り言峰神父に殴りかかることを耐えたのは、言峰神父の左手がマシユの白い首筋に伸びたからだつた。

「…どうしてっ、…どうしてっ、…どうしてっ!」

「この少女を責めるべきではない。この少女はゴルドルフ氏の放送を聞き、ダ・ヴィンチと共に無理をして此処まで駆け付けたのだから：君を助ける為に」

「っ…!?!」

「愚かな、とは口が裂けても言えない筈だ。なぜなら、彼女たちは君がここまで力を有していることを知らなかつた。いや、君自身が伝えていなかつた。恐れたのだろうか？君は、自分が変わってしまった自覚があつた。それを彼女たちが受け入れてくれるか恐かつた。ならば、この結果は君の心の弱さが招いたものだ」

返す言葉など何もなかつた。出そうになるのは意味をなさない罵

倒だけだ。そう、馬鹿な事をしたと立香は思った。自分は、なんて馬鹿な事をしたのだと思った。自分は大丈夫だからと一言だけでもダ・ヴィンチとマシユに伝えておけばよかったと思った。ゴルドルフに嫌がらせ交じりの言伝なんて頼まなければよかったと思った。

そして、気が付く。ボロボロになったマシユを守る為に戦っただろうサーヴァントの姿がないことに気が付いた。

「…………ダ・ヴィンチちゃんは？お前、ダ・ヴィンチちゃんを何処にやった!!」

「キヤスターならば、この少女を守り消滅したよ。私が心臓を貫いた。いかにサーヴァントといえ、霊基の核を潰されれば消滅は免れまい」「ああああああああああ!!」

視界が赤く染まる。怒りが湧き上がる。ダ・ヴィンチは消滅した。立香の知らない所でマシユを守って消滅した。お別れも言えなかった。ダ・ヴィンチは「別れは何時だって唐突なものさ」とマシユを慰めて消えていった。最後までマシユを守れなかったことを後悔しながら、万能の人は消滅した。

許さない。許してはいけないことだった。怒り。怒り。怒るべきことだった。

止めどない熱は猛き武将を呼び覚ます。現界した森長可にとって最早マスターからの命令は不要だった。怒り。憎み。立香が憎悪する敵が目の前に存在している。ならば、駆けねばならない。

「ブチ殺すぞテメエエ!!」

その結果がたとえどんな悲劇を生もうとも——狂戦士である森長可は止まらない。

言峰神父は森長可が向かってくるのを見て、躊躇なく左手に力を込めようとした。マシユを殺してしまおうとした。その手が止まったのは、向かってくる森長可が動き出してすぐに吹き飛ばされたからだった。森長可を吹き飛ばし最悪の結果を防いだのは魔王信長だった。魔王信長の左手にいつの間にか火縄銃が握られていた。魔王信長は右手でコヤンスカヤの霊基を掴んだまま、左手の火縄銃で森長可の暴走を止めて、舌打ちを鳴らした。

「鬼武蔵故に仕方無きことではあるが、少しは周りを見てから暴れよ馬鹿者が、せめて人質位は視界に入れよ。…そして、我がマスター。正気を取り戻せ。これ以上、マスターの怒りに呼応し他の奴らまで現界すれば我一人では収められぬ」

「…あ、…ああ、うん。ごめんなさいなんだよ。ノツブさん」

「良い。マスターを助ける事こそ、我らの願いである」

「ありがとうございます。森君も、ありがとうございます。でも、少し下がっててね」

「……………了解」

自分の怒りにより森長可が暴走しマシユを失う。そんな立香にとつての最悪の結果は魔王信長の手によって防がれた。その一部始終を見ながら、言峰神父は興味深そうに笑っていた。

マスターとサーヴァントが良好な関係を築き上げ。時にサーヴァントがマスターを諫める事すらしながら探求を続ける。人理修復の旅路において“藤丸立香”が行ってきたとされるサーヴァントとの接し方。関係性の構築。その点のみをみれば“今の立香”は“前の立香”と何も変わっていないなかった。

「では、対話を再開しようか。藤丸立香」  
「…」

言峰神父はマシユの首に左手を添えたまま、魔王信長はコヤンスカヤの霊基の核を握ったまま、此処に言峰神父と立香の対話が成立した。

「対話と言うが私は一つ提案を君にするのみだ。即ち、何方どちらを選ぶかと言う簡単な問いかけに過ぎない」

言峰神父は薄く笑いながら、視線をカルデアの心臓部―カルデアスへと向けた。

「我々の目的はレイシフトの凍結。歴史を書き換えるという神を恐れぬ愚行を行う手段を破壊すること―カルデアの占拠はその為の手段に過ぎない」

それを立香は認めない。

「許さない。認めない。彼女の夢を壊させはしない。カルデアは私が

守る」

「然り。君ならば、そう言い切ると信じていた。故に私は、提案しよう。西区画の格納庫。そこにカルデアの生き残り達が避難したコンテナがある。もし君がコヤンスカヤ君から手を引くと言うのなら、この少女と共にそのコンテナへ向かうことを許可しよう。そのコンテナはどうかやらダ・ヴィンチが用意した物らしい。おそらく脱出装置としての役割も持っているに違いない。あのキャスターの抜け目の無さは、私などより君の方が良く知っている筈だ」

「…そうしないと云ったら？」

「我々は戦うことになる。そうなれば君のサーヴァントはコヤンスカヤの霊基を砕き、私はこの少女の首をへし折る。そこから先は、正直、どうなるか分からない。我々にはまだ隠した戦力が存在するが、それは君とて同じだろう。君の奮闘次第では、カルデアを取り戻せるかも知れない」

立香の選ぶべき二つの道は示したと、言峰神父は啜う。

「さあ、選択せよ。藤丸立香。少女の命を助けカルデアを諦めるか、あるいは、少女の命を見殺しにしてもカルデアの為に戦うか。正直、私はどちらでも構わない」

怒りだ。怒りだ。怒りしかない。激おこぶんぶん丸どころではない。怒髪、天を衝くどころではない。立香は※※※しそうになる。いっそのこと※※※してしまった方が、楽だとすら思ってしまう。それでも、それでも、立香はギリギリで踏みとどまることができた。

「…………ノツブさん。コヤンスカヤさんを、離してあげてください」

「良いのか？」

「はい。マシユの命は、失われれば戻ってきません。けれど、この場所は、カルデアは、取り戻せると信じます」

「で、あるか」

魔王信長の手がコヤンスカヤを手放した。コヤンスカヤは床に落ちる。荒い息と血を吐きながらも未だに意識を保ち続ける彼女の生命力は常軌を逸していたものであったが、流石にもうその口からは何の言葉も出はしなかった。



それを見て言峰神父もまたマシユを手放す。ボロボロになっていたマシユは、それでも懸命な足取りで立香の元まで来ると安心したように気を失った。

「では、これで対話は終了だ。さらばだ、藤丸立香。：君の成した偉業が凡人の手により蹂躪される様を、生き残り、見届けるがいい。汎人類史最後のマスター。いや、この惑星最後の人間達よ」

様々な可能性があった。ダ・ヴィンチの言うところの「今の立香」が立香である限り、2017年の結末は様々な可能性が存在していた。けれど、結局のところ立香は運命を変えられなかった。誰でもない彼から、その運命を変える為の力を与えられていながらも、立香一人では運命に立ち向かうことは出来ても、打ち勝つことは出来なかった。

もしも、仮に立香が誰でもない彼から、力を与えられたことを、ダ・ヴィンチに、マシユに、誰かに伝えていたのなら―誰かを信じる事が出来ていたのなら、きっと運命は変わっていた。

2017年12月31日。世界は「漂白」される。

その結末を、変えられた。けれど、もう遅い。結末は結果として残り、立香はマシユと共に逃げることしかできなかった。

フェイト運命は、確定した。

『……通達する。我々は、全人類に通達する。この惑星はこれより、古く新しい世界に生まれ変わる』

それはこれまでの旅路を否定する物語。

『人類の文明は正しくはなかった。我々の成長は正解ではなかった』

これは誰でもない彼が悔しがりながらも認められた世界を否定する物語。

『よって、私は決断した。これまでの人類史——汎人類史に叛逆すると』

それは人類に叛逆した裏切り者たちの物語。

『今一度、世界に人ならざる神秘を満たす。神々の時代を、この惑星に取り戻す。その為に遠いソラから神は降臨した。七つの種子を以つて、新たな指導者を選抜した』

これは異星の神に力を与えられ調子に乗った者達の物語。

『指導者たちはこの惑星を作り替える。もつとも優れた『異聞の指導者』が世界を更新する。その競争たたかいに汎人類史の生命は参加できず、また、観戦の席もない』

それは数多の英雄たちの歴史を否定する物語。

『空想の根は落ちた。創造の樹は地に満ちた。これより、旧人類が行っていた全事業は凍結される。君たちの罪科は、この処遇をもつて清算するものとする』

これは神の使徒を気取る傲慢な者達の物語。

『汎人類史は、2017年を以って終了した』

それは未来を否定する物語。

『私の名はヴォーダム。キリシユタリア・ヴォーダム』

それが、立香の敵の名。

『7人のクリプターを代表して、君たちカルデアの生き残りに——いや。今は旧人類、最後の数名となった君たちに通達する。——この惑星の歴史は、我々が引き継ぐ』

立香は吼えた。汎人類史、最後の砦。万能の人―ダ・ヴィンチと名探偵―ホームズが作り上げた虚数潜航艇きよすうせんこうていシヤドウ・ボーダーの甲板の上に立ち、吼えた。

喉が枯れる程に、血反吐が零れるほどに、力の限り吼えた。

「ヴォーダイム!! キリシユタリア・ヴォーダイム!!」

認めない。認めていい筈がない。その怒りは、立香の傍に立つ6騎の英霊もまた同じだった。

ああ、そうだとも――人を否定する神など、いらぬ。それが、よりによって異星の神だというのなら、部外者ジャンル違いがしゃしゃり出るなど言う話だ。

往年に渡り、何人もの物書きが繰り返してきたとおりに、偉大なる作家の文字をなぞろう。

立香は激怒した。必ず、かの邪知暴虐のクリプター達を除かなければならぬと決意した。

その怒りに6騎の英霊サイヴァント―6人の人間は、それぞれ呼応する。

狂戦士―森長可は吼えた。

復讐者―魔王信長は嗤った。

騎兵―ライダーは哀れんだ。

■―■は泣いた。

■―■は笑った。

■―■はたぶん、怒っていた。

これは、英雄の物語ではない。

これは、“善き人々”の物語ではない。

これは、ブチギレ立香ちゃんの歩む物語である。

誰でもない彼は怒らない

いつか、どこかで、誰でもない彼は立香に敗れた。

終局特異点——『冠位時間神殿ソロモン』。魔神王ゲーティアが行おうとした三千年をかけた大偉業は、一人の少女の手によって否定された。全ての戦いが終了し、崩壊する神殿の中、カルデアの観測もなく、可愛い後輩もいない。

そんな誰も見ていない場所で、もはや消えるだけの残滓となった魔神王ゲーティアは、誰でもない彼として、立香の前に立った。

「——私の夢は潰えた。——この神殿に座し、行った膨大な時間は、無為となった」

彼は立香に敗北した。

「ここで何をしようと敗北は覆らない。おまえを殺したところで結果はなにもかわらない。……これは、何の意味もない戦いだ。以前の私では、考えようのない選択だ」

だが——立香は、誰でもない彼を理解した。

「わたしがあなたでも、同じことをするよ」

「——そうだとも。私にも意地がある。いや、意地が出来た」

誰でもない彼は限りある命を得て、ようやく立香を理解した。立香の歩んだ探求に敬意を抱いた。

「だからこそ——この探求の終わりを始めよう。人類焼却を巡るグランドオーダー。人類最後、否、この私を否定し、私を神座より引きずり降ろし、私を誰でもない誰かと同じ目線に立たせた——我が怨敵。我が憎悪。私にとって、人類最悪のマスター！」

誰でもない彼は、そうして立香と戦い、立香の元に最後まで残っていた6騎のサーヴァントの手によって、打倒された。

ゲーティア  
彼はそこで生まれ、そして滅んだ。

そして、今際の際に彼が立香の辿るだろう未来を見たのは、きつと

神などではない運命の悪戯だったのだろう。

彼の眼は彼の主がそうであつたように、“人”になつた瞬間、世界が滅ぶ未来を見た。

「(なんだ…これは…)」

人類焼却式は否定され世界は救われた。けれど、彼の見た未来において世界は“漂白”され滅んでいた。その未来を見た時の彼の絶望は、言葉に出来ない。そして、彼は理解する。これが嘗ての彼の主――ソロモンが抱いた絶望だった。

「(そうか…これが、これを、私にも乗り越えろというのか…)」

それが運命が彼に与えた最後の物語。

彼は最後の力を振り絞る。いや、もう力なんて欠片も残っていないが、それでも誰かに背中を押されているような感覚がして、振り絞ることができた。

その力を彼は立香と共に最後まで戦つた6騎のサーヴァントに託した。

今より滅ぶ彼に世界は救えない。けれど、今、背を向けて駆けていく少女が再び世界を救う為に立ち上がることを彼は未来など見なくても確信した。

「故に…託そう。…お前たちに、神ではない、人間たちに…」

誰も彼の言葉には答えなかった。彼もまた返事など求めなかった。人類に絶望した彼は最後の最後に人を信じた。信じることができた。

「……………ああ、悪くない気分だ」

悔しがりながらも、そんな強がりと言って消えた。

## ロシア異聞帯編

### 立香ちゃんは許さない①

2017年―世界は『漂白』され、人類の歴史は幕を閉じた。

宇宙からの侵略が始まってから90日。人々は諦めを抱きながら空を見上げる日々のみを過ごしていた。数日前に最後まで侵略に抗っていた合衆国も姿を消した。もはやこの地上に人類は築き上げた国は一つもなく、もはやこの地上に人々が縋るものは一つもなかった。

今日という日が地球最後の一日になるかもしれない現実を、絶望に濁った瞳で誰もが受け入れている。―けれど、『彼』はどうしても納得がいかなかった。最後の祈りに没頭する人々を尻目に、駄々をこねる子供の様にキャンブを飛び出した。

世界は終わった。―それはいい。侵略者は宇宙人だった。―それはいい。だが、その動機が、目的が、経緯が、あまりにも秘されていた。

空から七つの光が落ちてきた日―彼は天からの声を聞いた。その声は自分たちの歴史が間違っていると云った。―どうということだ？その声は惑星を造り直すと云った。―どういう意味だ？その声は最後まで自分たちを見もしないまま傲慢に告げた。―彼にはそう聞こえた。

―『歴史は我々が引き継ぐ』

ふざけるな。ふざけるな。ふざけるな！叫びだしたかった。たとえ天から聞こえる声に届かないと知りながらも、叫びたかった。否、叫ばなければならなかったのに――彼は空を見上げていることしか、出来なかった。

だが、代わりに叫ぶ声を聞いた気がした。空を見上げることしかできなかった自分たちの代わりにどこかで誰かが叫んでいる声を確認に聞いた。それは少女の声だったように思う。あるいは獣の咆哮の様な声だったとも思う。物理的に聞こえるはずの無い声だった様に

も思う。分からない。天からの声と同じように、その声の事もまた彼には何も分からない。

けれど、わかることもある。その声は、その叫びは、確かに地上から天へと向けられた怒りの咆哮であったのだ。

人類の歴史は幕を閉じた。残された一握りの人々は絶望に濁った瞳でその結末を受け入れている。――否である。世界のどこかで諦めを踏破しようとしている誰かがいる。理不尽な結末にブチギレている誰かがいる。その事実が彼の身体を動かした。

もう人類には逆転の目も、生存の目もない。あらゆる活動は何の成果も現わさない。けれど、その上でみつともなく、彼は過去の記録を漁ろうとしていた。片道切符の燃料で、旧式の自動二輪に跨って白い世界と化した荒野を走る。

それが人間。それが人類。それが誰でもない彼が最後に認め、一人の少女が最後まで守ろうとするものだった。

立香の朝は早い。汎人類史最後の砦―虚数潜航艇シャドウ・ボ―ダーの中にあっても立香の体内時計は狂わない。午前5時に目が覚める。寝台から起き上がり上体を反らして身体を伸ばす。ちなみに立香は寝る時は下着は付けない派―寝間着の下で人並みはある胸が揺れた。

「フオウ君。おはよー」

枕の横で丸くなっていた白い小動物―フオウ君に声を掛けるがフオウ君はまだお眠の様で返事はない。身体を揺する立香の手を邪魔だと思ったのだろう、尻尾でテシテシと叩いてくる。立香はフオウ君を起こすことを諦めて着替えを始めることにする。

潜航艇―船であるが故にスペースの限られるシャドウ・ボ―ダーではあるが汎人類史最後のマスターであり、現段階のシャドウ・ボ―

ダーにおいて最大戦力を有する立香には狭いながらも個室が与えられている。他の一般職員は四人部屋だというのに、立香は恵まれた環境に申し訳なさを感じながらも感謝してクローゼットを開ける。

「オツレンジ、オツレンジ。ラッキーカラーはオレンジだよー」

時間の概念から切り離された虚数領域にあるシャドウ・ボーダーには勿論テレビもラジオもない。そんな誰に聞いた占いだという突っ込みを入れる者が誰もいない空間で適当な事を言いながら立香は着替える。ボデイラインの協調されるオレンジ色のスーツ。魔術礼装・カルデア戦闘服に着替え終えた立香は部屋を出た。

このシャドウ・ボーダーが外見のわりに意外と広いことは乗り込んだ初日に行った探検で知っていた。なんでも空間を湾曲して空間を確保しているらしい―難しいことは立香には分からない。空間×2？　ともかく意外と広い船内を歩く。ただ広いと言っても限りはあるので目的の場所には直ぐに辿り着いた。

「おじやましてすー」

返事も待たずに部屋に入る。その部屋には色々な機械に繋がれたカプセルが置いてあり、カプセルの中で一人の美少女が眠っていた。その美少女の名は―ダ・ヴィンチ。そうカルデアで立香がお別れも言えないまま消滅してしまった万能の人―ダ・ヴィンチである。ただし、外見からわかるように今まで立香と一緒に冒険をしてきたダ・ヴィンチ本人ではない。万能の人が「こんなこともあるのかと！」と用意していたスペアボデイ。ホームズ曰く低燃費故に低出力らしい。新しいダ・ヴィンチちゃんだ。

以前のダ・ヴィンチの記憶を知識として引き継いでいるらしい新しいダ・ヴィンチ。なら、どうであれ立香にとっては「大切なダ・ヴィンチちゃん」。

彼女はこのシャドウ・ボーダーの要であり、虚数潜航を行っている間はその演算制御の為、こうしてカプセルの中に居なければいけないらしい。たまにカプセルの中で目を覚ましていることもあるが、今日は目を覚ましていない日の様なので立香は起こさないようにコソコソとダ・ヴィンチの様子を伺うことにする。



「ああー、ダ・ヴィンチちゃんは可愛いな。前の大人のダ・ヴィンチは綺麗だったけど、ロ・リンチちゃんはかわゆいよー。早く虚数空間からでて一緒に風呂に入ろうね！…っ、静かにしなきゃだった…」

人としてギリギリアウトなことを言いながらダ・ヴィンチの寝顔を堪能した立香は部屋を後にする。寝ているようにみえるが今も仕事をしているダ・ヴィンチの邪魔をすることは立香の本意ではない。

次に立香が向かうのは司令室兼操舵室<sup>コックピット</sup>。先ほど同様にさほど離れていない距離をスキップする。

「おはよーごいませー！」

司令室兼操舵室に着いた立香は元気よく片手を突き上げながら挨拶をする。早朝だというのに詰めていた職員たちは立香を出迎えながら各々に返事を返してくれた。立香はその一人一人に二度目の挨拶をしながらキョロキョロとあたりを見渡す。どうやらまだ此処にはゴールドルフもホームズも偉い人は誰もいないらしい。――厳密に言えばダ・ヴィンチの意識が存在しているが――立香は早起きは得だとはしやぎながら一番大きな椅子――船長が座る椅子に腰かける。

普段、この席に座っているゴールドルフはまだ来ていない。立香は無駄に大きな椅子に身を預けながらボーっとする。どれくらいボーっとしていただろうか、気が付けば立香の膝の上にフォウ君が乗っていた。

「えへへー、寝坊助フォウ君めー」

立香が膝の上で丸くなっていたフォウ君を弄り始めると、フォウ君は抵抗する様に立香の顔を肉球でテシテシと叩いた。どれくらいそうしていただろうか――立香は気が付けば眠りに落ちていた。

フォウ君は「二度寝してんじゃねえ」とでも言いたげな鳴き声を上げていた。

「ええい、いい加減にせんかへボ探偵！なぜ浮上しない！もうとつくに安全圏に脱しただろうー！」

立香はそんな声で目を覚ました。寝惚け眼を擦り時計を見る。寝

ている間に何時の間にか午前7時を回っていた。そして、気が付けば立香の寝ていた椅子を挟んで新所長―ゴルドルフと名探偵―ホームズが何やら口論をしていた。寝惚け少女の頭にはその内容が入っていない。いや、たとえ意識が覚醒していたとしても立香がホームズの話に完全に理解できたかどうかは疑問だ。何やら難しい単語が飛び交っていた。―まあ、二人の口論（ホームズにやり込められるゴルドルフ）は最近よく見る光景だったので立香は気にするのを止めた。

とりあえずゴルドルフが来たので立香は彼の椅子から立ち上がる。ゴルドルフの身体が驚いたようにビクリと震えた。

「ふお!? な、なんだ起きていたのか…ええい、ならば一声かけてから立ち上がらないか! それに私の船長席に毎度毎度勝手に座るんじゃない!」

「ゴルドルフさんがいない間だけだからいいじゃん」

「よくない! いいか、このボーダーの船長である私には相応の威厳と言うものが求められるものなのだよ。君の行為はそれを損なう行為だ」

「あは、あはは、なに言ってるのゴルドルフさん。ゴルドルフさんの威厳はそのでっかいマシユマロみたいな身体ボディで十二分に事足りているんだよ? 威厳十分。御利益十二分だよ」

「……………それ、褒めてないよね?」

「えー、褒めてるよー。ねー、マシユ」

寝ている間に傍に来ていた立香の可愛い後輩は苦笑いをしていた。

珍妙な言い回しではあったが、どうやら褒めているらしかった。短い期間ではあるが立香と接し、ゴルドルフはそういったことで立香が嘘を吐かないことを知っていた。立香はこの年頃の少女としては極めて普通に「うざい」や「嫌い」と感情をあらわにするタイプだ。だから、普通に傷つくのだが―ともかく今は立香が自分の味方なのだろうと考えることにしたゴルドルフは畳みかけるように言う。

「そうだ。君からもホームズに言ってやりたまえ。我々は何時までこの虚数空間を漂っていなければならぬのだと! ……こともあろうにコイツは世界が滅びたなどとデタラメを言っているのだぞ!」

2017年―世界は「漂白」され滅びた。しかし、それは世界の「漂白」が明るみになる前にシャドウ・ボーダーに乗り込み虚数空間へと退避―以降、虚数空間に留まっていた立香たちは知る由もないことだ。ゴルドルフの様に信じられなくて当然。ホームズの様には計器の反応を見て推測―推理して正解を確信できることの方が異常なのだ。立香はゴルドルフの言葉を受けて、ホームズの方を見た。人類史上最高の名探偵は容易に答えを口にしない。口になっている時点でそれは確固たる事実なのだろうと―立香は理解する。

「……………世界は、滅びてなんていないんだよ」

「それ見た事か！コイツもそう言っているのだ！世界が滅びる筈がないー！」

「私たちがいる限り、世界は滅びてなんていないんだよ」

「そうだ！我々が最後の……………え？」

ホームズに詰め寄る梯子を外されたゴルドルフは振り返り立香の顔を見る。立香は目を見開きながら、強がり口にしていった。奥歯がギリリと音を立てている。

「え？いや、そんな顔で強がり言うの？おまえさん、絶対に負けを認めないタイプじゃなかったの？」

ゴルドルフからすれば強がり言うことは事実上の敗北宣言だ。立香の狂気じみた激情を垣間見たゴルドルフとしては絶対にそんな言葉を口にしないと思っていた。

ただゴルドルフと立香の考え方は少しだけ違った。

「やダナー、負けてないですよ。強がりと言えるほどまだ強いんですから、負けじゃない。負けるのは全部を諦めたときだけ！私はまだ何も諦めてない。そこんトコロを理解してもらえなくちや立香ちゃんに激おこぶんぶん丸だよ。ぶんぶん」

激おこぶんぶん丸な立香は怒りを鎮める為に傍にいたフォウ君を抱き上げて白い毛並みに顔を埋める。―駄目だ。治まらない。前足でテシテシと頭を叩かれた。仕方がないのでフォウ君を床に下ろして、立香は傍にいた可愛い後輩―マシユの胸に顔を埋めることにする。

「マシユ、慰めてー、はわわ、マシユのマシユマロは柔らかいなー。おつきいなー。まさしくマシユマシユマロだねー」

「え…ちよ!?先輩っ、こんな皆さんの前でそんな、せめて人のいない所で…で、ではなくー!今は真面目な話の最中ですよ!?せんぱーい!」

なんかもうめちやくちやだった。色々と酷かった。桃色の波動が乱れる光景を目の当たりにしたゴールドルフは逆に冷静さを取り戻しながら、ホームズの説明に耳を傾けることにした。

ホームズはゴールドルフがこうなることを予測して立香がマシユとイチャコラし始めたのかとも考えたがーたぶん違うので考えるのは止めた。

その後、ホームズの説明により関係性という<sup>アンカー</sup>「楔」が無ければ浮上できない虚数空間を航行するシャドウ・ボーダーが、唯一浮上できる場所は「漂白」された世界でシャドウ・ボーダーを知り、また立香たちも知っているという相互関係性の結ばれた相手ー白い皇女のサーヴァントーアナスタシアー並びに殺戮<sup>オブリチキニ</sup>猟兵の存在する座標。つまりは敵の本拠地だと言う事が判明。

また今まで生体ユニットとしてシャドウ・ボーダーの演算を担っていたダ・ヴィンチの計算により、その浮上のタイミングは今しかないことがわかった。

これによりシャドウ・ボーダーは現段階より虚数空間より浮上。ーつまりは反撃を開始する。

「やつほーい!戦だ戦だ!優秀な立香ちゃんとはちゃんとカルデアの残った資料から敵<sup>クリフター</sup>の情報を見たもんね!森君風に言うなら、あの普通そうな子は一点!凄そうな子は三点!超凄そうなのは百点でどうかなっ!勿論、生死<sup>デッド・オア・アラライブ</sup>問わず!」

「まま待て、浮上するなら、シートベルト、シートベルト!総員、席に座れ!怪我などで脱落するな!藤丸立香、貴様もだ!車内であればシートベルト一つで大事にはならん!私の経験則だからな!」

「わー、ゴールドルフさんが船長みたいなこと言ってる。プークスクス、かっこいいー(棒)」

「みたいも何も私は船長だからね!?そしてやっぱり君は私が嫌いだよ

ねえ!？」

——反撃は始まった。これより、立香たちの向かう世界は弱肉強食の理論を突き詰めた永久凍土の世界。絶え間ない雪嵐——産み落とされる魔獣に対抗する為、人が進化を遂げた歴史。脆弱さは邪悪であり、死は敗北であり、強靱さこそが正義と称えられる異聞<sup>いぶん</sup>。

異聞深度：D 『永久凍土帝国アナスタシア』 開幕。

虚数空間<sup>トシネル</sup>を抜けるとそこは白銀の世界だった。——否。情報は適切に表現しなければならぬだろう。一面の銀世界どころではない。シャドウ・ボーダーが浮上した緯度経緯共にロシアの大地である筈の世界には修正液で塗り潰したような風景が広がっていた。

雪雪雪。絶え間ない雪嵐。外気温マイナス100度の極寒の世界。人類の健全な生存など望むべくもない環境。

その光景を目にした一同は文字通り身が震えた。故に行動は迅速を貴ぶべき状況。既に食糧面で猶予の限られていたシャドウ・ボーダーが浮上した先が生物の生息が困難を極める極寒の世界だと知つてすぐ、シャドウ・ボーダーの頭脳であるダ・ヴィンチとホームズの二人はゴルドルフに立香と彼女のサーヴァント達による周囲の情報及び食糧の収集を進言。『立香を自由にする』ということに不安感を抱いているゴルドルフであったが、太つちよ紳士たる体型維持の為に食糧の確保は彼としても急務であり一度考えながらも要請を受理。

立香は単身で極寒の世界に向かうこととなった。

それに対してマシユは自分も着いて行き力になりたいと言おうとして、けれど言葉にはできなかつた。今のマシユにはデミ・サーヴァントとしての力が少ししか残っていない。短時間ならまだしも長時間の戦闘には耐えられない。あるいは立香に誰でもない彼から貰った力がなければ、ホームズとダ・ヴィンチもそんなマシユを危険だと知りながらも立香と共に送り出すしかなかつただろうが、今の状況は

そうではない。立香にはチカラがある。だから、単身での極寒の世界の調査が許されたのだ。

でも、それでも自分も一緒に行くと言おうとしたマシユの脳裏に浮かんだのは——自分を守り消滅してしまったカルデアのダ・ヴィンチの姿だった。次はない。もう次はない。それを知るからこそ悔し気に唇を噛むマシユを立香は出立の前に優しく抱きしめて、言った。

『マシユ。行ってきます。まるで妹を思う姉の様な、本当に優しい声だった。立香は笑う。優しく笑う。楽しそうに笑う。その笑顔にマシユは——『行ってらっしゃい。先輩』と言葉を返すしかなくなった。

こうして立香は単身、魔術礼装——極寒地用カルデア制服に身を包み極寒の世界に旅立った。

——それが数日前のことである。

「魚魚魚——さかなーをーたべーるとー、頭頭頭——あたまがーおかしくくと、獲物を発つ見——。残念ながら蜥蜴です。さて、クイズです！ ムニエルさんの郷土料理を食べるのはいつになるのでしょうか！」

極寒の世界で蠢く魔獣。それを見下ろしながら、基本は常時平常運転の立香は彼の頭をテシテシと叩いた。無論、彼の頭は痛まない。なんなら立香の手が痛くなるくらいだ。

見下ろされた魔獣。本来ならうら若き乙女である立香の柔らかかな肢体を容易く引き裂くことが出来る魔獣は——彼の手により叩き潰される。立香は飛び散った魔獣の血を気にすることなく彼の肩から飛び降りると魔獣の肉片を集め始める。これは食料。シャドウ・ボウダーで立香の帰りを待つ皆の大切な食糧。だから、手を休めることなく魔獣の肉片を片っ端から背負う天才印の特製特大バッグに詰め込んでいく。そして、積み込み終わると彼の名を呼んだ。

「積み込み完了！また肩に乗せてー、バベツジさん」

「了解した。我が手に乗り給え」

立香の呼びかけに答え——極寒の世界で起動する巨大ロボ。もとい、

蒸気王―チャールズ・バベツジは蒸気を噴き上げながら巨大な手を立香の前に差し出した。立香はその手に乗りバベツジの肩の上に帰還する。

立香を肩に乗せ、バベツジは進行を開始する。

蒸気王―バベツジのスキル―『機関の鎧』。それは彼の宝具―渴望と夢想とが昇華された固有結界より生み出された全身機械鎧であり、バベツジは常にそれを身に纏っている。

故に彼の行動には常に駆動音と蒸気が発生する。

バベツジの歩みは蒸気を巻き上げ周囲の雪を少なからず溶かしながらの進行であり、歩を進める度に鳴る駆動音は辺りの魔獣たちに自分たちの存在を知らしめながらの進軍であった。

そして現れる魔獣たちを文字通りの鎧袖一触にする様はまさしく「王」そのものであり、だからこそ、数日前より立香とバベツジの存在に気が付きながらも近づくことが出来ずにいた彼らは、今日も魔獣を狩り去っていく二人の姿を見送ることしかできなかつた。

しかし、狩場を荒らされた彼らの怒りは強い。

――彼らの爪と牙は既に研がれていた。

## 立香ちゃんは許さない②

シャドウ・ボーダーを中心に立香の持つ通信機の通信可能領域の探索。南に向かい。西に向かい。東に戻り北に行く。そうして周囲の探索・調査を行うこと数日―極寒の世界で魔獣の肉ではあるが食糧事情の安定。並びに危険因子の排除を可能にした立香たちの非日常は比較的、普通に受け入れられるものに成っていた。

だから、だろう。新所長―ゴルドルフは名探偵―ホームズによる広範囲を対象とした探索の要請を突っぱねていた。

『いやいやいや、君い。折角、この周囲に危険がないことが証明されたのだ。もう少し、そう、もう少し食糧やら何やらを集めるべきだろう？それにもしかしたらもう少し待てば我々同様に世界の“漂白”から逃れた者が現れるかもしれない。もしくは君たちが可能性を示唆した汎人類史から呼び出された英霊が現れるかも知れない。だから、まだ、時期尚早だろう』

ゴルドルフの変わらない返答にホームズは何度目か分からないため息を吐きながら現状維持なら少し休ませて貰おうと司令室の席を立つ。

向かう先はダ・ヴィンチのいる電算室。

虚数空間より脱しカプセルより出て船内を自由に動き回れるようになったダ・ヴィンチは私室としてある電算室の中で何やら機械を弄っていた。それは何だ？―と問うホームズに対してダ・ヴィンチは可愛らしく笑う。

「なに、今のうちに来ることをやっておこうと思ってね。そっちはどうだったのかな？どうせゴルドルフ君はまだ動く気はないんだろ？君の顔を見ればわかるさ」

「…そうだ。どうやらゴルドルフ氏はボーダーでの生活を意外と気に入ってしまったらしい」

「あはは、確かに現状ではボーダー内にいれば危険はない。レーダーに空調設備もある。司令室の椅子のスプリングが若干硬いことを除



けばボーダーは完璧さ。流石は私だね」

可愛らしいドヤ顔をするダ・ヴィンチにホームズもまた同意する。二人が作り上げた虚数潜航艇シャドウ・ボーダーはあの限られた時間で作り上げられるものとしては完璧だった。完璧に過ぎた。そして、そこに6騎のサーヴァントを有する立香という戦力が加わることで停滞を呼ぶ。安全・安心・安寧。素晴らしい。―だが、それは凡人を容易に墮落させる。

「何もしなくなり何もできなくなってしまう」。―今のゴールドルフがそれだ。完璧故に理想的な展開のみが続く現状を経て、思考もまた楽観的なモノへと流される。

「良い事が続いているのだから、幸福が訪れるに違いない。」

「たとえば、そう。外部から助けが来るとか。」

ホームズは断言したい。それはない。絶対でない。だが、しかし、その考えは彼の頭脳の中にだけある納得でしかない。故に―君はどう思う？と問いかけるホームズに対してダ・ヴィンチは少し眉を下げた。

「正直、わからない。いや、私としても現状維持には反対さ。今は安定しているけど、此処は敵地だ。必ずピンチはやってくるものさ。ただ藤丸ちゃんなら、そのピンチをチャンスに変えちゃうかもとも思うのさ」

「ピンチをチャンスに…ふむ、確かに彼女の旅路は常にそうあるものだった。ならば今回も、か。…ダ・ヴィンチ。そう言えば私は一つ、疑問に抱いていることがある。何故、彼女は森長可や魔王信長ではなく、バベツジ卿を選んだのか」

ホームズの上げた疑問にダ・ヴィンチは首を傾げた後、揶揄うような可愛らしい声で答える。

「おいおい、そんなことは解りきっているだろう？この極寒の地で活動可能なサーヴァントとしてチャールズ・バベツジは最適解さ。何せ彼は常に『機関の鎧』を着こんでいて寒さとは無縁。それに彼の傍にいれば蒸気で温めて貰える。その上、急な潜航で傷んだ魔術と科学の融合体であるボーダーの修理にも彼の知識は多くに役立ったものさ。」

だから、私たちは藤丸ちゃんの決めたことに口を出さなかった……あ

「そう。口を出さなかった。出せなかった。さて、藤丸立香は此処までの確に状況判断のできるマスターだったか？いや、成長したのだろう。数多の旅路を経た彼女を昔の彼女と比べてはいけない」

立香は成長した。―それはいい。絆を結んだ英霊を理解している。―それもいい。その上で適切な判断を下せている。―素晴らしいことだ。だが、しかし―ホームズの続く言葉にダ・ヴィンチはなぜこんな簡単な疑問に気が付かなかったのだろうかと唸った。

それは成長と呼ぶにはあまりに歪で、理解とは到底かけ離れたもので、独断は適切ではない判断だ。―少なくとも彼らの知る『立香』なら。

「だが、私たちの知る彼女なら、私たちに助言の一つでも求めてくれていただろう」

「…もつたいぶるなあ。君がそこまで言葉にしたんだ。答えは出ているのだろう」

気付いてしまえば当然の疑問にホームズは答えを出す。

「彼女が我々の為に戦おうとしていることは明白だ。そこに疑問を挟む余地はない。だが、その過程における彼女の考え方は、我々、いや、この場合はマッシュ嬢と言うべきだろう、優しい彼女と相容れないと判断したのだろう。だから、我々に助言を求めない。そして、彼女に助言を与える存在は6騎のサーヴァントの中に存在している」

「それは誰かな？」

「彼女が誰を抱えているのか、それを何故か秘している今の段階では『私たちの知る誰か』としか言えないだろう。少なくともカルデアのデータサーバーに記録された彼女と絆を結んだサーヴァントではあるだろうからね」

ホームズの理論にダ・ヴィンチは一応の納得を示しながらも、やれやれと両手を上げ首を横に振り小馬鹿にした様子で可愛らしく否定の言葉を口にする。

「どうやら君は一つ勘違いをしているらしい。まあ、そこがシャー

ロック・ホームズがシャーロック・ホームズたる部分ではあるの  
らうけどね」

「ほう？私の推理が間違っている？」

「いや、完璧さ。藤丸ちゃんの後ろに良からぬ入れ知恵をしよう  
としているサーヴァントが居るといふ君の推理は正解なんだろう。けど、  
動機の部分が少し足りないんじゃないかな。彼女は我々に気を使っ  
ているのさ。君にも経験くらいはあるだろう。自分を過信してし  
まったことが…ね」

ダ・ヴィンチの言葉にホームズは嫌な事件を思い出したとでも言  
いたげな彼としては珍しい苦虫を噛み潰したような表情をした後、—あ  
あそうかとダ・ヴィンチの言いたいことを理解した。

そう。事は全て立香が二人に要らない気を使ったことが原因。し  
かし、その原因の原因が事だけに強くは責められない。カルデア襲撃  
時、自分でも手の届く範囲のことを行おうとした立香は、意図せずに  
ダ・ヴィンチの手を借りようとしたことで—彼女を失った。その時の  
激情は、後悔は、「新しいダ・ヴィンチちゃん」が現れた所で未だに  
立香の中に残っている。

だから、進んで頼ろうとしなかった。自分で、自分たちでやりき  
ろうとした。そして、そんな立香の思いを称賛して手を叩いたサーヴァ  
ントが居た。彼女にとって努力とは何より貴ぶべきもので、だから  
「光栄に思うがよいぞ！」と皇帝にまで上り詰めた、些か歪んではいる  
が間違いなく優秀な頭脳で立香に知恵を貸したりしていた。そうな  
ると立香は簡単に調子にのる。その結果が、これである。

皆が気が付かない所で気を遣おうとした立香は、自分が気が付かな  
い所で皆に迷惑をかけていて、しかも、気を遣おうとしていたことを  
見抜かれた。後日、それを知った立香は穴に入りたくなるほどの羞恥  
を味わうのだがどう考えても自業自得なのでどうでもいい。

考えるべきは立香に知恵を授けた彼女の考えである。

極寒の世界における6騎の内で最も適切なサーヴァントの選抜。  
上と下とが明確に区分された国において皇帝にまで上り詰めた彼女  
の策謀がその程度で終わる筈が無かった。

移動と行動に蒸気と駆動音を巻き上げる―バベツジ。絶対零度の世界において目立つ他にない彼を選んだ彼女の意図は、丁度、その瞬間に明るみにでた。

シャドウ・ボーダー内に立香の異常事態を知らせる放送が流れる。

《はわわー!?なんか囲まれてるよー!?なに、あれ。狼男かも!?》

ホームズとダ・ヴィンチは何処かで童女が笑う声を聞いた。―には  
☆。

零下100度の極寒の世界に適応した新人類。この異聞における人類の名は“ヤガ”。人と魔獣の混成である彼らの外見は立香の言う通り人狼の様だった。寒さに耐える毛皮を纏い、鋭い牙と爪を持つ人間。性能<sup>スペック</sup>だけで見れば、立香達を旧人類と呼べるほどには優れた新人類ではあつた。ただし、本当にヤガが優れているだけならばこの異聞は切除されなかつた。

ヤガは優れていたが、同時に燃費が悪いという欠陥を抱えてもいた。旧人類と比べ10倍位以上のカロリーを摂取しなければ生存できない彼らは、生物の活動が著しく制限され畜産も農作にも適さないこの世界において、唯一適応した人類でありながら文明の進化には適さない。故に消し去られたこの異聞。

そして、ここまで説明をしたのならヤガ達にとって立香とバベツジが魔獣を狩って回っていた場所―彼らの“狩場”がどれだけ大切なものだったかは説明しなくてもいいだろう。

ロシア異聞帯はもうすぐ本格的な冬の時期に入る。ただでさえ強く吹き荒れる雪風が更に強くなる。そうなる前にヤガ達は備蓄をしなければならなかつた。生きる為に魔獣狩りをしなければならぬ。それが彼らの生きてきた歴史―そこに割って入ってきた者たちにかける情けを彼らは持たない。

魔獣を蹴散らす鋼鉄の巨人。それを操る魔術師。それらに対する

恐怖はあった。

しかし、もうこれ以上、狩場を荒らされればどちらにせよ彼らに生存の道はない。

覚悟を決めてヤガ達は武器を取った。

「はわわー!?なんか囲まれてるよー!?なに、あれ。狼男かも!」

「周囲に生命反応を多数確認。どうする、端的に言って貴様は狙われている。魔獣たち同様に蹴散らすか」

「うん!って言ったらバベツジさんは私を地面に落す癖に、言葉が通じそうだし蹴散らさないよ。ふんわりメレンゲホイップだ!」

「理解不能。端的に言って私には貴様の命令の意味が分からぬ。〴〵ふんわりメレンゲホイップ」とはどんな意味を持つのか説明を求む」

「優しく甘々に小突いてあげて♪」  
「承った」

その覚悟は、結果的に言えば全くの無駄で終わる。当然だ。ヤガがいくら優れて居ようとサーヴァントには届かない。牙を剥き出し爪を研ぎ武器を持ち立ち上がったヤガ達は少女を肩に乗せた鋼鉄の巨人に成す術もなく敗北を喫した。

それは考えれば当然の帰結であり、場を荒らして現地民との関わりを持つ。〴〵武力を以って妾<sup>わらわ</sup>たちの威光を示してやるのじゃ!と考えた、立香のちよつと悪役よりの頼れる頭脳<sup>ブレイン</sup>の目論見通りの展開だった。

ただその先―現地民たちとの戦闘の余波により呼び起こしてしまつた存在の対処は、流星に予想外の展開だった。

「接近する熱源反応。巨大である」

「ほえ?バベツジさん。どしたの突然?」

「貴様も周囲の者達も警戒せよ!」

元々少女たちの手により荒らされていた魔獣たちの縄張り―さらにそこで大勢のヤガ達が遠吠えを上げたことで〴〵縄張りの主が動き出した。

――大地を揺らす咆哮。

多頭の大蛇の魔物が現れた。村一つなら平気で潰すことの出来る

この異聞においても脅威とされる魔物の乱入に、ヤガ達は震えた。

「な、ジャヴォル・トローン」だ！くそつ、音を出し過ぎたんだ!!」  
「あのデカ物にも勝てなかったのに、あんな化け物相手にしてられるか！俺は逃げるぞ!!」

「でもそれじゃあ、俺達の狩場が!」

「命あつての物種だろうが!!お前が相手にできるつてののか!」

混乱の極みに陥ったヤガ達が次々と逃げ出していく中で一人のヤガは銃を抱えたまま鎌首を擡げるジャヴォル・トローンを見上げていた。〃彼〃の中の本能が逃げられないと理解していた。ヤガ達の身体能力は高い。だが、それは先ほど鋼鉄の巨人に勝てなかったことから分かるように絶対ではない。対して、彼の中でジャヴォル・トローンは絶対だ。村一つを平気で潰す怪物。そんな相手に鋼鉄の巨人との戦いで消耗した状態で出会った時点で自分たちの命運は尽きていたのだと彼は悟る。

強食を突き詰めた異聞<sup>せかい</sup>。そこに置いて〃死〃は何の価値もない。生者の腹を満たすだけの〃屑肉〃でしかない。弱肉にも成れない。

「(そうか、俺はそれに疑問を持つから)」

ジャヴォル・トローンの頭の一つが彼に向かってくる。目の前でジャヴォル・トローンは口を開けた。

「(周りの連中と、噛み合わせねえ訳だ)」

彼の視界が鋭い白色と悍ましい赤色で満たされる。

「死にたく、ねえなあ」

年老いた母親の姿を想いながら一人の若いヤガがそうして命を散らした。

―その結末を止めたのは荒々しく武骨なまでに巨大な鉄塊だった。

「…は?」

鋼鉄の巨人の持つ鉄塊がジャヴォル・トローンの頭を殴り飛ばす。殴られたジャヴォル・トローンの頭は飛んだ。彼にとって絶対である化け物が悶絶の悲鳴を上げている中で、嗤い声が響いた。それは古い書物の中にしか存在しない清々しい空に響く遠吠えの様な嗤い声だった。自分の〃絶対〃を信じて疑われない子供の様な嗤い声だった。

彼が目を向けた先で鋼鉄の巨人の肩に仁王立ちしている少女は――  
嗤っていた。

「あは、あはは、アハハ！駄目だよ。私が救うと決めたんだから殺すことは許されないのだー！やっちやえ、キャスターー！」

その掛け声は常識的に考えて頭脳で戦う筈のキャスターに掛けるものではなかったが、仁王立ち少女―立香のキャスターは世にも珍しい鋼鉄アイアンメイイスの塊を振り回して戦うキャスターであったので、ヤガ達を守れというマスターの命令に彼は嬉々として従った。

「承った。この身すべては妄念と夢想に過ぎず、故に貴様の世界を憂う者である。鋼鉄にて、狂気満ちる貴様を導かんとする者である。想念にて、有り得たる貴様を導かんとする者である。蒸気じょうき圧―解放かいほう」

鋼鉄の巨体が動き出す。蒸気を噴き上げ動き出す。

「チャールズ・バベツジ」。

十九世紀の数学者にして科学者。世界の変革を夢見た蒸気王。現実世界における彼は―志半ばにして死んだ。『階差機関』も『解析機関』も完成しなかった。時代の狭間に消えた『有り得た未来』の夢を世界に残し、彼は死んだ。

そして、だからこそ現界した彼は思う。有り得た未来を異形の鋼鉄として身に纏い―夢想した未来を宝具として―自分の肩に乗る少女を思う。

「我が空想世界には、争いはなく発展と繁栄のみがある」

―そう語って聞かせた時の少女の笑顔を思う。

『ディメンジョン・オブ・スチーム絢爛なりし灰燼世界』

異形の世界の大偉業―創造へ叛逆する万物破壊の固有結界。そうしてバベツジはジャヴォル・トローンを数多の肉片に変えた。

## 立香ちゃんは許したくない①

ロシア異聞帯―零下100度を下回る極寒の世界に適應する為に魔物と人間を掛け合わせることを選んだ世界。そうして生まれた新人類―ヤガ。彼らは突如現れ自分達の“狩場”を荒らした立香たちに戦いを挑み、敗れ、そして救われた。

少なくともそう考えるヤガの若者―パツシイは多頭の蛇の魔物―ジャヴォル・トローンの肉片の雨が降る中、それを成した立香とバベツジに恐怖を覚え他のヤガ達が逃げ出していく中で、ただ一人、最後の瞬間まで立香とバベツジの戦いを見ていた。

圧倒的だった。圧倒的な蹂躪だった。そして、パツシイはその蹂躪に魅入られた。自分が絶対と信じたものが容易く碎かれる瞬間は逃げることも忘れて見入るに十分な光景だった。

ジャヴォル・トローンの蹂躪を終えた立香とバベツジがパツシイに視線を向ける。バベツジの巨体がパツシイに近づいてくる。

鋼鉄の巨人の肩に乗る少女の視線が自分に突き刺さっているのを感じた。

巨人の歩みを遅く感じる。聞こえてくる異音の度に逃げ出しそうになる。それでもパツシイがその場に留まることが出来たのは彼の他のヤガからは異端とされた考え方が故だった。

弱肉強食を突き詰めたこの異聞<sup>せかい</sup>において、パツシイには“死”が無意味だとは思えない。生きることの為に全てが許される世界で、自分が生きること以外にも大切なものはあるのではと考えてしまう。それがなんなのかをパツシイは知らないが、立香は知っている。

―だからだろうか。自分たちを恐れ、自身の生を優先し逃げ出したヤガ達とは違い、その場に残り自分達にお礼を言ってきたパツシイに立香は笑顔を返した。外見がまるで違うが故に美的感覚を共有できない新人類と旧人類ではあるが、パツシイは立香の笑顔を何故か美しいと感じた。



「こんにちは。私は立香。あなたは誰？」

「…パツシイ。あんたは、ヤガじゃないよな。『旧種』、人間か。皇帝ツァーリのコルドウーンと同じ」

「皇帝。あは、あはは、アハハ！知ってるよ。皇帝ツァーリの威光を遍く全てに！だよな。ねえ、パツシイさん。私、知りたいことが多すぎて困ってるの。助けてくれると嬉しいなっ！」

「皇帝ツァーリという言葉聞いた瞬間に表情を変えて嗤いだした立香に対して若干引きながらもパツシイは答えを返す。

「…いいぜ。ただそれでさっきの借りはチャラだ。それでいいな」「うん！」

それからパツシイが語ったことは立香たちが求めて止まなかった情報。

「この国において500年間に渡り存命だという最古のヤガーツァーリ皇帝。『イヴァン雷帝。古くからイヴァン雷帝に仕える為に存在する殺戮獵兵オブリチキニ。そして、最近になり王都に集い始めたという魔術師コルドウーン。その魔術師の中には立香と同じ旧種がいるという。クリプター

敵の居場所は判明した。この異聞帯が歩んだ歴史も理解した。もはや探索に掛ける時間は要らない。そこからの立香の動きは早い。すぐ様にでも王都に攻め込む。そう意気込み駆け出そうとした立香を通信を通して話を聞いていたホームズが止めようとする前にパツシイが立香を止めた。

「なあー待ってくれ！あんた、皇帝ツァーリと戦うつもりなんだろう。なら、叛逆軍と合流した方がいい。殺戮獵兵オブリチキニのやり方にムカついて皇帝ツァーリを倒そうとしている奴らが居るんだ。聞いた話じゃ、最近そこにも妙な奴が入ったらしい。会う価値はあるんじゃないのか」

パツシイの言葉で立香は止まる。少しだけ考えこむように首を傾げた後、立香は自分の傍にいる頭脳ブレインに意見を聞こうとした。―ところで、通信機を通じて可愛らしい声が辺りに響いた。一つだけ言っておこう。もしこの天才的に可愛らしい声が無ければ叛逆軍と立香が合流する未来はなかった。なぜなら立香の頭脳ブレインは叛逆者とか、謀反者が嫌いだった。イヴァン雷帝を打倒しなければならぬ自分達を柵に

上げて、謀反とかマジ無いのじゃ」である。叛逆軍など羽虫の集まりが彼女の考え方であった。

だから、その天使の如く天才的な可愛い声は今後の立香の行動を大きく救った。

《私を頼ってくれたまえ!!》

「ふえ!?いまの声はダ・ヴィンチちゃん。急な大声に立香ちゃんの心臓はバクバクだよ?どうしたのかな?」

《えへへ、なにちよつと出番が欲しくなっちゃって。でだ、藤丸ちゃん。そのパツシイ君の提案に乗ろう。敵の敵は味方さ。ここまて言うんだ。案内役はパツシイ君が買って出てくれるだろうか?》

「あ、ああ…なんだ、どこから声がすんだよ。まあ、けど、その通りだ。だが勿論、タダじゃねえ。あんたらを案内する代わりに俺も無事に叛逆軍の元に連れていくと約束しろ」

「パツシイさんも叛逆したいの?皇帝ツァーリに中指突き立てガツテムなの?」

「ああ、少し前までは皇帝ツァーリの威光に従っていたらればキツイが生きられたんだ。だが、それも三ヶ月くらい前に変わっちゃった。正直、冬を乗り切れるかもわからねえんだ。なら、いつそ叛逆軍に加わった方がマシだ」

《よし!話は決まったね。藤丸ちゃん。まずはパツシイ君を連れてボーダーまで戻ってきてくれたまえ。それから叛逆軍の下に向かうことにーゴルドルフ君ちよつと黙っててよ。ホームズ。うん。いつまでも好きにさせる訳にはいかないだろう》

何やら通信機の前でゴルドルフが喚いている声が聞こえていたが、ホームズがゴルドルフに一言いうと消えた。立香には何を言っていたかは聞こえなかった。

「ダ・ヴィンチちゃん?なにかあったの」

《ううん。なんでもないさ。そういう訳だ。待っているから早く帰っておいでー何なら戻ったら一緒にシャワーでも浴びるかい?》

「えー本当!!わーい。バベツジさん。パツシイさんに乗せてあげて!全速力でボーダーに帰還するよー」

「承った。我が手に乗るがいい。異なる世界の隣人よ」

「…え。…あんたに、乗るのか………わかった。握りつぶしたりするなよ」

こうして立香はパツシイと出会い、絶妙のタイミングで叛逆軍の下へ向かうことになる。

——それが正史。それが正道。それが正解。——だというのに立香にんげんは何時だつて失敗する。失敗を繰り返してきた。その繰り返しの中でダ・ヴィンチの言うようにピンチをチャンスに変えてきた。だから、今回の事もまたその一環である。——筈だった。

立香が力を持つことで正史においてロシア異聞帯でパツシイと出会うタイミングが遅れた。叛逆軍と合流するタイミングも遅れた。けれど、世界の修正力とも呼ぶもののチカラにより、絶妙なタイミング。ギリギリのタイミングで合流することが出来るはずだった。けれど——

それは後に記録を見れば明らかな失敗だった。そのせいで立香は叛逆軍と合流できずに、あったはずの出会いを台無しにした。けれど、それを責めることは出来ない。神のみぞ知る、でもない。神も知らない。知りえない。いつの時代もそれを見誤るからこそ、神は姿を消してきた。

「…なあ、散らばってるジャヴォル・トローンの肉塊を集めて、一度、村に寄つてもいいか。…母親が村に残っているんだ」

「お母さんも叛逆軍に参加したいの？」

「いや、あいつは弱い。叛逆軍になんて参加できねえよ。奴らにも戦えない奴を養う余裕はないだろ。…だから、コレを最後にあいつに届ける食糧にしたい」

それは肉親を思うヒトの感情。それはヒトがヒトである証左。そして、——往々にしてそれは奇跡を呼ぶと等しく悲劇を生む。

「ふーん。…いいねえ。パツシイさんの今日のラツキーカラーはきつと白だねっ！。いいよー、お母さんも一緒に連れて行こう。叛逆軍が

面倒をみない？残念！立香ちゃんが助けちゃいますからー」

パツシイの村。

皇帝ツァーリに忠誠を示し、「狩場」を独占することで他の村々よりも比較的に食糧事情に余裕を持つその村には、だからこそ税の徴収に訪れる殺戮猟兵オブリチキニが駐留していた。そして、パツシイ達のような若く強いヤガが居るのなら、その村を襲うには相当な労力を要する。少なくとも犠牲も覚悟しなければならぬだろう。

ただでさえ「叛逆」という「正義」を掲げる彼女にとって、皇帝ツァーリに忠誠を示しているとはいえない、ただの村人である彼らに弓を向けるのは心が痛む―その痛みの上に積み重ねられるかもしれない犠牲は、可能な限り減らしたい。その考えは真つ当なもので、だから、ギリギリのタイミングだった。

立香達がジャヴォル・トローン的肉塊を食糧として集めて居なければ、ギリギリのタイミングでパツシイの村へと、やむにやまれぬ事情により食糧の提供を強制的にお願いしようとする叛逆軍と、村にたどり着く前に合流することができた。

だが、しかし、そうはならなかった。

「ボス、どうやら情報通りに村の男衆は出払ってるみたいです。理由はわかりませんが…どうせ、独占している狩場での狩りでしょう。あの村の連中はその狩場の為に他の村の者を撃ち殺す様な連中だ」

「…憤りは収めろ。私たちは無駄な争いは望まない。だから、このタイミングでやってきたことを忘れるな。皆にも伝えろ。無益な血を流すことは許さない。特に子供に銃を向けるような奴が居れば私がハリネズミにしてやるとなっ！」

「ボス、ハリネズミってどんな魔物ですか？強いですか？」

「…やりにくいな」

黒い毛皮を纏った女性―人理を救う為に世界が召喚したサーヴァント―アタラント・オルタ。

子供に優しい彼女は堪えるように顔を歪ませパツシイの村を見ていた。

「正義のための戦いとは、こんなに苦しいものだったか？」

答えはない。それでもアタランテ・オルタは弓を取らなければならぬ。彼女は叛逆軍とは名ばかりの行き場の無い弱者達——ヤガの常識からすれば見捨てるべき弱者達、老人や病人や子供を捨てられずに意思弱き者達と迫害され行き場をなくした彼らを救わなければならない。

その為には食糧が必要だ。先日、殺戮猟兵オブリチキニに焼き払われた隠し食糧庫には叛逆軍の集めた全体の三割にも及ぶ食糧が収められていた。それを失った。ヤガにとつて食糧を失うことは死活問題だ。人間は水だけでも7日は生きられるが、ヤガは3日で死ぬ。老人や病人、子供であれば更に早く命を失う。それだけは——彼女にとつて避けなければならない最悪の結末だった。

無論、アタランテ・オルタもパツシイの村が飢えるほどの食糧を持つていく気はない。パツシイの村が食糧を必要以上に溜め込んでいることは調べが付いているのだ。だから、飢えない程度に奪う。だから、これは助け合いなのだと言き捨てて——自嘲した。

「とてもではないが子供に見せられぬ姿をしているのだろうな。今の私は……、行くぞ」

それでも弱者を救う為に。それでも前に進むために出した足は——確固たる信念の為に出されたが故に止まることが出来なかった。

村の手前でパツシイが叫んだ。ヤガの目は人間よりもはるかに遠くを見渡す。

「なんだ、あの連中……つ、まずい。村が盗賊に襲われている!!」

《藤丸ちゃん。こつちでも殺戮猟兵オブリチキニの霊基を確認した。どうやら村で

争いが起きているようだ》

火は燃える。炎に変わる。雪の世界ではあまりに不運な争いがあつさりと起きてしまう。

叛逆軍を率いるサーヴァント―アタランテ・オルタ。

彼女はホームズが推理した異星の神に対抗する為に召喚された汎人類史側のサーヴァント。つまりは立香の味方となる筈のサーヴァントだった。過酷な世界で生きるヤガ達―その上に振り下ろされる皇帝ツァーリの威光が幼い子供の命まで奪っているという現実に叛逆する為に弓を取った彼女の感性もまた立香が好む「英雄」そのものであり、だからこそ立香とアタランテ・オルタは共に戦うことが出来た筈だった。

白銀の世界を黒い魔獣―魔猪カリユドリンの毛皮を纏ったアタランテ・オルタが疾走する。序だとはかりに周囲にいた殺戮オブリチキニ猟兵達を斬り倒しながら、鋼鉄の巨人―バベツジに迫り、バベツジの肩に乗る少女―立香に矢を向けた。振り下ろされる巨大な鉄塊アイアンメイユス。矢が放たれる前に振るわれたバベツジの攻撃がアタランテ・オルタに迫る―アタランテ・オルタは距離を取った。繰り返すこと五度目の攻防。

立香とアタランテ・オルタの視線が交差する。互いに言葉はない死線のやり取りにバベツジの蒸気が花を添える。死地が築かれていた。何が悪かったかといえば、きつとすべてが最悪だった。タイミングも、互いの第一印象も、村人たちがかけた言葉すらも、悪かった。

アタランテ・オルタはパツシイの村に来て直ぐに駐留していた殺戮オブリチキニ猟兵達を制圧した。圧倒的な武力を見せつけた上での交渉にパツシイの村の村長は応じるしかなく、備蓄していた食糧の五割を叛逆軍に提供することとなる―寸前で立香とパツシイを乗せたバベツジが村に到着した。

そんな場面を目撃すれば、「相手は盗賊だ」と叫んだパツシイに非は無く、また立香もその言葉を信じた。無論、盗賊の頭目と思しき者がサーヴァントであったことに何も思わなかったわけじゃない。立香は戦う前に、何か事情があるのだろうか——対話を試みようとした。

ただ、その瞬間に殺戮猟兵オブリチキニの増援が現れた。しかも、村に駐留していた殺戮猟兵オブリチキニより強力な個体だった。それをみた村長は叫んだ。

『や、やった……皇帝ツァーリはやはり、我々を見捨てていなかった！コルドウーンの方も来てくださった！叛逆軍ども！恐れおののくがいい！皆殺しにされると思え！』

最近になり皇帝ツァーリの元に集ったコルドウーン——旧種の魔術師のことは噂になっていた。だから、そう言われてしまえば立香がそうであると思つたアタランテ・オルタの考えは至極真つ当なもので、矢を番えたこともまた仕方のないことだった。アタランテ・オルタとの対話を望む立香に矢は放たれた。それが立香を射抜いていたなら、まだよかつた。アタランテ・オルタの矢は確かに立香の肩を抉つたかもしれないが、それだけで命を奪うものではなかつた。アタランテ・オルタ自身が動きを止める為だけに射つたもの。ただ、その矢から立香を庇うようにパツシイが飛び出した。

「ちっ、痛て……くそ、ぼさつとすんなよ！旧種って奴は、弱いんだろ!」  
目の前で守ろうとしていた者が射抜かれた。その時点で、立香はアタランテ・オルタとの対話を放棄した。プツツンした。怒髪どはつかんむり冠むりを衝く、立香は吼えた。

「パツシイさん!大丈夫、そうだね。よかつたー。……マジ意味わかんないんですけどお、いきなりなににするの、話し合おうとか思わないの。……いいよ。うん、心まで獣に成りたいなら、付き合つてあげる!!ねえ、バベツジさん!!」

「否定する。他の者が貴様に対し甘すぎる故に、私は叡智えいちを捨てず猛る貴様を窘める者である。だが、目の前のサーヴァントの危険性は理解する。その危険性が貴様に危険を齎すなら、我が鋼鉄は全ての破壊を是とするものである」

「アハハ！結局、戦つてくれるってことだね。バベツジさんは優しい

から大好きっ。パツシイさんは降りててねー」

心優しい鋼鉄の巨人は怪我人を降ろすと嗤う少女を肩に乗せたまま動き出す。巨体が異音を鳴らし蒸気を噴き上げる。単眼モリアイが赤く光る。その光景は対する者すべてに恐怖を与えるものであり、叛逆軍のヤガ達は銃を向けて発砲した。無論、そんなものがバベツジの装甲に通じる筈もなく振りかぶられた巨大な鉄塊で叛逆軍のヤガ達は殺戮オブリチキニ猟兵ともども吹き飛ばされる。それはバベツジがヤガの身体の頑丈さを知っているからこそその攻撃であり、手加減をしているのだがそれを知る由もないアタランテ・オルタは同胞が討たれたことに怒りを抱きながら矢を番える。

「貴様ツ、やはり皇帝ツァーリの手先となった魔術師とサーヴァントだな!!」

「否定する。私の主は誰の手先にもなり得ない」

「あはは、そうだよ。私を皇帝ツァーリの手先と間違えるなんて、最低最悪SつまTまない」

「え、えすえす、ていー?ええい、意味の分からない言葉を使うな!人の言葉で話せ!」

「話してるよー。そっちこそ無理に人の言葉で喋んなくてもいいんだよ?使い慣れたの使いなよ。アハハ!豚語とか、ブヒブヒ♪」

「…ブチ殺す」

本来であれば共に戦うことの出来たサーヴァントとマスターの争い。どちらが悪かったとか、そういうことはない。確かに立香の性格は少しばかり悪かったかも知れないが、引き金を引いたのはアタランテ・オルタが先で、バベツジは立香を甘やかす他のサーヴァントとは違い自分位は立香を窘める側に回ろうと思いつつも結局は甘やかしていたが、やはり誰が悪い訳でもない。この場にいる者達に責任の所在は問えない。責任者は何処か。

責任は問えない。往々にして運命の分かれ道を決める弾丸はそうして放たれる。一つの弾丸から始まる虐殺がある。立香は見てきた。何度も見てきた。多くの英雄たちの記憶を夢として見る中で多くを見てきた。いわれのない虐殺を繰り返して見えてきた。正義の蛮行を瞞に焼き付くほど見てきた。だからこそ、激情に駆られながらも、そこ



だけは間違えてはいけなかった。ああ、だから、やはり、先の言葉は否定するべきだ。

立香しぶんが悪かった。と―後に立香は後悔した。

殺戮猟兵オブリチキニ。―バベツジとアタランテ・オルタの戦いのついでとばかりに蹴散らされる皇帝ツァーリの威光を示す為のみに存在するイヴァン雷帝の宝具の一つ。イヴァン雷帝が眠り続ける限り、滅びることのない無敵の軍隊。

この場において彼らだけが誰の味方でもなかった。立香は村人の味方だった。アタランテ・オルタは叛逆軍の味方だった。殺戮猟兵オブリチキニだけはこの場にはいない皇帝ツァーリの味方で、そして、その庇護対象には村人も入ってはいない。彼らは取り立てる者。皇帝ツァーリの威光の為に税を、命を刈り取る者。

「粛清。粛清。粛清。この光景全てが皇帝ツァーリの威光を貶めるもの。全員、首を差し出すべきだ」

殺戮猟兵オブリチキニが銃を構える。その先には母親に庇われる子供がいた。―全員に例外はない。乾いた音が鳴った。

凶弾が二人の命を簡単に奪おうと放たれる。戦いに巻き込まれた親子が死ぬ。誰かの叫びが上げる。それを全員が見ていることしかできない。立香も、バベツジも、アタランテ・オルタも見ていることしかできない。自分達が起こした戦いで親子が死んだ。その結末に三者が動けずに辿り着く寸前で、親子に向けて放たれた殺戮猟兵オブリチキニの銃弾が空中で静止した。

空中で静止する弾丸。無論、そんな現象はあり得ない。目を凝らせば見えてくる氷の壁が、凶弾から親子を救っていた。突然訪れた救いに眼を疑う中、戦いが止まり掻き消えていたダ・ヴィンチの言葉が立香に届いた。

「――ちゃん！―丸ちゃん！藤丸ちゃん！ああ、よかったようやく聞こえたようだね。目の前のサーヴァントとカルデアのアタランテの霊基パターンが一致した！彼女はアタランテが反転した姿、おそらく私たちの敵じゃない。敵はもうすぐ来る。間違いない。カルデアに残されていたデータ通りの魔力パターンだ。元Aチームの魔術師―

カドック・ゼムルプス。七人のクリプターの内の一人だよ!」

ダ・ヴィンチの通信を聞いて立香は村の奥へと目を向ける。雪風が吹きすさぶ中、近づいてくる白い二つの影。

くすんだ銀髪の少年が白い皇女と共に歩いてくる。

彼は村で起きている惨状を見ながら吐き捨てるように言った。

「世界を救っておきながら、村一つ満足に救えないのか。三流マスター」

カドツク君はがんばりたい

「世界を救っておきながら、村一つ満足に救えないのか。三流マスタ―」

クリプター―カドツク・ゼムルプス。

混沌カオスとなる場。唐突に思えるカドツクの来訪の理由を説明するのなら、時間を少しだけ巻き戻し舞台も変えよう。

数日前―異聞帯ロシアの首都―ヤガ・モスクワに聳える城の一室にロシア異聞帯を担うクリプター―カドツクはサーヴァント―アナスタシアと共にいた。

凍える世界にありながら安全に暖を取ることの出来る場所で温かい紅茶を飲む。上流階級にしか許されない時間を過ごしながらもカドツクの表情は暗い。

それに対してアナスタシアは不満を持ったようで冷ややかな視線をカドツクに送る。

「私わたくしとのティータイムは、もう少し楽しそうにしなさい」

カドツクは眉間を揉みながら、小さく笑う。当然、寝不足により刻まれた隈は消えない。

「久々にゆつくりとした時間がとれたんだ、楽しんでるさ。ただ後のことを考えると憂鬱になる。僕らには、やるべきことが多すぎる」  
「それはそうでしょう。けれど、忙しくとも余裕を持つことが何事においても大切よ。急いで雪だるま一つ満足に作れない。極東にそんな言葉があるのでしよう?」

「…だいたい違うが、まあ、いいさ。意味は通じている。…アナスタシアの言う通りだ。皇帝ツァーリは未だに夢の中。今は僅かばかりの余裕を楽しむことにする。奴らが来れば、その余裕すらなくなるからな」

「奴ら、カルデアだったかしら」

「ああ、そうだ。君が壊滅させ、君を倒したマスターさ」

カドツクの言葉にアナスタシアは驚いたように空色の目を見開いた。アナスタシアにとってカドツクの言葉はそれほどに意外だった。――私を討った。

文字通りに受け取るなら嫌みともとれる言葉だが、カドツクがそういうことを言う人間でないことをアナスタシアは知っている。卑屈な努力家である彼は自分のいない所でのアナスタシアの失敗を責めはしない。その原因が自分の不在だとするなら、なおさらになら、どういう意味かしら――とアナスタシアは考えて、考え至り微笑んだ。「カドツク。もしかして、私が傷を負ったこと怒ってくれているの？」

「…そういう訳じゃない。僕はただ現状の確認がしたかっただけだ。君が優秀なサーヴァントであることは疑わない。そんな君を奴らは不意打ちとはいえ打倒した。その危険性は誤魔化せるものじゃない。ただ、そう言いたかっただけさ」

「貴方は誤魔化すときに早口になる癖があるわ。…ふふ、冗談よ。そんな目で睨まないで頂戴。本当に可愛い人」

テーブルを挟んで座るアナスタシアの手がカドツクの頬に触れる。氷の様に冷たい手だとカドツクは思った。抵抗せずに受け入れ続けられ凍傷を負ってしまうだろう程に冷たい手。その手を受け入れながら、カドツクはアナスタシアの視線から目を逸らしながら照れ隠しをするように言う。

「知っているか、極東には冷たい手の持ち主の心は温かいって言葉もあるらしい」

「あら、その言葉は間違いね。私の心はブリザードの様に凍り付いているわ」

「ああ、そうだ。手も肌も冷たい、僕らの心が温かい筈がない。誰かに差し伸べる手も、誰かを温める肌もないさ」

「…そうね。ねえ、カドツク。どうして私たちは凍えているのかしら。いえ、答えはわかっています。それはこの国が凍えているから、だから皇族である私は成しえなければなりません。皇帝の威光を遍く全

てに」

「ああ、わかっているさ」

カドツクは頬に触れるアナスタシアの手を取る。自分の頬から手を外しながら、その手を握り犬歯を見せて弱く笑う。その眼がアナスタシアの目を正面からみることはない。それでもその手はアナスタシアの手を離さない。カドツクは理解している。自分の脆弱よわさを知っている。

汎人類史最後のマスター―藤丸立香。自分たちが救う筈だった世界を救ったという少女の姿を初めて見た時、その顔に才能なんてものは欠片も感じられなかった。

カドツクは自分が大した魔術師ではないと知っている。才能は並み。家柄も精々300年程度の歴史しかない。そんな自分より劣っている三流以下のマスター。そんな感想。

―自分なら、もっと上手くやれた。

人類史救済の功績を聞いた時、そう思ったのは本心だ。藤丸立香よりも自分が、自分よりも他のクリプター達が、そして、誰よりもキシユタリアが、もっと上手くやれたはずだ。

言峰神父にカルデアでアナスタシアが敗れ、コヤンスカヤが殺されかけたと聞くまでは、そう思っていた。

藤丸立香―凡人だと思っていた少女は単独で6騎のサーヴァントを従える化物きせきだった。

なんて悪い冗談だとカドツクは嗤った。汎人類史の抑止力が生んだ奇跡といえは聞こえはいいが、どうやらそうではないようだった。

キシユタリアに言わせれば既に世界の「漂白」は成され、惑星は異星の神に敗北している。故に汎人類史が抑止力を振り絞ろうとも異聞帯にはぐれサーヴァントを数騎召喚するのが精々だという。ならば、藤丸立香は本当に単独で6騎のサーヴァントを抱えていることになる。

魔術の才能どころか知識もなく歴史も持たない一般家系の一般人。それが、神をも恐れぬチカラを持っている。正気の沙汰ではない。嫉妬などという言葉すら出てこない。

自分たちの物語に発生した誤植。何かの間違いとしか思えなかった。それでもカドツクが歯を食いしばりその真実に耐えたのは彼が優秀な魔術師だったからだ。誇るべき家柄は無い。努力と共に積み上げてきた魔術も数いる天才の足元にも及ばない。唯一誇れると思つた生まれ持つての才能―レイシフト適性もその有用性を証明するまでにすべてが終わってしまった。けれど、証明しなければならぬ。カドツク・ゼムルプスに価値はあるのだということ―

その思いは彼女を召喚したことで完成した。  
アナスタシア・ニコラ・エヴナ・ロマノヴァ。

ロマノフ帝国最後の皇帝―ニコライ二世の末娘。ロシア革命の激動に飲み込まれ虐殺された亡国の皇女。汎人類史ではサーヴァントに成りえなかった彼女は異聞帯のマスターであるカドツクに召喚されたことにより異聞帯の干渉を受け比類なき力を得た。

汎人類史の彼女が死の間際に見たロマノフ帝国秘蔵の精霊―ヴィイ。

その力を操る氷の精霊遣いと成った彼女は、力を得ていながら復讐を選ばなかった。

両親は死んだ。オリガ、タチアナ、マリア、皆死んだ。家来も召使もペットも皆虐殺された。善良な人生を送ることを主に祈った少女の祈りは―届かなかつた。

それでも彼女は復讐者に堕ちることなく魔術師としてカドツクの前に現れた。マスターとサーヴァントの間に生まれる絆は、サーヴァントの過去を夢としてマスターに見せることがある。その逆もまた然り。

アナスタシアの記憶を見たカドツクは尋ねた。―なぜ、恨まないのかと。

『恨みます。私は憎悪を忘れない。けれど、ロマノフ帝国の末裔として民を導く使命があります。ええ、憎くても、辛くても、私はその道を選びましょう』

その姿にカドツクは女帝の姿をみた。ロシア異聞帯―この帝国に

君臨すべき皇帝はアナスタシアであり、そして彼女の世界の為に勝利を誓った。

七人のクリプター。七つの異聞帯。それは漂白世界で行われる新しい指導者を定める競争。競争とは名ばかりだと、クリプターの一人であるベリルは言った。その通りだ。この競争はほぼクリシュタリアの勝ちで決まっている。

それほどまでの差がクリシュタリアと他のクリプター達の間には存在した。だが、カドツクは諦めることを止めた。

アナスタシアという光に目を焼かれたことを卑屈ながらに認めた。一目惚れではない。―ないと言ったら絶対にならないが、それでも彼女が凍えながらも創る世界を見たいと願った。

アナスタシアの威光を必ず帝国の頂点へ。そして、世界の頂へ。その為に戦うとカドツクは決めた。

「…僕は弱いが、弱音を吐くのはまだ早い」

「何か言ったかしら？」

「いや、なんでもない。それよりアナスタシア。僕は奴らがこの異聞帯に来たら直ぐに奴らに接触を図る。カルデアのマスター、誤植が生んだ化物。精々、あの偉大なる皇帝を打倒する為に使ってやるさ」

異聞帯にはそれぞれ「王」がいる。ロシア異聞帯の王はイヴァン雷帝。齢500年の最古にして最大のヤガ。汎人類史であれば齢50程で死亡する筈だった皇帝は極寒の世界に適応する為にロシア国土の下で凍り眠っていた太古の大型生物と合成されることで、成長期に入った。そして、今となっては山の様な体躯を持つ人の意思を持っているとはいけない怪物になってしまった。

極寒の世界に置いて威光を知らしめ帝国を導いた偉大なる皇帝―彼はもう生きているだけで罪深い。歩くだけで国を壊す。その上で、イヴァン雷帝は異星の神を認めなかった。彼には信仰する旧世界の神がいて、異星の神が齎した「空想樹」がロシア帝国に根を下ろすことを許さなかった。ただでさえ詰んでいるこの異聞帯が、それでは他の異聞帯に勝てる筈もない。

だから、カドツク達はイヴァン雷帝を王座から引きずり降ろしアナ

スタシアを玉座にすえる。

そこがようやくカドツクのスタートラインだ。

だから、やることは多くある。寝る間もないほど時間が惜しい。

けれど、今は――

「紅茶が冷めてしまったわ」

「いいじゃないか。僕は冷めた紅茶も好きだ」

「わたくし私は温かい紅茶が飲みたいの。淹れなおしてちょうだい」

「はあ、わかったよ。まったく我儘な皇女様だ」

カルデアの一行がロシア異聞帯に訪れた時点でカドツクは一気呵成に動き出す。その為の準備も怠らない。

けれど、今は――このティータイムを楽しもう。

そして、数日後、首都から離れた村にカルデアの者たちが現れたとの情報を受けて、カドツクは動き出した。手始めには偉大なる皇帝ツァーリ――イヴァン雷帝の打倒。

次いで、ようやく彼の戦いは始まる。



## 立香ちゃんは許したくない②

クリプター―カドツク・ゼムルプス。くすんだ銀髪に金眼。耳にピアス。カルデアに残されていた資料通りの外見をした少年の登場に、立香の意識は完全にアタランテ・オルタから外れた。

「バベツジさんっ！」

肩に乗る立香の敵意の先を見据えてバベツジは巨大な鉄塊アイアンメイスを振り上げる。一人を簡単に叩き潰す重量が、氷の大地を砕いた。―そして、巨大な鉄塊アイアンメイスが凍り付く。聞こえてきたのは少女の冷たい声だった。

「…だから言ったでしょう。彼女は問答無用で貴方を殺そうとする  
と、そういう目をしていきます」

「…ああ、わかっていたさ。だから、君にも来てもらったんじゃない  
か」

砕いた大地から舞う粉雪が晴れる。カドツクへのバベツジの攻撃を防いだアナスタシアはため息を吐いた後、凍るように冷たい視線で立香を見据えた。

クリプター―カドツクの前に立つ白い皇女―アナスタシア。

その二人の姿を見た立香は嗤った。

「あは、なんだ、凶星だったからお姫様は怒ってたんだね。お姫様のマ  
スターは、見ての通り根暗でジメジメしてるー」

「…私わたくしに同じ手が二度も通じると思わないで、不快だわ」

「あれ？根暗でジメジメは否定しなくていいの？お姫様はそういう人  
がタイプ？あは、趣味わるーい」

「…あなたは本当に不快な人ね」

アナスタシアの冷やかな視線に対して嗤う立香は、会話の中で二  
騎目のサーヴァントを召喚し不意を突こうと隙を探る。

バベツジの武器を凍らせて油断している今が好機チャンスだと嗤い顔の下  
でほくそ笑む立香の考えを読んだカドツクは、事態が動き出す前に声  
を上げる。

今回、カドツクは立香と戦いに来た訳ではない。偉大なる皇帝ツァーリ―イ

ヴアン雷帝を打倒する為に立香を利用しにやってきた。つまりは一時的な共闘の申し出。だから、カドツクは今は戦う気はないのだと立香に語る。

「待てよ。藤丸立香。僕らは首都から態々、お前と話をする為にここまで来たんだ。わかるか、今の僕たちが望むのは対決ではなく対話だ。：対決は、まだ早いんだよ」

カドツクから掛けられた声に対して立香はあからさまな舌打ちを鳴らした。普通にガラの悪い少女の態度でカドツクを見る。嫌悪感を隠さない。立香はカドツクを、クリプター達を嫌悪し憎悪し激怒しているのだから隠す理由もない。

無論、立香とてカドツクがこうして正面からやってきた時点でわかっている。対話を望むという言葉があれば確信もできる。十中八九、カドツクは立香にも利のある提案をしようとしている。だが、しかし——立香は目を見開きながら、カドツクを見下した。

「黙ってよ、人類の裏切り者。私にはお姫様と話す口はあってもお前と話す口はないんだから」

「：はは、アナスタシアの言う通り、これはとても会話できる目じやないな。だが、話さなくても聞いては貰う。これは僕にとってもお前にとっても重要な話だ。この異聞帯の『王』——イヴアン雷帝は普通に戦って勝てる相手じゃないんだよ。だから、ちつ、：お前、本気かよ」カドツクの言葉を妨げるように氷を削る音が鳴る。

アナスタシアにより凍らされていたバベツジの武器が轟音を上げて回転する。そして、氷の拘束から抜け出た武器を手にバベツジは再び戦闘態勢に移行する。その肩に乗る立香は腕を組みながら、動揺を隠せないカドツクに対して嘲笑を向ける。

敵意は示した。既に一撃を向けたことで立香の中では宣戦布告も済んでいる。なら、交渉なんてまどろっこしい真似をする気は立香にはなかった。それに、此処でもし立香がカドツクとの交渉に応じてしまえば、それこそ立香は彼らに皇帝側<sup>ツァーリ</sup>の人間だと勘違いされてしまう。

「あは、アハハ！カドツク君てば、うけるー。冗談で殺そうとするわけ

ないじゃん。本気だよ。本気で立香ちゃんはお前たちと話をする気なんてないんだよ。そもそも最初に対話を放棄したのはお前たちじゃん。なにが、「観戦の席もない」だ。観戦なんて頼まれたってしてやるもんか。全部、舞台ごと、ぶっ壊してあげるんだから。って、ことだよ。アタランテさん！」

立香はカドツクの交渉に一ミリも応じない。そもそも交渉の席に立たない。それは立香の抑えきれない激情故のことでもあったが、同時に冷静に過ぎる状況判断故の決断でもあった。

この場で皇帝ツァーリの魔術師であるカドツクとの敵対関係を明確に示せば、先ほどまで争っていた彼女と共闘することが出来ると踏んだ。

「ダ・ヴィンチちゃんと言うには、あなたは汎人類史側のサーヴァントなんだよね。なら、ごめんなさいしますから、一緒に戦いましょう」

ダ・ヴィンチはアタランテ・オルタが汎人類史側のサーヴァントだと言った。そして、それは正しく、立香との衝突からカドツクの登場まで二転三転する展開に若干の混乱をしながらも皇帝ツァーリの王妃と共にいる魔術師が叛逆軍の敵でない筈がない為、立香の声にこたえて矢を番えた。

ただアタランテ・オルタはカドツクが殺戮猟兵からヤガの親子を救うのを見ていた。だからこそ、立香と対話をしようとするカドツクにも何らかの事情があることが察せられる。さらにカドツクが立香へかけた言葉は皇帝ツァーリを敵に回そうとしているかのようだった。

故にアタランテ・オルタが番えた矢は二本。

一本はカドツクへ。もう一本は立香へ。それぞれ狙いを定めながら、自分に向けられた矢の意味が分からず首を傾げる立香に向けて調停を申し出た。

「ほえ？アタランテさん、なんで私に矢を向けるの？」

「そんな心底不思議そうな顔をするな。私が悪いことをしているみたいではないか。：私たちは先ほどまで戦っていたのだ。正体不明は、お前も同じだ。この魔術師は皇帝ツァーリを打倒する為に、お前に話があると聞いた。であるなら、私の矢はお前たち二人に向けられるべきものだ。話を聞かせろ、皇帝ツァーリの魔術師」

「はは、マスターよりもサーヴァントの方が聞き分けが良いってどう  
いうことだよ。：藤丸立香。どうする？アタランテは話し合いが終  
わるまで中立を保つそうだが、僕らもろとも敵に回すのか？」

皇帝<sup>ツァーリ</sup>打倒の為に動こうとするカドツクをアタランテが支持すること  
は意外ではない。むしろ、叛逆軍を率いるボスである彼女であれば目  
的の為に敵を利用することは真つ当なもので、敵の敵は味方だ。さら  
にカドツクを後押しするようにダ・ヴィンチからの通信がきた。

《藤丸ちゃん。ここはカドツク・ゼムルプスの話をとりあえず聞こう  
か、聞くだけなら私たちに不利益はないよ。むしろ、情報は私たちが  
一番望むものさ》

「みんな、ちよっと甘いんじゃないかなあ。こいつら、正真正銘の人類  
の敵だよ？」

そう言いつつも立香は姿勢を崩し、バベツジの頭に身を預けつつ肩  
の上で座り込む。考えたようなアタランテとの共闘が望めず、あまつ  
さえ場合によっては再び敵に回るといふのならダ・ヴィンチの言う通  
りに話位は聞くのが賢い判断と言うものだ。立香の頭脳<sup>ブレイン</sup>である童女  
もそこは違えない。

怒りは納めず治まらない。だが、ここまで言われたのなら話位は聞  
いてあげると立香はカドツクに視線を送る。ようやく話を聞く姿勢  
をとった立香に対して安堵の息を吐きながら、カドツクは口を開く。

カドツクから語られたのはロシア異聞帯の王。イヴァン雷帝の正  
体―約500年前から存命のこの世界に於ける最古最大の生物。偉  
大なる威光を以って世界を照らした皇帝は―既に生物の範疇を越え  
た怪物に成ってしまった。生きていくだけで国の害となるほどに強  
大に成長してしまった彼が生きている限り、この世界<sup>に</sup>これ以上の  
繁栄<sup>せいちよう</sup>はない。

だから、討たなければならぬと語るカドツクの話の聞き誰もが息  
をのむ。

自分たちが敵に回している者の巨大さに英雄であろうと身が震え  
る。

自分たちが争っている場合ではないというカドツクという言葉に嘘は

無かった。たとえその先での対決が決定的なモノであろうとも、偉大なる皇帝——イヴァン雷帝を討つまでの間は全員で共闘をしなければ勝ち目はない。

それを理解したアタランテ・オルタが息をのみ、通信の先で話を聞いていたダ・ヴィンチ達が沈黙をする他にない中で、立香は独り嗤っていた。腹を抱えて嗤っていた。

「あは、あはは、アハハ！山より大きな偉大なる皇帝！いいね、格好いいね。素敵。それで、皇帝さんを倒す為にみんなで仲良くピクニック？立香ちゃんてば、嗤い死んじゃうかも！」

「…お前は、やっぱりイカしてるのか。今の僕の話で状況の把握くらいは、できただろう。共闘か全滅か、僕らの道は二つに一つだ。それとも憎い僕と共闘しなきゃならない。そんな自分の弱さを嗤っているのか？」

「私はお前と違って現実を嗤い飛ばせるくらいには強いから、それはないよ。そして、今のは返事はオツケーって意味なんだよ。うん。ダ・ヴィンチもそれで良いって。じゃあ、カドツク君。私を皇帝さんの元に連れてってよ。こうしてノコノコと出てきたんだから、準備くらはいは終えているんでしよう」

カドツクにとつて意外だったのは、立香が意外にもあつさりと自分の提案に乗ってきたことだった。

「藤丸立香は自分達を憎んでいる」。

そんなことは誰に言われるまでもなく理解していた。自分たちは彼女の旅路を否定した。彼女の救った世界を滅ぼした。恨むなどいう方が無理があるとカドツクは思っている。クリプター達の中で一番立香に近い感性を持つとされた凡庸な魔術師と自認するカドツクはだからこそ、読み誤った。

人類焼却式。それを覆すためのグラウンド・オーダー。人理救済の旅路に於いて立香は幾度も一度は敵対した相手と共に敵と戦った。最終局面においては数多の敵が立香を助ける為に駆け付けてくれた。だから、今回の共闘もすんなりを受け入れた。——そんな筈がない。

そもそも以前の旅路と今回では状況が違い過ぎている。七つの特異点―そこで立香の敵として立ち上がった者たちはどうあれ人類史に刻まれた者として立香の前に立った。人類全てを憎んでいた者がいた。人類救済の為に大勢を犠牲にした者もいた。だがどうあれ、彼らが見ていたものは確かに人だった。今の人類に絶望し、新しく完璧な人類の創造を夢見た魔王―ゲーティアでさえ、最後に理解者としてマシユを求めるほどに正面から人類をみていた。

だが、世界の「漂白」―これはどうだ。対話はない。対決もない。「観戦の席もない」と揶揄された「漂白」のどこに正面から人を見ようという意思があるのか。彼も人、我も人、故に対等。それが基本である筈だ。その基本を蔑ろにする意図が、立香には理解らない。

わからないから、ブチ切れるのだ。  
それは子供の様だと非難されて然るべき態度。だが、しかし、説明なしに理解を許すほど世界が単純でないとするなら、やはりその感性もまた正しいものである筈だろう。少なくとも立香はその考えの元でクリプター達を同じ人間と思いつつながら、正面から殴る。罵倒する。絶対に許さない。

だから、結論から申し上げますとカドツク君は見誤ったのです。立香ちゃんは共闘する気など微塵もなく、ただ利用する為に噛うのです。アハハ！

## 立香ちゃんは拳を握る①

偉大なる皇帝ツァーリ―イヴァン雷帝の打倒。カルデアもクリプターも叛逆軍も関係なく協力しなければ倒すことなどできないと判断された強大な敵を前に彼らは手を取り合った。

後に対決をすることになるうとも今は共闘を―とある竜の魔女からすれば人間的であり、とても素晴らしいことねと皮肉交じりに揶揄されること請け合いな状況に立香は勿論、不満タラタラだった。

だが、しかし、それを隠しながら立香はニコニコと嗤う。この手の腹芸は人理修復の旅路に於いて様々な英霊たちから鍛え上げられている。

ただ立香自身は気が付いていないが、その態度が既に不審だった。激怒し激高し激情を良しとする。素直と言い換えてやつと美德と思えなくもない立香の基本姿勢からして、クリフター敵との共闘など腸が引つ繰り返つてようやく受け入れられるものであることは、それなりの付き合いしかないゴールドルフでさえ理解が出来ていた。ならば、更に近くで長く立香を見てきたダ・ヴィンチ、ホームズ、そしてマシユからすれば、カドックに案内されロシア異聞帯の首都―ヤガ・モスクワを進むニコニコ笑顔の今の立香は余りに歪で、危険に思えた。

だから、彼らは立香に対して通信機越しの指示しか出せない現状を良しとはしなかった。そもそもその指示自体が入るか怪しいことはアタランテ・オルタとの戦闘の時に既に露見している。立香を支援するにしろ静止するにしろ、その場にはいなければ話にならない。

故にカドックに案内され立香がヤガ・モスクワに向かった時点でシャドウ・ボーダーもまたその後を追う形で移動を開始した。敵の本拠地に近づくとという危険行為にゴールドルフは異を唱えようとしたが、立香の暴走はゴールドルフとしても見逃せるものではないのでシャドウ・ボーダーの防衛の為にホームズとダ・ヴィンチがシャドウ・ボーダーから動かないことを条件にその要請を受理。

この異聞帯に於けるほぼ全ての主要人物が首都―ヤガ・モスクワに集結する。出だして遅れた美少女☆マスター・立香ちゃんの漂白世界

での初めての旅路は一気呵成に動き出す。

これはカドックが立香たちがこの異聞帯にやってくる前に行っていた事前準備の賜物であり、立香はその点はカドックに感謝をしても良かった。まあ、そんなことを立香の前で言えば普通にグーパンチが飛んでくるのだが、ともかくとしてロシア異聞帯―物語は最終局面。場所はロシア異聞帯において比較的、安定した気候が約束されているヤガ・モスクワ。偉大なる皇帝ツァーリ―イヴァン雷帝のお膝元。

そこで炸裂するのはカドックが寝る間も惜しんで作り上げたイヴァン雷帝を打倒する作戦。

アナスタシア。立香のサーヴァント。アタランテ・オルタ。全サーヴァントの総力を集結して、眠りにつく皇帝ツァーリの寝首を搔く―筈だった。

ヤガ・モスクワに聳える城―イヴァン雷帝の眠るその城に自分達の友人として立香たちを招待し、警備の殺戮猟兵オブリチキニたちの目を掻い潜る。そんな作戦の第一段階が終了した瞬間、入城を果たしたその時に立香の頼れる頭脳ブレイン（美少女ではなく美童女のほう）は早速その悪辣さを遺憾なく発揮した。

清濁併せ？み、皇帝の座にまでたどり着いた究極の努力の人と呼ぶべき彼女の策謀はカドックの予想の範疇に収まることを許さない。自分のマスターが敵の傀儡になることなど彼女のプライドが許さない。故に彼女は霊体のまま立香に指示を出した。

『無事に入城したのじゃな。なら、もう我慢は毒じやぞ？』

立香はその甘い囁きに喜んで飛びついた。わーい！とはしやぎながら城の中を走り出す。次いでとばかりに―

「カドック君とお姫さまはデキてて野外で※※したり※※※※してるのを私、見ちゃいました！―」

―と殺戮猟兵オブリチキニに無いこと無いこと密告することも忘れない。

警備の為に場内にいた殺戮猟兵オブリチキニの視線がカドックとアナスタシアに集まる。ここでアナスタシアがカドックとの※※※※を想像して顔を若干赤くしたのがまずかった。殺戮猟兵オブリチキニは皇帝ツァーリの威光を示す為のみ存在している。それを陰らせるものはたとえ皇女であろうと許



されない。

殺戮<sup>オブリチキニ</sup>猟兵がどういふことかとカドツクとアナスタシアに殺到する。アタランテ・オルタもそれに巻き込まれた。

「お前っ、ふざけるな！」

カドツクの叫びはもう遅い。走り出した立香は聞いちやいない。此処にカドツクの積み上げた努力は虚しく崩れ去り、常識は破棄され、道のりはより混沌としたものに定められた。

「あは、さあ、みんな大好き立香ちゃんのターンだよ!!」

カドツク達を置き去りにして城内を走り出した立香の足取りは意外にもしつかりとしていた。考えなしと思われる立香の行動には当然の様に理由はある。確かに敵との共闘という状況に笑顔を保っていた立香の表情筋が限界だったことは認めよう。けれど、立香は度し難い阿呆ではあるが考えなしの馬鹿ではない。立香が走り出したのは頭脳<sup>ブレイン</sup>であるサーヴァントからゴーサインが出たからの行動だが、切っ掛けは実は入城の時点で存在していた。

城の中で音楽<sup>ピアノ</sup>が聞こえた。

聞いたことがあるような無いような音楽だった。そして、首を傾げていた立香の脳裏はようやくそのピアノの音を思い出した。懐かしきはオルレアン―神の子と呼ばれた人でなし―現代に於いて知らぬものがいないその音楽家の名はヴォルフガング・アマデウス・モーツアルト。

城の中で微かに聞こえる音は彼が奏でる音に少しだけ似ていた。

その音を辿り立香は城内を走る。そして、辿り着いた部屋のドアを蹴り開けた。

「呼ばれなくてもじやんと登場!…て、あれ、アマデウスさんかと思っただけど違った。でも、とても素敵な音を奏でる貴方は誰?」

辿り着いた部屋。円形の部屋の中心にはピアノが置かれていて、それを弾いていた者は立香の突然の登場に動揺をしながらもそれは仮面の下の事で、それを悟らせずに静かな声で答えた。

「お前こそ誰だ。いや、そんなことはどうでもいい。私はアマデウスだ」

自分はアマデウスだと語る彼を前にして立香は眉を潜める。立香はピアノから立ち上がった彼の姿をまじまじと見る。その姿は立香の知るアマデウスとはまるで違っていた。

漆黒深紅の外装を身に纏う異形の姿―彷彿とさせる感情は「怒りだろうか。それは立香の知るアマデウスが終ぞ“この立香”の前では見せなかった感情。ならば、此処までその感情を露わにする彼がアマデウスである筈がない。

「えー、違うよー。アマデウスさんはそんな格好いい鎧は着てなかったもん」

「ふむ、そうだ、これは格好いいだろう。いや、そうではない。私はアマデウスだ」

「違うよー」

「私はアマデウスだ」

「違うよー」

「私はアマデウスだ」

「違うよー」

「私はアマデウスだ！私は、アマデウスなんだ!!」

アマデウスと偽る者の拳が立香に向けて振るわれる。

それを現界したバベツジが受け止める。

異形の鎧を纏う者同士が対峙するの中で立香は心底残念そうな声を出す。

「言葉が通じないのは哀しいね。きっと私は貴方を大好きになれるのに、それは今じゃないのかな。うん。なら、いいよ。おいで、天才と偽る人。それはとっても悲しいことなんだって、教えてあげるんだから」

「偽りではないっ、私はアマデウス！私が、アマデウスでなければなら

ないんだ!!」

本来、共に戦うことが出来たサーヴァント—アマデウスと偽る彼と立香はそうして出会い、戦うこととなり、そして、アマデウスを騙る彼は立香たちに敗れた。

床に仰向けで倒れ、砕けた仮面の下を立香に晒した彼は洗脳から解かれた意識が消失していくのを感じながら自分を見下ろす少女の顔を見た。その顔は先ほど戦っていた時の狂気の滲む笑顔とは打って変わって、今にも泣き出しそうな子供の様な顔をしていた。

「…少女よ。『きらきら星』は、好きか?」

「うん、大好き。星の歌だもん。天文台の私が、カルデア嫌いなわけないよ」

「そうだな、私たちの時代とは違い、現代におけるあの曲は愛ではなく星の曲であったな。私が本来、アマデウスより託されたのは、お前のような子供に『きらきら星』を、聞かせてやることだったのに…すまなかった」

「いいんだよ。けど、もし次があるなら、その時は『きらきら星』も、あなた自身の曲も聞かせて欲しいな」

「ああ、約束しよう」

そうしてアマデウスと偽る彼は真名も明かさないうまに消滅した。

パチパチと演奏を終えた奏者に送るには乾きすぎている拍手が部屋に響いた。アマデウスと偽る彼が消えた場で響く拍手に目を向けると、そこには一人の神父が立っていた。

「…ああ、アハハ！なんだ、一点かと思ったら一万点が出てきたよ」

「女性が犬歯を剥き出しにして嗤うものではない」

拍手を終えた神父—言峰神父は立香を見据えながら薄く笑みを作る。此処での彼の登場に意外性はない。彼は異星の神の使者—クリプター達の戦いを監視する立場にあり、そしてサーヴァントとしての彼がアナスタシアと浅からぬ縁がある以上、此処にいることに不思議

はない。

不可解なのは彼が全てを見ていながら立香の暴挙を止めなかったこと―彼、言峰綺礼の遺骸を器にして現界した英霊―ラスプーチンは立香を止めることができた。けれど、それをせずにカドツクがイヴァン雷帝に打ち込んだ楔であるサーヴァントの消滅を見届けた。

それに不信感を抱く立香に対してラスプーチンは聞かれてもいない答えを返す。

「なに、そう不審がることではない。私の中身はアナスタシア皇女に手を貸したいと思っっているが、私の外側は君にこそ興味がある。人類最悪、奇しくもアレと同じ名で語られるマスターよ」

「わーい。立香ちゃんてばモテモテだ。でも、駄目。貴方の外見は素敵だけど、臭いもん。外も中も臭うもん。その匂いフェチになるには、まだ早いのだ」

「そうか。残念だ。だが、正直に言えば君がどう思うかは問題ではない。全ては私の中で完結している。中身がアナスタシア皇女に手を貸したいと思い、外側が君に興味を持つのなら私の取るべき行動は静観しかあるまい」

だから、見ていた。カドツクがイヴァン雷帝を眠らせ続ける為に用意したサーヴァント―アマデウス。その後継として自分は、アマデウスである”と洗脳されたサーヴァントが消滅するのをただ見ている。そして、それはこの先の展開においても変わらない。

グレゴリー・ラスプーチンと言峰綺礼が交じり合う疑似サーヴァントである彼はこの異聞帯での全てを見届ける為に此処に立つ。その在り方は揺るがない。強固なまでのエゴの塊。

それを前にして立香が目細めると同時に、床が揺れた。いや、床だけではない。城全体が揺れている。その突然の地震に驚く立香を嗤いながら、誰か分からない彼は言う。

「もはや私に構っている暇はない。清算の時だ。君は仕出かした不始末の責任を負わねばなるまい。カドツク・ゼムルプスが時間を掛け打ち込んだ楔はその手によって砕かれた。偉大なる皇帝、イヴァン雷帝。目覚めの時だ」

城が崩れる。瓦礫が降ってくる状況の中で、立香の視線は崩壊する城壁の先を見ていた。城の外に聳えていた山が胎動している。

「世界最古最大のヤガ」。山より大きい怪物。カドツクが語った全てに嘘は無かった。生きているだけで世界を壊しかねない偉大なる皇帝ツァーリが夢から覚める。

それは同時に殺戮獵兵達オブリチキニの消滅を意味する。

《夢から醒める。夢から醒める。あの御方が、夢から醒める。——故に。我らも旅立とう。偉大なる皇帝ツァーリに栄光あれ！偉大なる皇帝ツァーリに栄冠たれ！》

彼らはイヴァン雷帝の宝具。イヴァン雷帝が眠り続ける限り滅びることのない悪夢へいおん。故に——彼らの消滅は立香がやらかしたことを全ての者たちに伝えた。

山が動き出す。それこそは国を守る為に進化と増大を繰り返し、新しく築き上げた筈の王都すらも滅ぼした後に此処に戻り眠りについた男の残骸なれのはて。イヴァン雷帝はもはや人でない。そして、ヤガですらない。その肥大化した夢路の果てに——神の獣になった。

「おお。おおお、おおおおおお!! 殺戮獵兵オブリチキニより報告が入った！平和は、幸福は、何もかも嘘だったのか！夢幻だったのかああアアアアアアアア!!」

イヴァン雷帝は眠っていた。幸福な夢の中にいた。至高の音楽家の奏おとで曲は彼に安らかな眠りを与えた。時折、薄目を開けようとも

其処には国の平和と繁栄のみを伝えてくれる王妃―アナスタシアがいた。故に眠る。眠り続ける。治世に乱はなく、皇帝の威光は遍く全てを照らしていると信じて眠り続ける。

「――だが、永い夢から醒めて、気が付けば周囲には何も無い。マカリー神父を騙った私との語らいも、王妃を騙ったアナスタシア皇女とのささやかなやりとりも。全ては、私たちの嘘と誤魔化しだった。今、内に戻した殺戮<sup>オブリチキニ</sup>猟兵がイヴァン雷帝に真実を伝えている」

怒りを見た。激情を見た。世界を壊しかねない感情の発露を立香はラスプーチンと共に見た。天に向けて吼えるその姿はまるで鏡<sup>じぶん</sup>を見ているようで、だから、きつと涙だつて零していた。

「イヴァン雷帝はヤガとなりロシアを統一した。大寒波に伴う飢餓から民を守る為、西進を繰り返した。民の為に。皇帝<sup>ツァーリ</sup>の威光を守る為に。だが、この異聞<sup>せかい</sup>は唐突に断絶した。彼らの意思も、彼らの努力も、彼らの願いなど関係なく、この異聞は汎人類史に敗北したと決定された」

そして、消滅した。そこに対話は無かつたのだろう。対決の場も観戦の席さえも与えられなかつたに違いない。そう気が付いて、立香は嗚咽を漏らした。ボロボロと流れてくる涙も拭わずにイヴァン雷帝。偉大なる英雄の姿を見上げた。

此処でようやく、立香は異聞帯がどういうものであるかを理解した。此処は特異点とは違う。特異点の修正が間違えた歴史の修正ならば、異聞帯は何も間違えてなどいない。ただ過酷な運命に抗っただけ。全地上を凍土と化した大寒波。汎人類史では訪れなかつた災厄に、地獄に耐えてきたただけだ。その結果、行き着く先はヤガの他になく、その選択は断じて間違いなどでは無かつた。

「カルデア！カルデアアの残党！余は、ロシアは、断じて滅びぬ！断じてだ！この地獄<sup>せかい</sup>を耐えてきたのは、諦める為ではない！許容する為ではない！そんな結末を迎える為では断じてない！故、認めぬ！お前たちがこの世界を壊すのを認めはしない！！」

「——イヴァン雷帝の言葉に嘘偽りはない。異聞帯の切除とは、すなわちこの世界を滅ぼすことに他ならない。一度は汎人類史に敗北し消滅した世界は異星の神の手により甦った。…よろこべ、世界を救ったマスター。神は再びお前に試練を与えた。世界を救う為に世界を滅ぼす、その試練を前にお前はどんな選択をする」

「…決まってるじゃん。呼んでる。彼は、私を呼んでいるんだよ。彼の怒りは正しいの。彼の無念は正しいの。だから、私が行かなきゃならないの！」

「世界を守らんとする異聞の王の前に世界を滅ぼす者として立つのか？」

「そうだよ…そうじゃなきゃ、誰も救われないじゃない。…振り上げた拳の先が無いなんてことは、あつちやいけないんだよ。怒るってことは、一人じゃできないの。誰か、前にいてあげなきゃいけないんだから！」

そう言っ立香は飛び出した。瓦礫を踏み越え、歯を食いしばり、拳を握り、零れる涙を拭うことも忘れてイヴァン雷帝の元へと駆けていく。巨象に立ち向かう蟻の如き光景を前に言峰綺礼は、ほくそ笑む。

その姿、その在り方は歪だが、酷く正しく人であると。

自分達を取り囲んでいた殺戮<sup>オブリチキニ</sup>兵達の消滅。そして、崩れていく城を見てイヴァン雷帝の目覚めを知ったカドツクは立香の行動を考えなしと吐き捨てる。

カドツクの行った準備は全て無駄に終わった。敵も味方も死者に至るまで組み込んだ作戦は行う前から少女の手によって台無しにされた。

「くそ、最初から全部やり直しだ。…幸い、まだイヴァン雷帝には僕らの裏切りが完全に露見した訳じゃない。嘘を吐いていたのはバレたが、誤魔化しは利く筈だ。あの馬鹿はイヴァン雷帝が潰す。呆気ない幕引きだけど、仕方がない」

イヴァン雷帝は正面から戦って勝てる相手ではない。そんなことは馬鹿でもわかるとカドツクはアナスタシアの手を引くが、アナスタシアは動かなかった。どうしたとアナスタシアの顔色を伺うカドツクは、その視線の先を追って信じられないものを見た。

動き出したイヴァン雷帝。この世界最強最大の生物に向かっていく6騎のサーヴァントがいた。そして、その内の一騎の肩の上には橙色の髪を揺らす少女の姿があった。

アナスタシアが動けないのも無理はない。カドツクの思考もまたその光景を前に停止する。

巨像に立ち向かう蟻どころの話ではない。イヴァン雷帝がたった6騎のサーヴァント。たった一人のマスターでは敵う相手ではないことは見ればわかる。だというのに立ち向かおうとするのは蛮勇だろう。すぐに蹴散らされるに違いない。だが、しかし、此処でようやくカドツクは立香と自分の違いに気が付いた。気が付いてしまった。『才能があれば成し遂げられるなど、勘違いも甚だしい』

どこかで胸を抉る声を聞いた気がした。思わず心臓に手を当てる。「裏切りが完全に露見した訳じゃない。誤魔化しは利く筈だだと？なんだよ、それ、ただの希望的観測じゃないか」

そんな筈がない。国中にいた殺戮<sup>オブリチキニ</sup>猟兵は真実の全てをイヴァン雷帝に伝えている。カドツク達がイヴァン雷帝を騙していたことは既に知られている。それでも今のイヴァン雷帝がカドツク達に敵意を向けていないのは、カドツク達よりも優先すべき敵が目の前にいるからだ。

立香は人理修復というカドツクが歩む筈だった旅路を奪い。また今、カドツクが立ち向かわなければならぬ相手の前に立っていた。その現実にはカドツクの心を容易に抉る。立香の背は余りにもあつさりとかドツクから離れていく。



その最中で立香がカドツクの方へ振り向いたのは、ただの偶然だった。それでも立香はカドツクを見つけてしまったから、何か言おうとして、止めた。

立香はもうカドツクが眼中になかった。カドツクなんかより、優先すべきものがあつた。だから、本当にカドツクから視線を切る立香の口から零れた言葉は誰に向けたものでもない。

「案山子」

カドツクを見て感想を言っただけの文章ですらない単語。

それに続く言葉があつたとすれば、それは容易くカドツクの心をえぐる。

「誰でもいい」。

「お前じゃなくていい」。

そんないつか何処かでカドツクが誰かにかけてた言葉だった。

## 立香ちゃんは、拳を、握る②

人類最悪のマスター——立香は偉大なる皇帝——イヴァン雷帝に立ち向かわなければならぬ。これは立香の意地の問題だ。信念の為の行動だ。敵は強大——されど、背を向けることは許されない。怒りを露わにするイヴァン雷帝との対決を避けるようなことをすれば、自分はクリプター達と同じところまで墮ちる。——少なくとも立香はそう思っている。

信念を語った。意地の張り処を無粋にもつまびらかにした。

では、次に夢も希望もない現実の話しよう。

——そも、6騎のサーヴァントと1人のマスターだけでイヴァン雷帝が倒せるか否か。

答えは無理だ。

偉大なる皇帝——イヴァン雷帝。その巨軀は山の如し。いくら英霊が強力な存在であるとしてもサイズの違いは如何ともし難い。蟻の一噛みでは巨象は殺せない。蟻が犬猫になったとしてもそれは変わらない。これはそういう単純な問題だった。

「はッはッはッはッはッ！面白くなつてきやがったぜえ!!」

猛き武将——森長可がイヴァン雷帝に向かい槍を振るう。彼にイヴァン雷帝を恐れる心はない。万人が恐れ戦いすら放棄する巨軀の前に笑っている。大地を砕き抜く左前脚を避け、振り下ろされる重鼻を受け流し、無防備な脇腹に迫る。イヴァン雷帝は巨軀故に重鈍だ。近づくだけなら難しくもない。故に森長可は確実な距離で手加減などない全力で宝具を開帳する。

「膾切りにしてやるぜ！喰らえやデカ物ウウ!! 『人間無骨』!!」

森長可の宝具——『人間無骨』。その槍の前では人間も骨が無いように容易く両断されてしまうという逸話からその名が付いた宝具は、逸話通り対象の防御力を無効化する極めて強力な宝具ではあるが、しかし、人ならざる神獣と化したイヴァン雷帝を相手どるには少しだけ破壊の規模が足りていなかった。

切り裂かれた脇腹から噴き出す血を浴びながら、森長可は自分の攻撃がイヴァン雷帝への決定打に成りえないことを悟り悔し気に息を吐く。犬猫の一掻きで巨象は死なない。

「くそが…百段ひゃくだんさえいれば、やりようがあるのによ」

イヴァン雷帝の巨軀が揺れる。それは勿論、森長可の宝具のダメージにより体勢を崩したからではない。自分の身体の下に潜りこんでいた森長可を押し潰す為に態と身体を地に伏すのだ。避けようもない巨大な壁が森長可の視界を覆った。そうして、森長可は霊基が完全に碎かれる前に霊体に戻り立香の元へと帰っていく。

この戦闘において森長可は此処でリタイアした。

これで既に2騎が墜ちた。

既に6騎いた立香のサーヴァントの内の三分の一が消滅している。それが半分になるのも時間の問題だと―森長可の最後を腕を組み見届けていた彼岸に燃える炎―魔王信長は状況を正しく判断する。

立香の6騎のサーヴァントの内、最大戦力の一人である魔王信長は必然的にサーヴァント達の中でリーダー的役割を担っている。元・戦国大名。現・第六天魔王。その立ち位置は必定であると高らかに嗤う彼女には、だからこそ、この合戦たたかいに対する責任が立香と同等に存在する。

戦力差。地理的優位。状況判断。E t c. ―全てを統括して勝利に導かなければならない。

だが、しかし、どう考えても分が悪すぎた。あの巨軀ではダメージを与えること自体が困難。更にあの神獣は血潮を滾らせ雷雲を呼ぶ。森長可に一撃を喰らって以降、落ちてくる雷を身体に纏わせて暴れている。

近づくことさえ容易ではなくなった状況でそれでも魔王信長は嗤っていた。

「くは、クハハ！やはりマスターの傍にいれば退屈せんものう！良いぞ良いぞ！これこそ魔王たる我が出陣でるべき戦場いくさばというものよー」

イヴァン雷帝と正面から正々堂々と戦う。策もない。弱体化も。援軍もない。おそらく多くのものは立香を愚かだと嗤うだろう。考

えなしの馬鹿此処に有り指を指すに違いない。

だが、しかし、魔王信長は違う。それでこそ我がマスターと手を叩く。

「稀代の大家つけ。良いではないか。ああ、そうであろう。張れぬ意地に意味など無い!! 正面から堂々とその怒りを受けて殴ると決めた! で、あればこそ! 我らが力を貸す価値があるというものよ!! のう、我が同胞たちよ!!」

魔王信長の大声に前線でイヴァン雷帝と戦っている2騎のサーヴァント。ライダーとセイバーから同意と共に、高笑いをしていないでお前も戦え」と罵倒が飛んでくる。

「で、あるか!!」

罵倒を気にせずカラカラと嗤う魔王信長の魔王ムーブを前にしてセイバーは思わず斬りたくなったがどうか我慢してイヴァン雷帝の相手をする。落ちてくる雷すら斬る太刀筋でイヴァン雷帝の巨軀を少しずつ削り取っていく。

対しライダーは一杯一杯だった。攪乱に専念しているが、いつ墜ちてもおかしくない状況で笑えない。

時間はもうあまり残されてはいない。狂戦士——森長可は墜ち。暗殺者——もう真名バレをしているだろうし隠すのも面倒なので記すが、暗殺者——武則天も帰った。

「まあ、あの子供皇帝に関しては『妾の前で皇帝を名乗るとはおつろかもの』と勇んで出てきておきながら、この寒さに驚き、くしやみをして引っ込んでいただけだから実質リタイアではないのだがな!! まったくマスターに要らぬ知恵を与え場をかき乱しながらの、その所業、是非もなし!! それを許すマスターもどうかと思うが、それがカルデア。愛すべき我がマスターである!」

嗤う。笑う。晒う。天を見上げて大笑する。その上で魔王信長は言い切ろう。

「どうだ、理解したか。異界の皇帝よ。我らは強いぞ」

既に2騎を潰され何を偉そうに言っているのだとイヴァン雷帝は唸りを上げて重鼻を持ち上げ、魔王信長に向けて振り下ろす。魔王信

長はそれを殴り止めた。

イヴァン雷帝は初めて動揺した声を出す。

「貴様、余の圧政を受け止めるとは何者か！」

「我こそは第六天魔王。神仏衆生の敵。つまりは“神”の天敵よ!!」

魔王信長は不敵な笑みを絶やさない。たとえ重鼻を殴り返した右腕の骨が砕けていようともそれを一切態度に出すことなく嗤ってみせる。

魔王信長には逸話通りの神性特攻が存在する。並みの神格であるならば彼女は殴り飛ばせる。しかし、イヴァン雷帝。偉大なる皇帝は規格外に過ぎていた。そもそも彼は厳密に言えば神ではない。神の如き獣である。故に魔王信長の神性特攻は十全に発揮されていない。しかし、それでも魔王信長は退かない。立香が正面からイヴァン雷帝と対峙すると決めたのなら、そこから一步も引く気はない。

それに奥の手が無いわけではない。

偉大なる皇帝——異聞最強の生物を立香たちだけで打倒する術がないわけではないと魔王信長は、バベツジの肩に乗っている立香に視線を向ける。

視線の先の立香は戦っていた。魔術の素人である立香にはサーヴァントを支援する術が乏しい。——否であると魔王信長は考える。それは戦の素人の考え。大将が前線にいるだけで兵の士気は上がるものよと嗤う。

そして、そんな立香にだからこそ自分たちは力を貸したいと願い、魔神王と呼ばれた彼はそんな者達だからこそ力を託した。

立香には6騎のサーヴァントを世界に留める力を与えた。そして、サーヴァント達には立香を守る為の力を託した。

余談だが、クリプター達には“大令呪”と呼ばれる奥の手が存在する。

その存在を彼は「視た」。詳細こそ分らないが絶大な力であることは理解した。彼の身体は伊達に魔術王と呼ばれていた訳ではない。彼の中身は酔狂で魔神王を自称した訳ではない。

目に見える脅威がある。敵には奥の手が存在する。

— よろしい、ならばこちらにも秘密兵器だ。

エネルギーの収集は彼が三千年をかけてやってきたこと。そのエネルギーの譲渡は彼が魔神柱たちに散々行ってきたこと。故に奥の手は当然の如くに存在する。前作だからといってラスボスを舐めるな。

クリプター達の「大令呪」に対抗する立香のサーヴァント達の奥の手に名を付けるなら「大宝具」。何の捻りもない名の意味することは靈基の器を越えた宝具の強制解放。一度きりの奇跡の具現。

魔王信長の大宝具。それは文字通り三千世界を滅するだろう。偉大なる皇帝ツァーリ—イヴァン雷帝とはいえ受ければ只では済まない。魔王信長の大宝具は解放まで時間が掛かるが、だからこそ前線でセイバーとライダーが戦って時間を稼いでいる。勝ち目は最初から存在していたのだと立香から視線を切り、右手を天へと掲げ覚悟を決めた魔王信長を止めたのは、武骨で大きな機械の腕だった。

「…何をしておる。蒸気王。私の超カッコいいシーンをじゃまするでないわ」

立香を肩に乗せ守っていたバベツジが何時の間にか自分の傍まできて、その手で天へと掲げようとした自分の腕を抑えている状況に流石の魔王信長も意味が不明だと眉を潜める。

バベツジはそんな魔王信長に首を振る。

「可能性の終着点—魔王たるものよ。今はまだ貴様の大宝具を切る場ではない。大宝具を使用すれば確実に靈基が砕ける。戦闘不能ではない、完全消滅である」

バベツジの言葉に魔王信長はため息を吐く。その言葉はこの場では、立香のいる前では言ってはならないことだった。

“大宝具”という聞いたことのない言葉。それに連なる消滅の単語を聞けば、魔術師としては三流以下だが、マスターとしては一流である。敵にすら太鼓判を押された立香が状況を飲みこめない筈がない。立香は変なところで勘が良いのだから、6騎のサーヴァントたちの間でも魔神王から無理やり持たされた“大宝具”という余分について立香に伝えるかどうかは意見が割れていた。

票の割れ方は5対1。“伝えてよし”が5票で、“止めておけ”が1票だった。その対立は6騎のサーヴァントたちがそれぞれに立香の事を深く理解していたからに他ならない。

“大宝具”の存在を知った立香がどういう反応をするのか。自分を犠牲にする力なんて使わなくていいと泣くだろうか。―否、それはない。立香は使う。ことが終局に至り、他に打つ手なしと判断したなら、たとえサーヴァントを失うことになろうとも立香は“大宝具”を使用する。

表で啜い裏で泣きながら、“私の為に消滅”と、令呪を用いて命じるだろう。

―それが覚悟と言うものだ。戦う以上、味方に損害が無いなど有り得ない。仮にも神を語る者との戦いだいうなら、なおさらに犠牲はでるだろう。―その犠牲の全てを背負う覚悟の無いものが何故、英雄たちの主人などと名乗れよう。

“全ては自分がやったこと”。

“殺した敵も、失った仲間も、全部、自分が戦った結果に生まれた犠牲”。

全ての責任は藤丸立香にあるのだと、啜う彼女がそこに居る。

5騎のサーヴァントはそんな少女がマスターであることを誇らしく思っている。神の敵として、武士として、夢想家として、為政者として、裁判官として、それを強さと認めて傷つく少女を痛ましく思いながらも信じて愛している。

対して1騎のサーヴァントはもうこれ以上、少女に傷ついて欲しくないと思っている。少女の傍に誰よりも長くいたその英雄は知っている。――本来の彼女が、英雄たちに憧れた只の子供であると。

だから、「大宝具」の存在は1人の英霊の意思の下に秘匿された。魔王信長がまとめ役を買って出ているが、立香のサーヴァント6騎の立場は平等だ。会議は全会一致が絶対条件。

無論、隠し続けることはできない。異星の神。クリプター。世界の「漂白」を成し遂げた者たちとの戦いに於いて全力を出さなければならぬ戦場が無いわけがないのだ。

「……大宝具」。そっか、あの人は意外とお節介だね。誰かさんとそっくり」

それでもと願った英霊の祈りは否定された。此処に「大宝具」の存在が立香に知らされた。

ならば、立香は思考し決断しなければならぬ。使えば霊基が砕け消失する一度限りの奇跡の具現。

使用回数は6回のみ――立香の中で臓腑が腐る。適切に運用し勝利しなければならぬ――腐り堕ちたソレを吐き出すのを必死で抑えて、痛々しく嗤う。

犠牲の選択は、選定の剣を引き抜いた理想の王であつても感情を殺さなければならなかった。それが味方であるのならどれ程の負担になるのかを知らないものはいない。

それでも立香は冒瀆的取捨選択をしなければならない。そして、少し考えればわかることだがバベツジの言う通り「魔王信長の切り時は今ではない」。――立香は胃液を少量吐いた。

酸っぱいものが口の中に広がる不快感に耐えながら思考する。クリプター達の後ろにいる首魁が「異星の神」だとするなら魔王信長の神性特攻は勝利に於いて一番重要となるもの。

最後の最後まで魔王信長を失う訳にはいかない。

なれば、どうする？――誰を犠牲にする？――立香の視線は、神の如き獣――イヴァン雷帝に向けられる。今この時も時間を稼ぐ為に山の如し巨軀に追いつがる2騎のサーヴァント。二人ならばイヴァン雷帝



に勝てるだろうか？―いや、違う。想定すべきは人との戦いではない。神との戦いでもない。雷を纏い、歩みは大地を砕き、そこに在るだけで世界を壊す。そんな災害との戦いである。

ならば、答えは既にでていた。立香は目を逸らすことを止めて、蒸気王―バベツジを見た。

「バベツジさん。…お願いしても、いいかな」  
「承った」

バベツジもまたその言葉を待っていた。イヴァン雷帝の巨大さに対抗できる宝具を持つのが魔王信長の他に自分であることを理解していた。だから、魔王信長の「大宝具」の使用を止めた。そして、肩に乗る立香を彼女の傍に下ろす。

鋼鉄の巨人と橙色の髪の少女が極寒の世界で向き合う。雷鳴と神の如き獣の咆哮が世界を揺らす中で二人の視線は揺らぐことが無く、少女はあまりに悲しい命令を嗤いながら言おうとして、嗤えず、笑えずに、泣いた。それでも絞り出した声はマスターとして彼に最後に掛ける言葉が消えることのないように、聞き返されることのないように、はつきりと。

「令呪を持って、命じます。勝って、キャスター」  
「武骨で大きな機械の手が少女の頭に置かれる。」

「貴様は、我を、信じるのだな」

「はい」  
「では、貴様に見せてやろう。我が夢見る空想世界。笑ってみていろいろがいい」

蒸気が噴き出す。異音が鳴る。鋼鉄の巨人が空を飛び、神の如き獣に向かつていく。

その最後を立香は目を逸らすことなく見届ける。

## 遙かなる旅路の果てを

偉大なる皇帝<sup>ツァーリ</sup>―神の如き獣となったイヴァン雷帝の前に、蒸気王―バベツジは飛んだ。蒸気を噴き出し異音を鳴らす力強い飛行を見て、丁度、その時にライダーは墜ちた。

イヴァン雷帝を攪乱し続けたライダーの脱落は、この戦いに於ける立香<sup>じぶん</sup>たちの不利を明確に示すものであるとバベツジは判断する。

「怒り」。 「嘆き」。 「暴れる」。 そもそもが、そんな神の如き獣を相手に策も弄さず正面からぶつかるといふ選択自体が間違っていたことを碩学たるバベツジは認めている。

ロシア異聞帯に於ける立香の行動は余りに幼稚なものであったと言わざるを得ない。持てる力の全てを使い、全力で事に挑むと言えども聞こえはいいが、策があるなら弄すべきであるし、犠牲を少なくしたいなら搦め手も用いるべきである。

それを許容するのなら、別の結末があったのだろう。 「大宝具」の使用という勝敗に関わらず1騎のサーヴァントを失う選択をしなくても済む結末もあった筈だ。

たとえば、そう。村でのカドックの共闘の申し出。神の如き獣を討つ作戦があると語る敵<sup>クリプター</sup>の手を立香が取れていたのなら、きっとこの場には6騎のサーヴァント以外にも力を貸してくれるサーヴァント達がいたことをバベツジは見誤らない。

「――だが、しかし、やはり否である。それでは道理が通らず、貴様の怒りは価値の無きモノに堕ちるのだろう」

たしかに、いくらでも別の結末は存在していた。イヴァン雷帝を倒す為にカドックと一度は手を取り合う戦いもあったのだろう。あるいはカドックと和解することもできたのだろう。どちらにせよ今よりも、もつと賢い戦い方は確実に存在していた。―だが、しかし、それはできない。そんなことはこの立香のサーヴァントであるなら、誰であれ知っている。

世界は「漂白」された。救った筈の世界は唐突に断絶した。その

上で最後まで泣いていた彼女の死も、誰でもなくなってしまうた彼の努力も、誰かになれた彼の誕生も、全てが失敗だったのだと吐き捨てられた。

「そうである。許してはならぬ。断じて、認めてはならぬ。世界は貴様の理想を叶えなかった。：嗚呼、貴様の怒りが聞こえる。嗚呼、貴様の嘆きが聞こえる。許せぬだろう。認められぬだろう。全て、我らと同じである。神の如き獣よ」

厄介な小蠅は叩き落とした。けれど、次に飛んできた者は意味の分からない言葉を並べている。―同じである筈がない。皇帝として彼が願うのは国の繁栄。世界の平和。皇帝の威光を以って遍くものを照らす事。

「余は守護る。この国を、世界を、そのどこが、貴様たちと同じだという！世界を壊さんとする貴様たちと！この世界で生きる者全てを虐殺せんとする貴様たちと余は違う！」

「否。同じである。我らもまた己が世界を守護らんとするものである。我らは人々と文明の為にこそ在る。故にこそ、私は求めた。空想世界を。夢の新時代を。故にこそ……我らの世界には貴様の世界を砕く価値がある」

「おお。おお。おおおおお!! 不敬なり、許さぬ。余の国を壊させてなるものか!!」

「その怒りを理解しよう。正しきものと認めよう。その思いあればこそ、私のマスターは貴様と正面から殴り合うと覚悟した。そして、我は命じられた。その勤めを此処に、果たそう！蒸気圧最大!! デイファレンスエンジン起動!!」

怒りの前に賢くなることの正しさを彼のマスターは認めない。そこに正しい選択があったのかもしれないと理解しながらも、認めない。

許すことが大切だと知ったようなことを言う者はいるだろう。

この戦いが無意味なものだと呆れる者もいるだろう。

だが、しかし、それでもと振り上げた意思こぶしには確実に宿るナニカがある筈だと――鋼鉄の巨人はその体軀を軋ませた。

「見果てぬ夢を此処に。我が空想！我が理想！我が夢想！その行き着く終焉せきぎを見るがいい！！」――『大宝具・絢爛たる灰燼世界』!!」

異形の世界の大偉業。バベツジの持つ固有結界宝具―それは本来、身に纏う有り得た筈の未来の鋼鉄を強化し、万物破壊の力に変えるもの。だが、しかし、彼の宝具の本来の形はそうではない。現代史に於ける世界の創造と等しき偉業―コンピュータの基礎概念を打ち立て、

父”と呼ばれた彼の宝具の本質が、”破壊”である筈がない。それは立香も知っていた。懐かしきカルデアでの彼との会話で聞いていた。――『我が宝具を真に解放すれば、様々な夢の機械が現れよう』―その言葉に目を輝かせた。

無論、それはあり得た筈の夢―空想でしかない。科学者であり魔術師ではなかった彼がキャスターのサーヴァントとして召喚された以上、その霊基は彼の宝具の真の解放には耐えられない。

だから、『絢爛テイメンジョン・オブ・スチームたる灰燼世界』は出力を落とし破壊のみを世界に与えた。

だが、しかし、此処にあり得た筈の夢の世界がやってくる。現実を上回る空想が花開く。

「おお。おおおおおお!!なんだ?!何なのだこの世界は!?!」

イヴァン 雷帝が驚くのも無理はない。『大宝具・テイメンジョン・オブ・スチーム絢爛たる灰燼世界』の解放と共に世界は姿を変えた。

極寒の世界は見果てぬ夢の世界に塗り替えられる。鈍く煌く隕鉄の砂の大地。満天の星空。そして、そこに打ち捨てられた数々の機械たち。人々が空想した夢の機械―過去未来問わず人類が開発する機械の全てを内包した世界がそこにはあった。

此処には何でもある。立香こどもが目を輝かせる全てが詰まった玩具箱せかい。探せば〝何処にでも行ける扉ドア〝もあるだろう。

〝空を飛ぶ竹とんぼ〝も。〝大小を操作する懐中電灯〝も。

〝時間旅行機タイムマシン〝もあるに違いない。

そして、だとするならもちろん、〝宇宙世紀に立つ機械の巨人〝も間違いなく存在する。

空想の世界に於いても比類なき巨大サイズなイヴァン雷帝の前にソレは同じ巨大サイズさを携えて現れた。姿形は少しだけ変わっている。それでも鈍く輝く鉄色の鎧と黄金の装飾。そして、煌々と輝く意思を燃やす赤い単眼モナアイがソレが彼であることを告げている。

鋼鐵機動戦士―C・バベツジが大地に立つ。

その姿を見て、初めて自分と目線を同じくするものを前にしてイヴァン雷帝は動揺を隠せなかった。

「……いったい、なんだというのだ。なぜ脆弱な筈の汎人類史おまたちが、余と同等の威光を示さんとする。この世界は、貴様は、いったい何なのだ!!」

「我が名は蒸気王。有り得た未来を掴むこと叶わず、仮初めと消えた儂き空想世界の王である。我に武勇なく、覇業なく、栄光も有り得ず。この身すべては妄念と夢想に過ぎず、故に――そうとも、故にこそ! 我が宝具は真に無尽無限にして無双であると知れ!――!!」

神の如き獣―イヴァン雷帝に引けを取らない巨体サイズとなつた鋼鐵機動戦士―バベツジが拳を握る。

「この拳は我がマスターの意思と知れ。貴様の怒りは正しい。貴様の無念は正しい。その上で、我らも己の正しさを疑わず。故に、殴り合おう」

「殴り合う、だど?余と、偉大なる皇帝ツァーリである余と、子供の如き喧嘩をするだと……、ふ、ふふ、フフハ!なるほど、それがカルデア、子

供の如き貴様のマスターか！よかろう！であれば、知るがいい！余の500年に及ぶ旅路の重みを!!」

「認識し、理解し、共感しよう。そして、貴様も、我らが歩んだ人理修復の旅路の重みを知るがいい!!」

「おお。おおお。おおおおおお!!」

「おお。おおお。おおおおおお!!」

山に等しき巨躯を持つ神の如き獣と宇宙世紀ですら立てるだろう鋼鐵の巨人が殴り合う。鋼鐵の巨人の右ストレートが神の如き獣の横つ面を殴る。神の如き獣の左前脚が鋼鐵の巨人を蹴り飛ばす。重鼻が振るわれる。受け止めて投げ飛ばす。重鼻を振り上げ、天から雷を落す。異音が響き鋼鐵の巨人は姿を変え、蒸気が空を包む。吼える雷帝。立ち上がる蒸気王。

—固有結界の発動と共にこの空想世界に取り込まれ、戦いを見ている誰もが息をのむ。それを見ていたヤガの大人達は後にまるで神代、創世記の戦いだったと語る。

だが、しかし、ヤガの子供達はそうではなかった。

胸の高鳴りの意味も分からないままその戦いに魅入っていた。恐怖ではない。世界を壊すかも知れないと根源的恐怖を生み出したイヴァン雷帝の巨躯は既に唯一ではない。それに並び立つ者が現れたことで恐怖は薄れ代わりに沸き立つ感情がある。子供たちは幼心に、いや、幼心があるからこそ純粹無垢に理解する。

怒れる神の如き獣の咆哮—偉大なる皇帝ツァーリが自分たちを守ろうとしているのだということ、理解する。

確かにイヴァン雷帝は遙かな旅路の果てに生きているだけで世界を壊す獣となった。イヴァン雷帝が居てはこの世界の繁栄せいちようはないとするカドック達の言葉は正しい。

だが、しかし、だから、どうした。子供達かれらには、そんな難しいこと

は関係ない。だから、叫んだ。声を出して天に吼える。1人の子供のヤガが出した声は、次第に数を増やし、遂に子供たちの声は偉大なる皇帝ツァーリのいる天に届くものになる。

「がんばれ！がんばれ！僕たちの偉大なる皇帝ツァーリ！がんばれ！」

振り上げられる重鼻。空想世界に浮き上がる雷雲がイヴァン雷帝の身体に極大の雷を落す。稲妻を迸らせながらイヴァン雷帝は吼えた。

「おお。おお。声が聞こえる！余を望む民の声が！！子供たちの、声が聞こえる！！安心せよ！ロシアは滅びぬ！！余は負けぬ！！」

確かにイヴァン雷帝は数多の魔獣の命を吸いつくし、生きているだけで数多の命を奪う怪物と成り果てた。五百年に及ぶ妄執の果て——在りし日の皇帝ツァーリを知る者はもはや只の一人もなし。ならば、もう彼を理解できるものはいない。生きているだけで罪と断じられた——世界を壊すと定められた——それが真実であることを誰よりも自身が理解している。彼の栄光は終わった。君臨すべきは己ではない。

だから——否。だが、それでも孤独それで終わる筈がない。

「がんばれ！皇帝ツァーリ！がんばれ！がんばれ！」

たとえ世界に疎まれても。精一杯頑張った者ヒトの最後が、最後にたどり着く場所が、孤独そこであっていい筈がない。

時が経つほどヤガ達は知る。偉大なる皇帝ツァーリ——イヴァン雷帝の目指した理想の全てが自分たちの為であったことを——結果は確かに凄惨なものだった——だが、しかし、それでもなお、今この時、偉大なる皇帝はヤガたち全てを背負い戦っていた。

だから、子供だけでなく大人のヤガもまた誰ともなく声を上げた。——観せよ。汎人類史かい。これがヒトの妄執の果て。——神の如き獣と化し





「おお。おお。余とて理解した！その拳に乗るものが余の願いに等しくあると認めよう!!だが——」

「そう、だからこそ——」

「余は負けぬ!!」

「私は負けぬ!!」

神の如き獣と鋼鐵の巨人の殴り合いに終わりはない。どちらが倒れることもない。なればこそ——もう、終わらせなければならぬ。その旅路の果てを見るがいい。彼らがその終わりを示そう。

イヴァン雷帝は重鼻を持ち上げ天に掲げる。空より墜ちる雷を飲み込み唸りを上げる。その姿こそが神獣の十字行。皇帝がいつれ行き着くと信じている天上の国に向かう進行。異星の神を認めぬ程に練り上げた旧世界の神への信仰。つまり、その歩み——止めること即ち神への冒瀆である——不敬なるものに神罰は下される。

『ズウエーリ・クレスニーホツド  
我が旅路に従え獣』!!』

極大のエネルギー砲とも呼ぶべき光線がイヴァン雷帝から放たれる。——ヤガの子供たちの目が輝いた。

対し、バベツジはそれを受け止める。極大のエネルギーを前に彼は避けることも防ぐこともしない。正面から受け止める。それを彼のマスターが、他ならぬ彼が望んでいる。鋼鐵が軋む。夢想故に無双である筈の身体が砕けていく。これがイヴァン雷帝が歩んだ旅路の重みだと理解しながら、ならば耐えられぬ筈がないとエンジンを回し蒸

気を噴き上げる。

バベツジが立香と共に歩んだ旅路はイヴァン雷帝のそれになんら劣るものではなく、故に――胴体の装甲に大きな罅が入る。故に――メインカメラが機能を停止する。故に――罅が広がり全身が砕けそうになる。故に――負ける筈がない。

神罰は下された。不遜なる者が決して辿り着けぬ旅路の果てを示した。そして、イヴァン雷帝は尚も立ち上がるボロボロのバベツジを見た。機械の身体が砕け欠け、モフアイ単眼にも光がない。しかし、それでもバベツジはイヴァン雷帝の前に立っていた。

「次は、私の番である」

鋼鐵の巨人は満天の星空に手を伸ばすと、星の一つを掴み取る。今より起こるは大偉業――未来の果てで初めて人が手にする神の力。鋼鐵の巨人の願いの元に星は空から落ちてくる。

それは現代に於いてとある大国が開発中の宇宙兵器軍事衛星。

高度1,000kmの低軌道上に設置された衛星より、タングステン・チタン・ウランからなる全長6,1m、直径30cm、重量100kgの金属棒を打ち出す運動エネルギー爆撃。落下速度はマッハ9を超え、ロックス・フロム・ゴッド地下数百メートルにある目標すらも破壊する――  
『神の杖』。

イヴァン雷帝は光り輝く空を見上げて理解する。これより降り注ぐものが己の身体ごと大地を砕いてあまりある破壊の光であることを理解する。しかし、それでも避けることも防ぐこともできない。してはならない。

彼らが歩み、彼が夢見た空想の果て――その旅路を受け止めなければならぬ。目の前で立つプレイヤー勇者の様に――

人が創り上げる神の光が堕ちてくる。それが神話を終わらせた人の全て。それが神代を否定した人の行き着く果て。機械文明の終着

地―そこで人間は愚かしくも神の名を冠する獣に成り下がる。だが、それでも―その歩みを否定することがイヴァン雷帝には出来なかった。

彼は見てしまっていた。多くのヤガ達、多くの子供が自分を応援している声を聞きながら、内の中に戻した殺戮<sup>オブリチキニ</sup>猟兵が作り出した凄惨な光景を―知ってしまった。

それだけではない。彼の歩んだ世界を救うための旅路の下で、生きる為に<sup>弱者</sup>子供を切り捨てる<sup>強者</sup>両親が数多く存在したことを思い出ししまった。

偉大なる皇帝<sup>ツァーリ</sup>―神の如き獣―イヴァン雷帝の旅路は決して間違っ  
てはいなかった。汎人類史においてロシア最悪の暴君と謳われた彼の旅路は、民より絶対的な皇帝として敬われ、西欧の人々に<sup>デリブル</sup>“恐怖”  
として恐れられた彼の歩みは、それでも決して間違っ  
てはいなかった。間違っ  
ては、いなかったのだ。

神の如き獣が地に伏す。同時に空想世界は砕けて消える。

蒸気王―バベツジは創り出した空想の世界が消えると共に消失する。最後にもはや肩に乗せることも出来なくなってしまった少女を見ろしながら、それでも手を伸ばした。

「貴様にも、見えただろうか、我が、夢見る空想世界、が」

「うん。見たよ。やっぱり、バベツジさんは私のヒーローなんだよ」

「そう、か。であるなら、良い。ああ、良い、良い、旅路で、あった。ありがとう、とう。マスター」

空想の世界は解れて消える。そして、極寒の世界が戻ってくる。そこにはもう立香のヒーローは立っていないかった。

極寒の世界に伏した神の如き獣の冠が零れ落ちる。それはイヴァン雷帝がヒトであった頃の最後の名残。五百年の妄執と化した男の残滓が零れ落ち、身体を引きずりながら自らを打ち倒した者達の前へとやってくる。

立香と魔王信長は彼が近づいてくるのを静かに待っていた。

そして、彼は二人の前にたどり着いた。

光沢のある青銅色の身体。神の如き獣としての身体を失おうとも、長身である魔王信長が見上げる程に大きなイヴァン雷帝の残滓の前に立香は笑った。

「…皇帝ツァーリさんに流れる血も、赤いんですね。あは、私と同じ」

「…余は、問わねばならぬ。答えよ。彼の王のマスター。余は、余の旅路は、間違いであったのか」

「それは違うよ。絶対に、貴方の旅路は間違っってなんていない。そして、私も…理解したんだよ。私たちのこれからの旅路が正しくないってことも、ちゃんと理解したんだよ」

イヴァン雷帝の残滓は間違いを認めながらも自分を睨みつけている立香をみた。

汎人類史の旧種ヒト。世界を糺ただしにきた少女は世界で苦しむ民たちを一人残らず殺戮する覚悟をしながら、そこに立っていた。

「私は自分が皇帝ツァーリさんより優れているなんて思わないんだよ。正しいなんてこともある筈がないんだよ。でも、間違っっているとも思わない。そして、私たちは皇帝ツァーリさんより、強かった。これは、そういうことなんだから…ただ、それだけのことなんだから…」

イヴァン雷帝の残滓は立香の答えを聞くと、今度こそ消えていく。「勝者が泣くか…懦弱な汎人類史らしい在り方だ…しかし、その哀し

みは…もう、ヤガが持てなくなったもの。他者に対する憐憫…：共感…：。か弱い、幸福者」

立香の涙を見てイヴァン雷帝の残滓は思い出す。かつて、彼が愛した王妃―アナスタシアもまたそのような女ひとであったことを―この地獄せかいで生きることの辛さではなく、他者の不幸に泣くことの出来た女ひとであったことを。

弱肉強食を突き詰めた世界。弱者は弱肉にも成れぬ世界。そこに君臨したイヴァン雷帝にとって、その「余分」こそが美しく映った。

いつから、だろうか。その何より愛おしむべきものが、世界から無くなってしまうのは―そして、それが失われた世界であったからこそ、蒸気王の一撃を自分は受け止めきれなかったのだと、イヴァン雷帝の残滓は理解した。

「…認めよう…藤丸立香…汎人類史、最後のマスター…おまえの…：勝利を…。たとえ、誰が認めずとも…：。余は…認め…敗者として…：去りゆく…：のみだ…：。…：民よ…：子らよ…：すまぬ…：この者達との喧嘩戦いは…：。…：存外に…：。余の…：心を…：満たし。…：。…」

偉大なる皇帝ツァーラー―イヴァン雷帝の五百年に及ぶ旅路はこうして幕を閉じた。

## 立香ちゃんは歩く

偉大なる皇帝ツァーリ―神の如き獣―イヴァン雷帝は立香の手によって討たれた。

その戦いを見上げて居ることしかできなかつたサーヴァント―アタランテ・オルタは戦いの中で交わされていたバベツジとイヴァン雷帝の会話の中で残酷に過ぎる世界の姿を見た。

汎人類史と異聞帯の戦いはどちらかの世界を滅ぼさなければ進めない過酷すぎる旅路。異聞帯が消え去れば、そこで生きる全ての者が消える。―つまり、今までアタランテ・オルタが率い守ってきた叛逆軍の皆も消える。命を落とす。

アタランテ・オルタは旧世界の抑止力が呼んだ汎人類史側のサーヴァントだ。だが、しかし、異聞帯で長く過ごす間に彼女は此方側に染まってしまっていた。汎人類史のサーヴァントだからと言い訳をして、今まで守ってきた者達を切り捨てられるほどに彼女は弱くなれない。

ならば、やるべきことは明白だった。イヴァン雷帝を打倒した立香は直ぐにでも異聞帯を支える要である空想樹の切除を始めるだろう。その前にアタランテ・オルタは立香を倒さなければならない。

幸いにして戦いを終えた立香たちは疲弊している。今ならあの怪物であったイヴァン雷帝と渡り合った強者とはいえ、アタランテ・オルタでもその命を取ることが出来るだろう。狩人の矢は容易に子供の命を射抜くだろう。急がねばならない。

世界が壊される前に、皆を救う為に、“正義”を―震える手で矢を番えようとしたアタランテ・オルタを止めたのはヤガ達だった。

叛逆軍のヤガ達、そして、パツシイの手が、震えるアタランテ・オルタを支えるように、弱い弱いその身体に添えられる。

「…お前たち、何をする。安心しろ、私はお前たちを裏切らない。世界を、守ろう」

ヤガ達はアタランテ・オルタの痛々しい言葉に首を振る。

「もういい。もういいんだ。俺達はボスのそんな姿は見たくない。：

それに、ああ、それにこれは認めなきやならないことだ。俺達にも意地がある。ヤガとしての意地がある」

「そうさ。イヴァン雷帝の姿には正直、痺れたぜ。敵である筈なのに応援しちまった。そうなった時点で俺達にはもうアンタに守ってもらう資格はなくなつたよ」

「強食のみの世界。そこで一番強い者が、私達の為に戦つて、負けたんです。なら、私達も認めます。ええ、悔しくても苦しくても認めなきやならない。：敗者は去るのみ。イヴァン雷帝が最後に示したそれが、色々なものを捨ててしまった私たちに残つた最後の大切なものなんでしょう。だから、もういいのです」

アタランテ・オルタは敗れ消えゆく者たちの最後の矜持を見た。

「そう、か。お前たちはやはり強いな。私などより、きつとずっと強い。ああ、わかつた。私たちは負けたのだな」

アタランテ・オルタは弓を置く。もはや彼女に立香と戦う理由はない。敗者は去りゆくのみ―そうあることがヤガの矜持だということなら、自分もそれに従おうと立香たちに背を向けて去っていく。

空想樹は切除されるのだろう。この異聞は滅びるのだろう。

だが、それは直ぐではない。幸いに、情けない話だがアタランテ・オルタは余力を存分に残したまま戦いを終えることが出来たのだ。ならば、最後の時まで彼らのボスであろう。隠れ家に置いてきた子供達にお腹いっぱい食べさせてあげられる獲物を狩ろうと―狩人はヤガ達を連れてその場から去って行った。

そして、アタランテ・オルタとヤガ達の他にもう一組、戦いの全てを見ていた者たちがいた。

クリプター―カドックにはもう立ち上がる力は残されていなかった

た。

カドツクがアナスタシアを皇帝にする為に費やした時間は無駄になった。たとえ今から立香を倒したとしても異聞帯セカイはアナスタシアを「皇帝である」とは認めないだろう。

『非常大権』は譲渡されない。そんなことはカドツクにもわかる。わかってしまう。

皇帝の座は易々と譲り渡されるものではない。

何かを成し遂げられるものは、何かを成し遂げようとしたものだけだ。偶々世界を救うだとか、偶々強大な敵を倒すだとか、そんなことは絶対にない。絶対にあつてはならない。

そんなことはカドツクだって知っていた。だから、機会さえあれば自分にも成し遂げられると信じたかった。人理修復に挑む旅路―カドツクが唯一持ちえた誇れるかもしれないモノ―レイシフト適性。それが輝く機会チャンスは奪われた。―奪われたと思っていた。

けれど、目の前でそれが間違いであったことを見せつけられた。カドツクにはまだ機会が与えられていた。

クリプターとなった時、初めから異星の神を裏切り人理を救う旅路があつた。

今ならばカドツクにもわかる。あの立香なら、同じ立場に立たされた時、その選択をしたのだろう。カドツクを噛いながら見事に裏切つてみせ、イヴァン雷帝を倒したのと同じように、たとえば他のクリプター達を敵に回し、七つの世界全てを裏切る結果になろうとも自分たちの世界の為に戦つたのだろう。

堂々と胸を張り、高らかに「正義」を主調しながら、それが間違いだと認めながら、それでも笑い続けたのだろう。

そして、そんな英雄彼女だからこそ力を貸したいと願う英霊サイヴァントたちが数多く居たに違いない。

そんな旅路をカドツクカドツクの位置に立香が立っていたのなら、歩んだのだろう。

―それを知ってしまったカドツクはもう立ち上がれない。地面に座り込み、俯くことしかできない。完全に心は折れていた。



そんなマスターの姿を見つめながら、サーヴァント―アナスタシアはこれで良かったのかもしれないとも思った。彼女はカドツクの頑張りを傍で見っていた。ずっと見ていた。じっと見ていた。その懸命さを可愛いと思った。けれど、こうして絶望に沈む彼の姿もまたアナスタシアには可愛らしく見えてしまう。

全てを諦められなかった故に弱気だった少年は、遂に全てを諦めようとしていた。それを全てを諦めたが故に強気な少女は優しく抱きしめた。座り込む小さな身体を包み込むように抱きしめる。

「もう、いいのではないかしら」

それは優しい声だった。

「貴方の頑張りを私は知っています。貴方の価値を私だけでは知っていません。この物語は私たちを認めないのでしよう。なら、もう、いいのではないかしら」

「…だが…僕は、君を皇帝に」

「カドツク。私の可愛いマスター。それが貴方を縛る楔なら、解きましよう」

カドツクは続くアナスタシアの言葉を止めようとした。優しい口調から紡がれる言葉の先をマスターであるカドツクだからこそ予想ができた。それ以上、先をアナスタシアに言わせてはいけない。

言わせてしまえば、彼女の霊基は反転する。

「駄目だ…アナスタシア、それは…それだけは…」

初めからその可能性は存在していた。アナスタシアはロシア革命の激動に飲み込まれ虐殺された亡国の皇女。革命により彼女の大切な人々は皆、死んだ。両親は死んだ。オリガ、タチアナ、マリア、皆死んだ。家来も召使もペットも皆虐殺された。善良な人生を送ることを主に祈った少女の祈りは―届かなかった。

民を恨むなという方が無理がある。

それでもアナスタシアは皇族として民を導く道を選んだ。だが、しかし、此処にその道も閉ざされる。凡人類史だけでなく異聞帯においてもまた彼女の祈りは届かなかった。可愛らしいマスターの願いも叶わなかった。ならば、もう、いい。

自分を止めようとするカドツクの言葉を口づけで止めた後、アナスタシアは美しく嗤う。

「私はもう、こんな世界はいりません」

言葉と共にアナスタシアの霊基が反転する。カドツクは目の前でアナスタシアが魔術師キャスターから復讐者アベンジャーに堕ちるのを見て顔を歪ませた。

「あ、ああ、あああああああ！」

「ふふ、酷い顔。大丈夫よ。カドツク、たとえ霊基が変わろうと私は私です。さあ、マスター。一緒に選びましょう。これからどうするのかを」

— 《まだ諦めない》

— 《もう終わりだ》

カドツクにはもう立ち上がる力は残されていなかった。

その選択を見届けて、アナスタシアは全てを終わらせる事にした。

「ヴィイ、私が願います。わたくし私が呪います。わたくし石に、氷に、頑なに。我らに何者にも侵されぬ永遠の眠りを。『邪眼』を開きなさい、ヴィイ」

優しい冬が二人を包む。

白い皇女。獣国の皇女となる筈だったアナスタシアは、ロマノフ帝国の末裔として民を憎悪しながらも導くという苦難の道を選ぶことはせずに、カドツクと共に安らかな眠りについた。

イヴァン雷帝はバベッジの手により倒れた。異聞帯の要である空想樹も魔王信長とセイバーの手により切除された。—その最中、立香が首を傾げた。

てつきり空想樹の切除の前にカドツクが自分を止めにやってくる

と思っていたからだ。けれど、カドツクは現れなかった。

逃げたのだろうと思いましたが、立香的にはカドツクはボコボコしなきゃならない相手。その機会をだろうなんていう予想で失えば自分で自分が許せなくなるので、立香は全てが終わった後もカドツクを探しまわることにした。

—そして、見つけた。極寒の大地の片隅に少年と少女の氷像があった。

それを見て立香の視界は赤く染まる。

「ふぎ、けんな。ふぎけんなよ！」

モノ言わぬ氷像と化したカドツクと彼に寄り添い笑うアナスタシアの残滓に、立香は怒声を浴びせる。

無論、返事はない。

「お前たちは何なの!! 突然現れて私たちを馬鹿にして!! 何もしないでいなくなるの!! ふぎけんなよ! 戦えよ!! 私と戦え!! 私がお前を殴るから、殴り返せ!! 怒るってことは一人じゃできないの!! 振り上げた拳が、私が、私は、どうすればいいの!!」

カドツク達の氷像に殴りかかろうとした立香を魔王信長は抱きとめる。

「もうよい。もうよいのだ。マスター」

「でも、でも、ノツブさん…でもう…でもう…」

「此度の戦はこれで終いである。其処に転がる首は、マスターが拾う価値も無きもの。戦うことも選べぬ臆病者にこれ以上、マスターが心を痛める必要はない。いい加減に無視し続けている通信に返事をしやろうぞ」

魔王信長の言葉で冷静さを取り戻した立香は通信機の音に耳を傾ける。聴こえてくるマシユの声が遂に泣き声に変わろうとしていた。

「…うん。そうだね。あはは、みんな、怒ってるかな。怒ってるよね。

…一緒に謝ってくれる?」

「是非もなく。嫌である」

こうしてロシア異聞帯の旅は終わる。残る異聞帯の数は6つ。残る敵は6人。<sup>クリプター</sup>

対し立香のサーヴァントは5騎。このまま1つの異聞帯で1騎ずつサーヴァントを失い続ければ、立香は最後の異聞帯でただ一人立たなければいけなくなるだろう。

しかし、この立香はどんな状況になろうとクリプターとの共闘には応じない。

故にこの旅路の先は過酷なものであると決定づけられ――  
ブチギレ立夏ちゃんの旅路は未だ始まったばかりである。

## 門幕

### 新たな旅路を

《……繰り返す。我、汎人類史の魔術師。次の座標にどうか合流を——こちらはバルトアンデルス。彷徨海ほうこうかい、バルトアンデルスである》

ロシア異聞帯での戦いから数日後、立香はマシユと共に「漂白」された世界を歩いてきた。白い大地。不気味なほどに澄み切る青空の下には、世界の「漂白」に取り残された建物が残っていた。

以前は人が暮らしていたらう建物がまるで前衛的芸術作品のような不可思議な形で残されている。「形が欠けた」としか言い表せない建物に立香とマシユは踏み込んだ。

「まるで、違う惑星のようです」

マシユの言葉に立香は頷く。世界は「漂白」され、地球は異聞帯以外に生命のいない惑星と成り果てた。だが、しかし、此処の様に極まれに取り残された地域・建物・そして生命が存在する。これをカルデアは『残留物』と呼称し、立香は『希望』と呼んでいた。何もなくなつてしまった世界で、それでも生きている人がいる。その事実があるからこそ立香は拳を握ることができる。

「どうやら此処では何人かの生存者が数日、数週間。いえ、数か月は暮らしていたようですね。先輩」

ペットボトルや缶詰の数々。何度も修理を試みたであろう通信機の残骸。床に転がる人々が暮らしていた名残の中から、立香は幼年向けの人形らしきものを拾い上げる。それは生存者の中には小さな子供もいた証。そして、今は持ち主を失った人形のビーズの瞳が立香をじっと見つめていた。

「許せない」。許してはならない。——そんな声が立香の頭に響く。

“許せない”。 “許してはならない”。 —ああ、その通りだと立香は嗤う。

理不尽に奪われた。唐突に世界は断絶した。この人形の持ち主であった子供に “罪” はあったのか？ 明日を信じて眠る子供から明日を取り上げる権利が彼らにはあったのか？ —答えは出ない。 —出す必要もない。

立香はその確信を抱きながら、マシユに問いかける。

「ねえ、マシユ。私は間違っているのかな。私の気持ち怒りは、幼稚なのかな」

「…先輩」

「許すことが大切だって言う人がいるの。クリプター達にも理由があったんだっていうの。うん。そうかもね。彼らは私と違って凄く魔術師だから、きつと人類を裏切った頭のいい理由を十も百も並べ立ててくれる筈なんだよ。…でも、それが許す理由にはならないよね」

立香は嗤う。憎しみと怒りの混じる顔で嗤う。それを見ながらマシユは思う。

大好きな先輩にこんな顔をさせているのは自分なのだと理解する。

—立香とマシユではクリプター達を見る視点が違う。立香にとってクリプター達は突然現れた敵でしかない。

しかし、マシユにとつては立香と同じく “先輩” と呼ぶべき存在。

クリプター—元Aチームの魔術師たち。マシユもまた元々はAチームに配属されていたデミ・サーヴァンド。確かに彼らとマシユとの交流は薄かった。けれど、零ではないし、マシユを気にかけてくれる人たちも確かに存在していた。—それは立香も知っている。立香は滅茶苦茶に見えるが勤勉だ。 “優秀な立香ちゃん” を自称する彼女は努力を怠らない。その努力の中には敵への理解も当然の如くに含まれる。

カルデアに残されたデータベースの中で立香はマシユに好意的だったクリプター達の姿を見た。かつてのマシユはその好意を優しさだとは受け取っていなかったが、今のマシユならば彼らの行動が善意からのものであったことを理解しているだろう

だから、マシユは立香の前で口に出してしまったのだ。

―「彼らにも何か理由があったのかもしれない」と。

「…あは、困らせて、ごめんね。でも、言っておかなきゃ、いけないことだから、言っちゃった」

マシユは自分に向けられる立香の哀し気な笑顔をみた。マシユは胸が締め付けられる痛みを感じた。

「この立香」は敵クリフターを許せない。許したくない。けれどもマシユは彼らクリフターを立香の様に心の底から憎むことが出来ない。

「優しい彼女」と「この立香の考え」は交われない。けれどもこの物語はとても悪趣味だから、互いを大切に思い合う二人の対峙は優しき故に先送りにされてしまう。互いにいつか訪れると解りきっている結末から目を反らしながら、立香はマシユを抱きしめた。―困らせてしまった後輩に謝りながら優しく抱きしめる。マシユはそれに答えるように立香の背に手を回した。

「私はマシユが、大好きなんだよ」

「私もです。先輩は私にとって大切な人です」

人はすれ違う生き物だ。そのズレを「気遣い」や「思いやり」と言うもので埋めながら生きていく。けれど、決定的に分かり合えない者は存在するし、どれだけ相手を想おうと避けられない決別は存在する。「この立香」と「優しいマシユ」が最後にどうなってしまうかは天才である彼女にもわからないことだけれど、とりあえず言わなければいけないことがあるとダ・ヴィンチは可愛らしい声で通信機越しに二人に伝える。

《一人とも、そろそろ時間だよ。そして、私たちが観測していることも忘れないでいてくれると嬉しいな》

立香とのイチヤイチャラブラブを観測機越しにシャドウ・ボーダーの皆に見られていたと気付いたマシユは顔を赤くして、そんなマシユを見て立香は笑った。

ロシア異聞帯を後にしたシャドウ・ボーダーは航海の最中に届いた

通信に応え、航路を定めた。向かう先は――彷徨海バルトアンデルス。

ロンドンの時計塔。エジプトのアトラス院に並ぶ魔術世界に置ける三大組織の一つ。北海に隠された神代の島――最古の魔術棟――彷徨海。

その実態は世界を彷徨う「異世界の海」に西暦以前に建てられた魔術棟だという。神秘のテクスチャを貼りながら移動する大地はまるで「独立した特異点」だとホームズは評した。

そして、そんな彷徨海バルトアンデルスだからこそ世界の「漂白化」を逃れ、未だ存在している可能性は高くあった。

故にカルデアは届いた通信は彷徨海バルトアンデルスからのものであると判断。残された汎人類史の英知を集結させるため、指定された海域に向かうこととなる。

ただ現在の地点から指定された海域へ向かう為には「北欧異聞帯」と称する第二異聞帯区域を越えねばならずマシユと立香による「漂白化」より取りこぼされた区域の搜索終了後、シャドウ・ボーダーは二度目の虚数潜航を行うこととなった。

ただし今回は異聞帯の調査・攻略は後回しでいい。北欧異聞帯を越え彷徨海にたどり着くことが第一の目的。そう決めたのはダ・ヴィンチとホームズ。そして、ゴルドルフ。彷徨海にたどり着けばサーヴァント召喚に必要なエネルギーが手に入る。そうすれば戦力の増強と共に立香のサーヴァント以外のサーヴァントの召喚が可能になるだろう。

現カルデアの頭脳であるダ・ヴィンチとホームズの二人。そして現所長であるゴルドルフはロシア異聞帯で今の立香の危うさを見せつけられた。度重なる独断。繰り返された命令無視。ダ・ヴィンチとホームズは立香がカドックと合流後にイヴァン雷帝の眠る首都で暴れまわっている間、ずっと立香に呼びかけ続けていた。そして、立香は通信機越しの言葉を無視し続けた。結果――確かに立香はイヴァン雷帝に勝利しロシア異聞帯の空想樹は無事に切除された。だが、そんなものは偶々だ。次も立香の行動が全て上手くいく保障など何処にもない。



立香は頑張っている。独断での単独行動の全ては戦える者が戦うべきだという判断の元の行動。ダ・ヴィンチはシャドウ・ボーダーの制御の為に離れる訳にはいかない。ホームズはそのシャドウ・ボーダーを守らなければならない。—だから、私が戦うんだと拳を握る立香の思いを二人は理解している。だが、しかし、それとこれとは別の問題。否、戦えるのが立香しかないというのなら尚更に彼らは立香を失う訳にはいかない。だから、立香の単独行動は許してはいけないと—ロシア異聞帯での戦いを終えた後に二人は立香にお説教をした。

因みにその際、勘だけはいいい立香は何やら不穏な空気を感じたが、ダ・ヴィンチからのお風呂の誘いがあるとそれも忘れて着いて行って簡単に捕まった。そして、立香を助けようと勝手に飛び出した森長可はホームズの「バリツ」に沈んだ。ダ・ヴィンチを狙った森長可を後ろから奇襲するとか流石に探偵は汚い。

そんなどうでもいい攻防の末、立香はダ・ヴィンチとホームズの二人から三時間に及ぶお説教を受けた。立香は反省した。—問題は其処からだった。立香は確かに反省をした。シャドウ・ボーダーからの通信を無視した事、マシユを泣かせてしまった事を深く反省して、ゴルドルフを含む全職員の前で頭を下げて謝った。だが、しかし、続く言葉があった。

「同じ状況になった時、私は同じ選択をする」と立香は言った。握った拳を解かない意思を示した立香はダ・ヴィンチとホームズを大いに困らせる。立香の気持ちも分かってしまうから、困るのだ。

立香の気持ち<sup>怒</sup>をダ・ヴィンチとホームズの二人は否定しない。理解しようとしている。だが、しかし、やはり立香が繰り返すだろう危険な行動を止める必要性はある。立香の暴走を止める存在が必要だった。

幸いにして立香の隣に立ち、立香を止める役割を果たせる人物が一人は居た。—マシユだ。デミ・サーヴァントである彼女は既に力を取り戻している。以前の様に「聖騎士ギヤラハッド」の加護を宿した状態ではないが、ダ・ヴィンチの造り上げた「霊基外骨格オルテナウ

ス”を装着することで前線に出られるだけの力は取り戻している。以降、立香のストッパーとしてマシユを共に立たせることをダ・ヴィンチとホームズはゴールドルフに進言し、ゴールドルフもそれを許可した。

ただ、それだけでは不安だと零したゴールドルフの言葉にダ・ヴィンチもホームズも頷く。

確かにマシユは立香を危険から遠ざける為に役割を果たしてくれよう。しかし、いざとなればマスターの立香の意思を尊重するのがマシユという少女だ。たとえ今の立香とマシユのクリプター達への考えが少しだけズレていたとしてもその根底が変わることはないだろう。

だから、マシユの他にも立香のストッパーとなる者が必要だった。

二人は立香のサーヴァント達に接触を試みた。立香は自分に力を貸してくれるサーヴァント達を何故か明かしたがらなかったが、ダ・ヴィンチが一夜を一緒の布団で寝ることを提案すると“わーい！”と喜んで二人の前で全員を現界させた。

二人は立香のサーヴァント達に、シャドウ・ボーダーにいる間は自分たちが寄り添うから、戦場では君たちが止めて欲しい頼んだ。結果は芳しくなかった。

復讐者―魔王信長は立香の決断を称賛する立場で危険が迫れば命を掛けて守るが、止めはしないと嗤った。

狂戦士―森長可は立香の怒りは正当だろうがと二人の提案を吐き捨てた。

暗殺者―武則天は妾達は悪くないもんと顔をそむけた。

唯一、ダ・ヴィンチとホームズの話に理解を示した騎士は悩みながらも立香の気持ちを尊重したいと申し訳なさそうに首を振った。

騎兵は論外だった。あんな野郎に立香の事を頼むなら、“私が出陣”が二人の共通見解だった。

此処にきてロシア異聞帯で魔術師―バベツジを失ったことの大きさが響いてくる。彼は少しでも立香に甘い部分はあったが、子供を叱れる立派な大人だった。―だが、失ったものを嘆くことばかりをして

いられない二人は立香のサーヴァント達から協力が得られないと分かる。次善の策を考える。

それが新しい英<sup>サーヴァント</sup>霊の召喚。その為に必要な場所とエネルギーの確保に苦慮していた二人に届いた彷徨海からの通信はまさしく助け舟。

こうしてカルデアの頭脳二人の提案。そしてゴルドルフの決定によりシャドウ・ボーダーは彷徨海への到達を第一目標として、北欧異聞帯を駆け抜けることに決めた。

それは正史―辿る道筋は少しだけ違うが彼らがそう選択することは必然だった。

〃ロシア異聞帯での戦いを終えた後、彷徨海よりの通信を受けてシャドウ・ボーダーは北欧異聞帯を横断する決断をし、戦いを避けて指定された海域を目指す”。―結果、それは叶わずに終わり、立香たちは北欧異聞帯での戦いを強いられることになる。

その運命を変えたのはやはり立香だった。

北欧異聞帯を越える為に行われた二度目の虚数潜航。第二航海の最中、突如、船内に鳴り響くレーダー音が虚数空間を進んでいるシャドウ・ボーダーに何か接近していることを知らせてくる。そして、船が揺れた。

「ありや、衝突事故かな？ダ・ヴィンチちゃんの運転は完璧だから、きつと相手のわき見運転だね！」

「待て。待て。待て。待てえ！虚数空間に…な、な、なにが存在するとうんだ!？」

軽口を叩く立香と慌てるゴルドルフという最早見慣れた光景にどこか安心感を抱きながらも、現状が安心を許さない状況であることは明確だった。

あらゆる物体が存在しえない虚数空間でシャドウ・ボーダーが何かにぶつかった。

次いでダ・ヴィンチからの報告が飛んでくる。

「うーん。ボーダーに積まれたソナー、魔術的・霊的なレーダーにもさっぱりだ。何がぶつかったのかは分からない。けど、さつきから

ボーダーの進みが良好。何かわからないけど、コレは船を押ししているね》

それを聞いて立香は敵じゃないのかな?と思った。それを支持するようにマシユは「何処かほんのりとあたたかいようななにか」を感じると伝えてくる。

現状、シャドウ・ボーダーを押し何が敵かは分からない。けれど、ゴルドルフは最悪の事態を想定しながら所長としての決断を下す。

「敵だ。こういう時は最悪を想定するべきなのだ!マシユ君の感じる心地良さも悪魔の常套手段だ!悪魔というものは最初は優しいんだよ!」

敏腕美人秘書―コヤンスカヤに騙された太つちよ紳士―ゴルドルフのその言葉には誰もが頷いてしまう説得力がある。

「私は私の理性に従う!いいかね諸君、断じて冒険野郎なんかにはなりたくないが!この場合、緊急浮上が最善なのは私にだって分かる!カルデア所長権限により、命令する!虚数潜航艇シャドウ・ボーダー、全力で緊急浮上を行え!」

危険も伴う緊急浮上。そのゴルドルフの決断にダ・ヴィンチもホムズも賛同する。マシユが感じるといふ心地よさだけでは何か分からないものが味方とは言い切れない。ダ・ヴィンチの「眼」にも映らない何かシャドウ・ボーダーの傍に居ることは確定的である以上、まずはその未知から距離を取るといふゴルドルフの判断は正しい。

立香もそれを受け入れる。ゴルドルフが第一に考える「全員の安全」は立香も第一にしたいと思うことだ。

―だから、ゴルドルフの決断に待ったを賭けて運命を変えたのは立香ではない。立香ではなく「この立香」が居たからこそ存在した英<sup>サーヴァント</sup>霊は、立香がギリギリまで擁する全サーヴァントの真名を秘匿していた理由である彼は、不敵に笑いながら何時の間にかシャドウ・ボーダーの舵<sup>ハンドル</sup>を握っていた。

意味が不明だった。唐突に表れた彼の存在も、彼の行動も、立香にだって分からないことだったから、全員が固まってしまった。ただダ・ヴィンチだけは彼がシャドウ・ボーダーの舵<sup>ハンドル</sup>を握った瞬間、シャ

ドウ・ボーダーの制御が自分を離れたことを悟り叫んだ。

《私の船に何をするつもりかな！ライダー！》

美少女の可愛い怒声にライダーは一切の怯みを見せることなく堂々とした余裕たつぶりの態度で笑う。

「なあに、悪いようにはせんさ。ただ俺もその嬢ちゃんと同じ意見でな。こいつは悪いもんじゃねえ。俺達を新天地に運んでくれる潮風さ。だから、相棒、いいかい」

傍若無人な振る舞いを見せるライダーはそれでも勝手を起こす前に立香に許可を求めてきた。当然だ。彼はもう二度と立香を裏切らない。いや、二度とではない。既に彼は十回以上、立香を裏切っているのだから、もう裏切らない。

そんな信用も信頼もするべきではない彼の言葉を立香は再び信じてみせる。

その立香の決断にホームズは呆れ、ダ・ヴィンチは顔を覆い、マシユは崩れ落ちた。『優秀な立香ちゃん』を自称するこの立香に唯一、誰も庇うことが出来ない汚点があるとすればそれはこのサーヴァントとの関係性に他ならない。

立香とライダーは共に戦い。共に勝利し。そして、何度も立香はライダーに裏切られてきた。

そんなこと繰り返すこと十数回。オルレアンで、セプテムで、オケアノスで、ロンドンで、北米で、キャメロットで、バビロニアで、新宿で、下総国で、そしてアガルタで、ライダーは立香を裏切り続けてきた。その度に立香は打ちのめされながら、最後にライダーを打ちのめし、許し続けてきた。

『許すことが大切だ』—誰かが言った言葉は、他でもない前の立香が言った言葉だ。

「ゴルドルフさん。緊急浮上は止めて、あの人に任せてみませんか？」  
「な、何を言っているのかわかっているのかね!? 其処に居るサーヴァントが何者なのかは私でも知っている、何故英霊の座に居るのかも分からないロクデナシではないか! そんな男をこの状況で信じると言うのか!？」

「はい。たぶん大丈夫ですよ。だって私のライダーの幸運はEXなんですよ？あは、幸運Eしかなさそうなゴールドルフさんとは違って！」  
「ぐう、その歪んだ笑みの原型はそのサーヴァントの笑いツレか!!ええい、あんな奴を少女のサーヴァントにするなんてカルデアの連中は何を考えていたのだ!!」

ゴールドルフの言葉に返す言葉がダ・ヴィンチを含めたカルデア職員には無い。確かに彼は無垢な少女が使役している英霊サーヴァントではない。確実に人格の形成に影響を及ぼす。―結果、この立香が出来上がったしまったと明言はできないが、全く影響がなかったとも言えないだろう。

だが、しかし、立香はあの場所で彼と出会ってしまったのだ。

人理修復の旅地の第一歩―オルレアンに挑むためにカルデアで行われた初めての英霊召喚。その場所で初めての召喚に驚き尻もちを着いた立香を見下ろしながら、彼は言った。

『サーヴァント、ライダーだ。まあ、よろしく頼むぜ』

それが立香の初めて見た英雄の姿だった。

以降、立香はライダーと共に人理修復の旅路に挑み今に至る。

そんな彼が信じろと言う。―ならば、立香は信じてみよう。

「大丈夫ですよ。だって世界を救わなきゃ、奪うモノもないもん。そうでしょ、ライダー」

「ははっ、違いねえ。なあに、心配するな。船に関しちや、俺は嘘は言わないさ。この船を押す、これはいい風だ。この風と俺の操舵うでがあれば、このまま海に潜ったままで新大陸までお前たちを運んでやるよ」

ライダーの言葉にゴールドルフは驚いた。

「な、このまま虚数空間を進み北歐異聞帯を越えられると言うのか! :ダ・ヴィンチ技術顧問!そんなことが本当に可能なのか!」

《…正直、ノーと言いたいけどね。うん。この出力で彼の腕なら、可能かもしれないな。彼はロクデナシでも操舵うではピカ一さ》

「そ、そうか。…よし、わかった。藤丸立香を信じよう。お前はそ

サーヴァントとして務めを果たせ！いや、果たしてくださいよ本当に！」

「はっはっはっ、いい答えだ！」

こうしてライダーがシャドウ・ボーダーの舵を取る。『この立香でなければ有り得なかった展開により、シャドウ・ボーダーは北歐異聞帯を越え彷徨海へと辿り着くこととなる。』

これにより日曜日を嫌う少女が日曜日を迎える時は先送りにされ、その結果がどうなるのかはまだ分からない。事態は混乱し、予定調和は壊れた。未来は見えずに、運命はまだ確定していなかった。

## 立香ちゃんに行く

運命は変わった。予定調和は崩れ、未来はより混沌となる。この立香でなければ成しえなかったと断言できる「偉業」の一つはライダーの手によって完遂された。

「漂白」された世界に向けて発信されていた通信を受け、シャドウ・ボーダーは本来なら有り得なかった速さで目的地に到達した。

それが二週間前のこと——つまり現在、原初の魔術工房——彷徨海バルトアンデルスに立香はいた。

年に一度、12月31日にのみ姿を現し限られた才能のみを招き入れる神秘の海域。多くの才能ある魔術師達が望みながらも足を踏み入れることの出来ない場所で立香は途方にくれていた。

「むう、帰り道が消えたんだよ」

夜中に目が覚めて、与えられた私室を暇だからという理由で飛び出して、廊下を歩いていた立香は何時の間にかに迷子になっていた。時刻は深夜——立香の頭の上ののるフォウ君も小さな寝息を立てている。立香はフォウ君を起こしてしまわない様に絶妙なバランス感覚を誰にも目にも触れない場所で無駄に発揮しながら廊下を歩く。失くしてしまった帰り道を探す立香の旅路は長く——続く訳もなく五分ほどで見慣れた場所にあつさりと辿り着く。——当然だ。

現在の彷徨海バルトアンデルスを取り仕切るアトラス院の才女——シオン・エルトナム・ソカリスと、そのサーヴァント——キャプテン——は立香たちが彷徨海バルトアンデルスにやってきてから、たった二週間の間に人が暮らす環境では無かった彷徨海をカルデアベースに造り替えてくれていた。

現在の彷徨海バルトアンデルスは昔のカルデアとほぼ同じ造りをしている。——その場所で迷子になる立香にこそ問題があったが——それは隅に置いておいて見慣れた場所にたどり着いた立香は安堵しながら、食堂の扉を開いた。

「——む？」

「……深夜の食堂の扉を開けると、そこには盗み食いをする新所長の姿



があつたのです。これは事件かも！」

深夜の食堂。電気が付いていながらも「まあ、誰もいないよね」と開いた扉の先にゴールドルフが居て、しかも、ケーキを盗み食いしていたという事態に立香のテンションが謎に上がる。

「ねえねえ！何食べてるの？バターの香りかも！ケーキ？ケーキ！ケーキ！」

深夜テンションという非常に厄介な状態で絡んでくる立香に対してゴールドルフは心底、迷惑そうにしながら声を上げた。

「ええい、鬱陶しい！まったく：鼻の良い奴だ。おおかた、私と同じく甘いバターの香りに釣られたのだな？……：仕方あるまい。私はもう充分に味わった。そら、まだ手を付けていない半分をくれてやろう。お茶はポットにあるぞ」

立香はゴールドルフから渡されたケーキをわーい！と受け取り、甘いバターのいい香りに欲望が刺激されるまま口に運ぼうとして、止まった。

そんな立香の様子をみてゴールドルフは怪訝な顔をする。

「どうしたのだ？」

「うーん。よく考えたらこんな深夜にケーキは女の子の敵すぎるかも。お茶だけ飲んで、ケーキは明日の楽しみにしようかな？……うん。そうするね。ゴールドルフさん、ケーキありがと。明日、マシユと一緒に食べて味の感想を聞かせてあげるからね」

「……え？なんで私に味の感想を？」

「……え？だってこれ、ゴールドルフさんが作ったケーキでしょ。なんで不思議そうな顔をするのかな？……ていうか、ちよつと顔色が悪すぎるかも！大丈夫!？」

摘まみ食いをしたケーキ。――青白い顔で冷や汗をかき始めたゴールドルフから聞けば、それはゴールドルフが用意した物ではなく、食堂に『for 藤丸立香』と書かれて、置かれていたものらしい。

謎のケーキ。そして、そのケーキを食べてから明らかに体調を崩し始めたゴールドルフ。その事態が意味することを立香が理解するよりも前に、暗殺者のクラスである彼女は「敵」の存在を看破し現界し

た。

金属がぶつかり合う音が食堂に響いた。

立香とゴルドルフが音のした方へと視線を向ければ、そこには立香に向けて放たれた暗器を鞭べんで叩き落とした暗殺者——武則天タマモウイチがいた。

そして、忘れられる筈もない立香にとつての怨敵——T・V・コヤンスカヤの姿があった。

原初の魔術工房——彷徨海バルトアンデルスという絶対の安全が約束された場所に突如として姿を現したコヤンスカヤにゴルドルフは毒を盛られていただろうケーキを食べて青くなつた顔を更に青くしながら、震えた。

「な、なな、ななな、何故コヤンスカヤ君が此処に!?!」

「…参りましたわ。大の男がこつそり、部下への贈り物をつまみ食いとか。本命には口も付けて貰えませんし。…そして、直接、命を狙おうかと思えば面倒なのが、ワラワラと。相変わらず、無駄に愛されますわね。立香ちゃん♪」

予測などできない唐突過ぎるコヤンスカヤの登場を説明するのなら、ロシア異間帯での立香の奮闘とカドツクの絶命を知つた敵クリフター達とコヤンスカヤの間で交わされた交渉の問答を書き連ねなければならぬのだが、今はそれをするとはしない。

知つておくべき事実は二つ。一つ、コヤンスカヤは立香の命を狙い彷徨海バルトアンデルスに現れた。二つ、この状況下において追い詰められているのはコヤンスカヤだ。

不意を突き立香の命を狙つた凶刃は暗殺者——武則天により防がれた。そして、コヤンスカヤを前にした立香の高ぶりに呼応して次々にワラワラと——立香のサーヴァント達が現界する。その中にはもちろん、カルデアにてコヤンスカヤの霊基いのちを砕きかけた魔王信長の姿もあつて、コヤンスカヤの頬を冷や汗が伝う。

毒殺に刺殺。二つの暗殺を外したコヤンスカヤの状況は悪い。いくら異星の神の使者である彼女とはいえ、五人のサーヴァント達を敵に回せるほどの戦力は有さない。奥の手の一つや二つはあるが、それは立香のサーヴァント達も同じことだ。

彼女はロシア異聞帯での蒸気王―バベツジの戦いを知っている。其処で解放された“大宝具”という存在もまた知っていた。

故に此処で無理やりに立香の命を奪わんとすることが悪手であると悟り、失敗したことを諦めて、舌先三寸で転がして逃げの一手を打とうと、立香に微笑みかけたコヤンスカヤにとつて意外だったのは、自分を見た瞬間に殴りかかってくると思っていた立香が動きを止めていることだった。

「…」

コヤンスカヤの声掛けに立香から返事はない。コヤンスカヤと対峙する武則天も立香の命を待つ形で動きを止めている。後ろでは今にも飛び出さんとする森長可を制する魔王信長の姿があった。

コヤンスカヤの暗殺は失敗し、周りには立香のサーヴァント達が揃い踏み。コヤンスカヤにとつて敵地である此処にはもちろん、カルデアの時の言峰神父の様に誰かが助けが入ることはない。逃げようにも武則天がそれを許さない。

どこをどう見ても立香が優位な状況で、それでも立香が顔を俯けて動きを止めている理由を考察して―思い至ったコヤンスカヤは驚いた後、いやらしく嗤った。

「ええ、なるほど、そういうことですか。あなたも意外と愛されていますわね。ゴールドルフ所長」

「…は？…ど、どういう意味だ」

立香が盛られる筈だった毒を盛られ、顔青くして寒気で身体を震わせるゴールドルフが回らなくなってきた舌で懸命に返事を返すのに対し、コヤンスカヤは嗤いながら言う。

「彼女がそうして必死に衝動を抑えているのは、どう考えて貴方の為じゃないですか。私の命を奪うは、簡単でしょう。けれど、それをしとしまえば解毒剤が手に入らない。そう、考えているのでしょうか？」

コヤンスカヤの言葉でゴールドルフは立香へと顔を向け、そこで怒りに震えながらも歯を食いしばり衝動を必死にこらえている立香の姿をみた。

コヤンスカヤの言う通りだ。今の立香にとって、コヤンスカヤを倒

することは難しいことではない。それを分かっていたからこそ、コヤンスカヤも立香の暗殺を試みた。

正面から戦わずに搦め手で藤丸立香という障害を取り除こうとした。それは失敗してしまっただが、コヤンスカヤにとって幸運だったのは「優秀な立香ちゃん」を自称する彼女が、優秀ではなかったことだ。

いや、優秀ではないという言葉には語弊がある。コヤンスカヤとて立香が優秀なマスターであることは認めている。だが、しかし、立香は優秀な魔術師ではなかった。

故に優秀な魔術師ならば選べただろう選択が出来ずに立香は唇を噛む。ゴルドルフの命の前に、小さなリスクを選択することが出来ずにいる。

その姿を嗤いながら、コヤンスカヤは立香に近づく。自分を制していながら、立香がゴルドルフの命を守りたいと思っているが故に動くことのできない武則天を見下し、その前を堂々と横切りながら、コヤンスカヤは立香の目の前に立った。

「愚かな…いえ、この場合は可哀そうにとすべきなのでしょうね。中途半端に優秀な立香ちゃん。貴女が激情に吞まれるだけの愚か者であつたなら、この場で私を倒し多くのモノを救えたのに」

自分を見下すコヤンスカヤを立香は睨みつけるが、コヤンスカヤはそんな立香の視線など意に介さず、ただその姿を嗤う。

「カルデアで受けた傷が原因でロシア異聞帯では私は動くことが出来ませんでした。けれど、もう傷はこの通り癒えています。次に向かう先の異聞帯では存分に商売をさせていただきます♪それがどういことか…中途半端に優秀な立香ちゃんなら、わかりますよね？ふふ、そんな怖い顔をしなくても理解しておりますとも。どうでもいい、ですよね！」

コヤンスカヤは笑う。美しく笑う。優し気に笑う。お前の激怒はその程度かと言いたげに鼻を鳴らし、敵を目の前に動けないという無様を晒す立香を嘲笑う。

「カルデアで出会った時の貴女は脅威でした。カルデア以外の全て

を、自らの命すらも無視して戦う貴女は恐ろしいほどに強かった。けれど：ええ、けれど、出会って間もないゴールドルフ所長を守ろうとするなんて、立香ちゃんちゃんは弱くなりましたね♪」

自分を見上げ睨みつけてくる立香を見下しながらコヤンスカヤの心に沸き立つ感情は落胆だった。視線の交差する僅かな時間に降って沸いた自分の感情に驚きながら、コヤンスカヤは考える。

コヤンスカヤにとって立香は目的の前に立ちふさがる敵でしかない。その筈なのに、その敵が弱くなったことに対して落胆しているという事実を客観的に鑑みて、思い至り、コヤンスカヤの内側で少なくとも衝撃が走った。

「なるほど：なるほど：業腹ですが：私はこの小娘の『怒り』だけは認めていたということですか：)」

カルデアで出会った『凡庸である』とされた少女は、凡人の範疇を遥かに超えた怪物だった。

クリプター達の数人が『物語の中に生じた誤植』と呼称する程度には脅威だった。立香のサーヴァントに霊基を砕かれかけたコヤンスカもまたそれ自体は認めている。確かに単身サーヴァントの使役を可能にする『奇跡』なのだろう。——いや、違う。

『この立香』の本当の恐ろしさは『そこ』ではない事をコヤンスカヤは知っている。

カルデアで戦った時の立香はいつそ清々しいまでに周りの環境と合うものを気にかけていなかった。感情のままに戦い——自分の命すら勘定に入っていなかった。守る為に戦う——いや、違う。魔王を従え極寒の中で嗤っていた彼女は——戦いたいから戦っているようにしかコヤンスカヤには見えなかった。

そして、それが『怒り』。七つの大罪の内においても最も強いエネルギーを生むだろう感情の本質であることをコヤンスカヤは知っている。

「奪われたことに怒り。踏みにじられたことを許さない。そうして生じた衝動のままに駆け抜ける貴女であったからこそ、私は認めていたのに：出会って間もない相手も大切だなんて、その尻軽さには落胆の

一つもしてしまいます。そうして際限なく弱くなり続ける貴女が私たちに勝てる筈がありません」

立香にはコヤンスカヤの言っていることの半分も理解できない。それでもその言葉の中に含まれる「哀れみ」を感じ取ることは出来る。敵に向けられるその感情ほど、人の神経を逆なでするものはない。立香の視界が赤く染まりかける中で、コヤンスカヤは小瓶を一つ床に落として姿を消していく。

「もし仮に貴女が未だ私たちの脅威だというのなら、証明してみてください。怒りのままに、衝動のままに、向かってきなさい。人類最悪（笑）のマスター。私が次に向かう先は中国異聞帯です」

結果的に見れば今回の暗殺はコヤンスカヤの完敗だった。立香に盛る筈だった毒はゴルドルフの手によって防がれ、ゴルドルフが誤って服毒した毒も戦いを回避する為に解毒剤を渡したことで解決した。

コヤンスカヤの持っていた彷徨海バルトアンデルスへの侵入という一度限りの手札は切られ、「現象」として見れば何も生み出さなかった。―動かしたものは「衝動」。そして、「感情」。

「…あは、あはは、アハハ」

怒りと呼ぶにはあまりに弱弱しい声が食堂に虚しく木霊する。

その立香の様子を見て、ゴルドルフは理解する。立香との付き合いの短いゴルドルフですら、理解せざる得ないほどにコヤンスカヤに煽られた立香は危うかった。

次に向かう異聞帯は決定された。向かう先は北欧でもインドでもない。

中国異聞帯の他にない。そうしなければ「この立香」は壊れてしまいかねないと危機感を抱いたゴルドルフは司令官として有能であった。

そして、この後に全ての事情をゴルドルフから聞いたホームズとダ・ヴィンチもその決定を支持する。「この立香」の危うさは二人も既に気が付いていたことだ。

許せないという純粋な怒りが前に進む為の揺ぎ無い原動力となる

のなら、そうでもしないと進めないのなら、その感情は決して汚していいものではない。

許すことが大切だと知ったようなことをいう者がいる。しかし、許せないから、怒るのだ。

立香ちゃんコヤンスカヤは激怒した。必ずや邪知暴虐のクリプター達と異星の使者コヤンスカヤを除かねばならないと。

——戦いが始まる。次に立香たちの向かう世界は恒久的な平和を実現した桃源郷。『戦い』という言葉が失われるほどに進歩して、故に停滞した歴史。完成を持って完了とした異聞。

異聞深度：E。『人智統合真国シン』開幕

## 中国異聞帯編

立香ちゃんは今全速前進DA！

“ 儒教 ” という教えがある。それは古代中国に起こった思想に基づき、四書五経を經典とする。それは汎人類史において、生から2000年以上に渡り、東アジア各国できわめて強い影響力を持っていた。

立香にはその教えの素晴らしさを説くことが残念ながら出来ない。―― “ 良い事を言っている ” のだろうと言う事は理解できるが、具体的にどこが凄いのかは説明できない。現代に生きる平凡な若者からすれば “ 儒教 ” という教えは残念にすぎるが、その程度でしかない。

だが、しかし――その儒教の巻き起こり。つまり紀元前の中国において “ 儒教 ” という教えがどういう存在であったのかは、最近 “ 優秀な ” という冠が煽りに聞こえてしまう立香でも想像するに容易いことだ。

きつとその時代の儒教は民草にとって “ 良い事をいっている ” 様に聞こえて、質の悪いことに今よりも洗練されていなかった。それが為政者にとってどれほど邪魔な存在であったかは想像する必要もない。――故に古代中国の為政者。つまるところの “ 始皇帝 ” は 「 愚かな学者らは古い本を持ち出して喚き合うだけで、目の前の政治の邪魔をする 」 と儒教を弾圧するに至った。

そして、その執政が後に2000年以上に渡り行われたのなら、民草は “ 文字 ” も “ 詩 ” もあるいは “ 自由 ” さえも失ってしまうのだという事実を立香たちは中国異聞帯に入り直ぐに知った。

第二の異聞帯――中国異聞帯は前回のロシア異聞帯と比べ者にならない位に人類が生きるには適した環境下にあった。温暖な気候。豊穡の大地。そんな世界で暮らせるのなら、そこで生きる者達の気質もまた濃厚なものになる。虚数空間から突然現れた立香たちに初めは驚き警戒しながらも、話し合いに応じてくれたその地で暮らす人々の



話を聞けば、此処にはロシアとは違い危険な魔物の類もおらず精々が畑を荒らす猪や野犬が出る程度だという。

この異聞の人々はその平和な世界の中で田畑を耕し、麦を育て、穏やかに暮らしているという。「病」は無く。「飢え」も無く。故に「争い」も無い。都に住まう「天子」の執政により全ての民の平穏な暮らしは約束されているのだという。

第二の異聞帯―中国異聞帯に踏み込みある程度の情報収集を終えたカルデア一同はシャドウ・ボーダーの操舵室兼司令室で今後の方針について話し合っていた。

司令官席に座るゴルドルフは唸るばかりで話を進めないで、仕方無くホームズが音頭を取る。

「さて、諸君。この異聞帯に於ける敵の居場所が判明した。その上で我々の方針についてだが…まあ、私の考えは最後でいいだろう。何か意見のある人は挙手を」

「はい！」

「予想通りの元気な声だ。それでは藤丸君。君の意見を聞こうか」

「あいつらは咸陽って所に居るんでしょ？なら、やる事は決まっているんだよ！咸陽に向けて全速前進DA！」

「そうだね。兵は神速を貴ぶべきと言う君の意見には一理ある。だが…そうだな。君の―頭脳ブレインは何と？」

「ふーやーちゃんも私を支持してくれているんだよ！」

霊体化を解かない武則天の闊達な声で「妾を差し置いて帝を名乗るとか、おつろかものー！」という声が部屋に響いた。

武則天の真似をして胸を張りドヤ顔を浮かべる立香の姿は可愛らしくマシユは思わず頭を撫でたくてウズウズしたが、名探偵たるホームズはその雰囲気に吞まれずのため息を付いた。

「…やはりロシアでバベツジ卿を失ったのは大きかったな」

立香のサーヴァント達の中にストッパーが居ないことを嘆いたホームズだったが、すぐに気持ちを切り替る。

そして、この時の為に召喚したサーヴァントの方に顔を向けた。

「マスターはこう言っているが、君たちはどう思う?」

ホームズの問いかけに赤と白の鎧を纏った――騎士――裏切りの騎士――モードレッドは澆漑と笑いながら言う。

「マスターの言うように敵の居場所はわかってんだ。殴り込み以外は無えだろうが。一番槍は俺が頂くぜ」

もう一人の英霊――筋骨隆々の肉体を拘束具で縛った――狂戦士――叛逆の英雄――スパルタクスは満面の笑みを浮かべながら言う。

「圧制者を許せぬと猛る者、全てが我が友である。その歩みを止めることは許されることでなく我が全力を持って助力せん。今すぐ行くではないか」

「わーい。二人も一緒に全速前進DA☆」

二人の言動にホームズは頭を抱えたくくなる。

流石はこの立香が召喚した英雄――思考回路がこの立香と似通っていた。

ストッパーとして召喚した筈の英霊たちがまさかのブースターだったことに対して、ホームズから立香と共に召喚を担当した人物へと非難の視線を向けられた。

ダ・ヴィンチは小さく舌を出しながら片眼を瞑り自分の頭を小突く。

「てへぺろ☆」

天使の様に可愛い。

「……………すまない。後は君だけが頼りだ」

ホームズの最後の希望――今回の異聞帯で召喚された英霊――叛逆三銃士の最後の一人――暗殺者――荊軻は課せられた大きな期待に応える為、三人を窘めるように言う。

「マスター。そして、お前たちも逸る気持ちは分かるが落ち着け。帝の暗殺は容易いことではない。私が言うのだから間違いない。まずは、”自分の考えは最後までいい”と勿体ぶっている奴の考えを聞こう」

荊軻の言葉に、猛る三人は荊軻が言うのなら仕方がないと直ぐに飛

び出そうとしていた姿勢を直す。

暴れ馬が暴れない内に作戦を伝えろと言う荊軻の視線を受けてホームズは了解したと頷く。

マスターである立夏の意思を尊重したいと考えるホームズだが、行き過ぎれば彼女は一人で走り始めてしまうので加減が難しい。

今回はこの辺が限界だと考えホームズは明晰な頭脳を持つて考えた作戦を伝える。

ゴルドルフはそれでいいのだと言う態度で偉そうに頷いている。

「まず初めに直ぐに動き出すべきだと言う意見には私も賛成だ。だが、しかし、安易に動くには状況が不明すぎる。敵の本拠地は分かっているが、逆に言えばわかっているのはそれくらいだ」

ロシア異聞帯では離れていても見えた異聞帯の要である空想樹がこの中国異聞帯では見当たらない事。そして、はるか上空にある“帯”のような何か。加えて、咸陽と思われる場所に浮かぶ汎人類の技術では有り得ない巨大な建造物。

安易に動くのは危険だと言うホームズには百利ある。

その事には領かざる得ない立香は、しかし、と声をあげる。

「私はコヤンスカヤが言っていたことが気になるよ。あいつ、放っておいたらこの異聞帯の人たちに絶対酷い事する。早く倒した方がいいよ」

この異聞帯で暮らす人々―立香たちが情報収集の為に触れ合った農村の民たちは優しく良い人たちだった。

たとえばこの異聞帯が消滅すれば消えてしまう―立香たちが消してしまう人々だとしても理不尽に苦しむ姿は見たくないと立香は言う。

その言葉にホームズは同意する。

その気持ちすら失ってしまえば、その時こそ立香は本当に壊れてしまうのだろうか―故に君の気持ちは分かっていると言いながら、何もしない訳ではないと伝える。

「先ほど危険があると言ったが、手掛かりが咸陽しかないのなら向かわない訳にもいかない。だが、全員で向かうにはリスクが大きすぎる。だから、私は二面作戦を提案しよう」

ホームズの言葉に待ったをかけたのはずっと黙ったままでいたゴルドルフだった。

「ま、待ちたまえ。古来より戦力の分散は愚策だろう！それに戦力を分けると言う事は、こゝこのシャドウ・ボーダーの防衛が完全でなくなってしまうではないか！」

「この世に完全なものなどありませんよ。それにゴルドルフ氏、我々が敵より優れている点は何だと考えますか？」

「それは勿論、シャドウ・ボーダー。後は…この小娘の存在だろう」

「ゴルドルフは立香を見た。」

「ええ、そうです。単身で5騎の英霊を使役するマスター。はっきり言って反則だ。その上、今回は更に三騎の英霊の召喚に成功している。そこに私やダ・ヴィンチ、マシユ君を含めて、サーヴァントを戦力として見るなら我々は敵より優位に立っていると考えていい。無論、ロシアの皇帝ツァーリの様な例外はありますが、あそこまで“強大な個”が再び立ちふさがるとは考えにくい」

総勢十一騎の英霊。数だけ見ても圧倒的で質も最高と言つていい面々だと胸を張れる。故に戦力を分散し情報収集と侵攻を同時に行うべきだというホームズは言う。ゴルドルフは身の安全に不安を感じながらも、最終的にはホームズを支持した。

「はいはいはい！なら、咸陽には私が向かうね！ホームズ達は情報収集をよろしく！」

「うん。それは駄目だ」

「えー？なんで？適材適所だよ！」

「確かに君が戦闘に適していることはロシアで証明された。しかし、私はロシアで君が暴走したことを忘れてはいないぞ」

ホームズは実に良い顔でそう言った。

立香は目を逸らすしかなかった。

「それに君を動かすと言う事は同時に5騎のサーヴァントたちを動かすことにもなる。攻めると言ってもまずは偵察。戦力が偏り過ぎる。まずは、そうだな。私とモードレッド、スパルタクスの三人で咸陽までの道のりを見てこよう。立香君は村でダ・ヴィンチと共に情報収集

に励んでいてくれたまえ」

「うう………ダメ？」

「駄目」

「………ぜったいダメ？」

「絶対駄目」

「ホームズの鬼！意地悪！有能な指揮官！」

「はっはっは、耳が心地いいな。では、早速出かける準備に取りかかろう。ダ・ヴィンチ。通信機の準備は？」

「もちろん、出来ているさ」

こうして当面の方針は決定し、立香にはお留守番の任務が課せられた。不貞腐れた立香をマッシュが慰める光景を経て、物語は進み始める。

中国異聞帯でのカルデアの方針―ホームズの二面作戦はその時点で取ることの出来た行動としては一番良いものだった。

この異聞帯の人々の為にコヤンスカヤを放置することは出来ず、解明できない謎を多く抱えた状態で、戦力を無駄にしない作戦。

少なくともこの時点でホームズに異をとることに出来る戦略家はシャドウ・ボーダーには乗っていないなかった。

だから、コレは不運という他にないのだが―立香たちは見誤った。見誤ったものはまだ見ぬ敵。

中国異聞の王―始皇帝。

敵のクリプター―芥ヒナコ。

二人の事では、無論ない。

ホームズは言葉にしないだけでまだ見ぬ敵の事すら考えに入っている。ホームズはロシア異聞帯の王―イヴァン雷帝を“例外”として上げたが、この中国異聞帯の王が偉大なる皇帝と並び立つ存在である可能性があることも当然の如く理解していた。全てはゴルドルフを納得させるための方便。そんな方便を使ってまで、リスクに見合った見返りがあると考え抜いた末の二面作戦。―故に、先の文字は取り

消そう。

ホームズは何も見誤ってなどいなかった。ただそれが、敵も同じであつたということだけだつた。

## 芥ヒナコは頑張っている

中国異聞帯―咸陽。高いビルの一つもない世界で唯一、見上げる程に偉大なる建造物を持つ都。

其処にクリプター―芥ヒナコの姿はあった。

長く美しい黒髪ツインテールの二つ纏め、フレームの太い眼鏡の下の瞳は俗世の全てがくだらないとでも言いたげに冷めている。けれど、小さな口元から零れる言葉には熱が籠っていた。

「陛下、以上が私の知るカルデアという者達の全て。そして、クリプターと空想樹。異聞帯と汎人類史の情報です」

芥ヒナコが冷めた目で見つめる先には神輿があるが、その中は空から。故に天上の人―天子たる始皇帝の声は空そらから響くように部屋に木霊する。

「ふむ…ふむふむ…なるほどな…魔法やら魔術やら英サイヴァント霊やらとオカルトを語りだした時には気が狂ったかとも思ったが…星詠カルデアに異星の神か…これはちよつと朕も本気で考えるべき議題であるな」

「ええ、敵は強大であることをまずは理解していただきたいのです」

「敵か…うむ、朕としては其方やタユンスカポンと同じ来訪者である星詠カルデアを敵と決めつけたくはないのだが…他ならぬ其方の言葉とあれば仕方ない。外国の使者くらいに対応を取ろう」

「ありがとうございます」

自分の言葉に傳く芥ヒナコを見て、始皇帝は「ふむ」と首があれば傾げていた。

傳く姿勢―その姿が芥ヒナコという少女の正体を知っている身としては疑わしい。だが、忠節を示し、隠し事も無く情報を伝える姿に面従腹背の空気は一切ない。

そんな真似をしても芥ヒナコの何の益もないことを始皇帝は知っている。

「頭を上げよ。前にも言ったが其方を唯一、朕と同じく“人”であると思っっている。故に其方が朕に頭を垂れる必要はないぞ。天仙の女

よ」

始皇帝の言葉に数秒の間、考えこんでいた様子の芥ヒナコは頭を上げて立ち上がる。

そして、神輿を正面から見据えながら言う。

「そう。なら、そうさせてもらうわ。けど、こうして私が貴方と対等に話していると貴方の付き人が怖い顔するの：どうにかならないかしら」

芥ヒナコの視線は神輿の傍に立つ中国服を着て丸いサングラスをかけた老人―衛兵長に向けられる。

「こら、衛兵長。芥を怖がらせるでない」

「御意。芥殿、申し訳ない。最近、老眼が来たようでつい眉間に力が入ってしまうのです」

「いいわけしない。ともかく衛兵長は芥を睨むの禁止だぞ」  
「御意に」

気の抜けるような主従のやり取りにため息を付きながら、芥ヒナコは伝えることは伝えたと神輿に背を向ける。

「お？帰るのか？せつかくだから夕食でも食べていくか？」

「貴方、私と同じものを食べないじゃない。いらないわ。それに、項羽様を待たせているのよ」

「相変わらずに御熱よな。おお、そうだ。芥よ。その事に関する疑問が一つあった。答えてから帰るがいい」

始皇帝の言葉で芥ヒナコの足は止まる。煩わし気に振り返る芥ヒナコに始皇帝は至極真面目な声色で問いかける。

「何故、朕に星詠カルデアが脅威であると伝えた。別世界の英雄譚まで引つ張り出し、何故に朕に脅威と煽る？」

「…」

「其方に邪な考えがないことは理解している。が、故に疑問だ。芥、否、虞美人。其方の目的は会稽零式と添い遂げることであろう？」

クリプター―芥ヒナコ。その正体はこの惑星に人類が誕生する前から生き続ける始祖の吸血鬼―古代中国に於いての彼女の名は虞美人くびしん。



汎人類史において項羽の愛妾であった女性。

そして、会稽零式。

その名前を出されたことに苛立ちを含んだ眼で芥ヒナコは神輿を見る。

世界のマナを喰らう神霊に等しき存在。神が己を真似て人を作ったとするなら、まさしく「真人」であると言える始祖の吸血鬼。

しかし、始皇帝は怯むことなく言葉を続ける。

「<sup>カルデア</sup>星詠が脅威であるなら、朕が其方に与えた会稽零式。否、其方の前では項羽と呼ぶ約束であったな。朕の最高傑作の絡繰りにして、国家最高の武人である項羽を呼び戻すのは自明の理であろう」

芥ヒナコ―虞美人が望んだのは項羽と共に始皇帝の治める国の片隅で最後の時まで生きること。

言ってしまうえばクリプターでありながら、芥ヒナコには異聞帯も異星の神もどうでもいい。目の前にさえ現れなければ、立香たちのことも眼中になかった。

そんな思いを持つ芥ヒナコを理解するからこそ、始皇帝は疑問を持つ。

項羽を戦場に駆り立てるような情報を何故、伝えるのかと―それに対して芥ヒナコは苛立ちを隠そうともせずと言う。

「カルデアが驚異的に過ぎたからよ」

クリプターの一人。カドックが担当していたロシア異聞帯は立香たちがやってきてから、考えられない速度で消滅した。

その様子は言峰神父の手により映像として記録されていて、他のクリプター達と共に芥ヒナコはロシア異聞帯の終わりを見た。

芥ヒナコ―虞美人は数世紀ぶりに人類に脅威をみた。

始皇帝にはその脅威が完全には伝わらないと理解しながらも、芥ヒナコは語る。

「ロシア異聞帯の王。神の如き獣となったイヴァン雷帝をチャールズ・バベツジ程度が、近代の、それも魔術師としても記録されていない科学者風情が単騎で討つなんて…カルデアはありえないことを成したのよ」

吐き捨てるようにそう言いながら、芥ヒナコは神輿を―いや、咸陽の空に浮かぶ偉大なる建造物―始皇帝を見上げながら嗤う。

「なら、次はこう考えるわ。この異聞帯も直ぐに消滅するかもしれない。天に頂く帝は落とされ、私は直ぐに項羽様と離れ離れになるとね」

芥ヒナコの不敬に過ぎる言葉に衛兵長が動こうとしたのを声で制しながら、始皇帝は問いかける。

「不老不死を得て世界を統一してから幾星霜。肉体を捨て、鉄の聖軀を得て、宇宙に長城を浮かべ、もはや敵と呼べるものが外宇宙にしか存在せぬと結論付けた。…その朕が没するとか？」

「その可能性を私は見たと言っている。カルデア、否、藤丸立香は私たちの物語に現れた誤植のような存在よ」

始皇帝は芥ヒナコ―虞美人を天仙であると、自らに唯一並ぶ“人”と見ている。

そんな者の言葉だからこそ、始皇帝は芥ヒナコの語る脅威を正しく理解した。

「衛兵長よ。気が変わった。急ぎ驪山リヤンに向かい冬眠英雄を数名再生せよ。また後に備え更に百名程度の再生準備を行え」

「百名もの再生準備を…陛下は此度の件が阿茲特克共和国との戦いに並ぶ大戦に発展するとお考えですか？」

「否、芥の言が真実であるならそれ以上の脅威であろう。誰を起こすかは衛兵長に一任するが、間違っても桃園ブラザーズなんかは起こすなよ？ 勢い余って国盗りでもはじめかねん。絶対に起こすなよ？ 振りではないぞ？」

「御意に」

話の初めとは違い、カルデアを脅威と認めた対応をみせる始皇帝に芥ヒナコは目を見開き驚いていた。

その様子を見た始皇帝は楽しそうに笑う。

「其方の言葉を朕は受け取った。一度、決めれば国家総動員が朕の国の強みである。無論、其方や項羽の力も借りることになるが、否はあるまいな」

「…ええ、やってやりましょう。私たちでカルデアとそのマスターを滅ぼし尽くすのよ」

ホームズは敵の脅威を正しく理解していた。

芥ヒナコは敵の脅威を正しく理解していた。

ロシア異聞帯での華々しい勝利を経た先に有った至極当然の展開は立香たちにとって絶望的なものであった。けれど、時計の針は戻らない。後ろを振り返る暇はない。

事態は加速しながら、物語は進む。

しかし、最悪と呼ぶにはまだ早い。

始皇帝に敵の危険性を正しく認知させることに成功した芥ヒナコは王宮を歩いていった。

足取りは軽い。顔には出さないが気分もいい。

それ程に先ほどの始皇帝とのやり取りは芥ヒナコにとって有益なものだった。

「始皇帝」——紀元前より君臨し続けるこの異聞帯の王は言うまでもなく理想の王であったが、芥ヒナコからすれば甘い部分もあった。言ってしまうと、始皇帝は人が良いのだ。

あの王は異世界からの渡航者である芥ヒナコを受け入れたように、敵であると知らせていた立香たちも受け入れていた可能性があった。

少なくとも問答無用で排除する前に話位は聞くのが有益だと判断すると芥ヒナコは思っていた。だが、しかし、此処で芥ヒナコが始皇帝との間に築いた信頼関係が役に立った。

無論、始皇帝とて芥ヒナコの言葉だけを以て真実を決めつけはしないだろう。だが、敵の言葉より味方の言葉に耳を傾ける人物であったことが、今は喜ばしい。

「カドックの敗北は私には関係ない。アレは覇気に欠けていたのだから、勢いで押し切られても仕方無い。異聞の王との関係も良いとはいえないものだった」

—故に敗れた。獣国の皇女となる筈だったサーヴァントは復讐者<sup>アサエンジヤ</sup>へと身を墮とし、マスターの望みを叶え、共に眠りについた。

「だが、私は違う。元よりあんな小娘のサーヴァントに項羽様が劣る筈もなく、何より始皇帝はイヴァン雷帝にも劣らぬ怪物」

紀元前より世界を支える皇—その姿を思い描きながら、芥ヒナコは嗤った。

「笑えるわ。何千年も生きる機械に身を墮としながら、未だに自分のことを人間だと信じて疑っていないのよ。可笑しいったらないわ。人であることに固執する意味なんて、何もないのに：貴女もそう思うでしょう？コヤンスカヤ」

芥ヒナコの声に応えて空間が揺らぐ。歪む空間の先から姿を現したのは露出の多いチャイナ服に身を包んだ美女—TV・コヤンスカヤ（中華ヴァージョン）。

コヤンスカヤは目を細め珍しいものを見る様に言う。

「芥ちゃんの方から私に声を掛けるなんて、明日は槍でも降るのでしようか？ああ、いえ、明日降るのは血の雨でしたね」

「うるさいわね。普段から構ってくる動物の相手をちよっとしてあげようと思っただけよ」

「カツチーン。この私を動物扱いとか、いくら芥ちゃんでも言っていないことと悪いことがあるぞ。蝙蝠湯にしちゃうぞ」

「あら、なら私は毛皮の首巻が欲しいわね」

本気ではない軽口の中に確かな殺意を紛れ込ませる二人は暫くしてから同時にため息を吐く。

「止めね。無意味だわ」

「同感です。それで、どうして私に声を掛けたんですか？」

「警告よ。貴女、早くこの異聞帯から立ち去りなさい。貴女が裏でこの世界の民にしていた悪趣味なことが始皇帝に露見したわ」

「あらあら、まあまあ、それは大変ですね。天眼はお見通しという訳ですか」

大仰にリアクションをするふざけた態度のコヤンスカヤに芥ヒナコは隠すことなく舌打ちをする。コヤンスカヤの悪趣味—「人類虐

め〃に関して芥ヒナコは特に思うことが無い。

元より人でなく、人でないが故に人に害され続けた彼女からすれば心底どうでもいいことだ。

しかし、始皇帝からすれば違う。愛し守るべき民が害されることをこの異聞の王は許さない。

故にお前は邪魔だからいなくなれとオブラートに包むことなく言う芥ヒナコにコヤンスカヤは口元に指を当て、暫く考えた後に笑顔で言う。

「いや☆」

「そう。なら殺すわ」

比喩ではなかった。芥ヒナコの手刀が次の瞬間にはコヤンスカヤの腹部を貫いていた。

始祖の吸血鬼である芥ヒナコからすればサーヴァントの肉体を膂力で壊すことなど簡単だ。

それが好きでもない相手なら躊躇もない。

芥ヒナコはいつそスッキリした。けれど、耳障りな声は消えなかった。

「わー、痛い」

「…チツ、幻覚か」

「話の最中にお腹に穴を空けられるのには馴れていますから、最近はこちらで対策しているんです。残念でした」

「調子に乗るのもいい加減にすることね。私からは逃げられても、この異聞帯にいる限り始皇帝からは逃げられないわよ」

「わかっています。傀儡兵は既に五十ダースほどちよろまかして仕事は終わっていますし、暫くの間は趣味も控えて身を隠すことにします」

「貴女がそこまでしてこの異聞帯に残ろうとするのには訳があるのかしら？ 商売が終わったなら、早く尻尾を巻いて立ち去るべきじゃない？」

芥ヒナコの言葉は至極真つ当なもので、敏腕美人秘書であるコヤンスカヤからしても仕事を終えたのなら直に次の仕事に取り掛かるこ

とが彼女の基本スタンスだ。

だが、今回は少し事情が違った。

「ええ、けれど、どこぞの敗者と違って、私は挑発だけして逃げるような真似はしません。少なくとも一度くらいは対峙してから次に向かうと決めたんです」

忠告だけはあるがたく受け取っておきますと笑いを含めた軽薄な言葉を残してコヤンスカヤは姿を消した。

その場に残された芥ヒナコは一人で言葉を零す。

「…所詮はあの女狐も始皇帝と同じか。どうして、そこまで人間如きに固執するのか、理解に苦しむわね」

敵でないなら興味はない。味方でないなら意味もない。――之は嫌悪ではない。

芥ヒナコは藤丸立香を脅威と認めた。敵であるから対処をする。

芥ヒナコはコヤンスカヤが自分の味方に成りえないと再度、理解した。

ならば、もう、その存在に意味はない。――之は嫌悪ではない。

芥ヒナコが人類に――いや、唯一人の存在以外に向ける感情は嫌悪ではない。好きの反対は嫌いではないのだ。――それは無関心。

「まあ、どうでもいいか」

芥ヒナコは始皇帝と信頼関係を築いている。それが必要な事だから、芥ヒナコはそれを築き上げた。しかし、それでも芥ヒナコは始皇帝に心を許したわけでも真実の全てを伝えたわけではない。

中国異聞帯――この世界に根付いた空想樹の内側が腐り堕ちていることを、芥ヒナコは始皇帝に伝えていない。

「私の望みは今度こそ項羽様と添い遂げること…そのために、この世界には滅びてもらわないと、だって私は不滅なのだから…少しでも長く生きて、少しでも長く一緒にいて、そして、一緒に死にましょう。項羽様」

――それ以外は、至極、どうでもいいことだ。

## 立香ちゃんはやはり怒っている

汎人類史が失った物の中に満天の星空というものがある。栄えた場所である程に、地上の闇は光で照らされ、同時に天の光は見えなくなった。

日本の都市で育った立香にとって満天の星空という光景は馴染の深いものではない。だからこそ、その美しさには惹かれるものがある。

ロシア異聞帯では昼夜関係なく吹雪いていた為に見ることの叶わなかった光景に目を輝かせ、木に背を預け、杯を呷る。

朱色の盃に注がれた酒を一息に飲み干す立香を見ながら暗殺者――  
荊軻は笑みを零す。

「良い呑みっぷりだ」

「えへへー、色んな人に仕込まれたからね。酒樽一杯くらいなら余裕なんだよ！荊軻さんのお酒は美味しいから、幾らでもいけちゃうかも！」

「それは重量。だが、あいにくと持ち合わせはそう多くない。この瓢箪一つで勘弁してくれ」

「わかってます。荊軻さんも飲んで飲んで！人類の英知であるダ・ヴィンチちゃんが作ったお酒を人類の救世主である私が注いであげるんだから！」

「うむ。ありがたく頂こう」

返杯を一息で飲み干す荊軻に立香は拍手を送る。つかの間の和やかな時間はゆつくりと過ぎていた。

日中、この村でえられた情報は少なかった。元々、村人たちは村の外の事は曖昧な噂話程度でしか知らず、この異聞帯の王の名も正確に知りはしなかった。『天子様』と呼ばれ崇め奉られる存在は十中八九、『始皇帝』であるというのがダ・ヴィンチの分析ではあるが、確信を得るには至らなかった。

そんな状況でそれでも懸命に情報収集に励んだ立香たちが得られたのは二つ。

一つは大昔に起きたという「戦争」という国事の際に「天子様」の声に応え現れたという「英雄」の存在。

そして、二つ目は彼らが眠ると言う霊山―驪山の存在。

正直、立香にはそれが与太話にしか思えなかったが、カルデアの頭脳であるダ・ヴィンチとホームズはそうではなかった様で、この異聞帯で起きている異常―この世界には抑止力たる英霊がないという点と宇宙そらに浮かんだ長城―汎人類史よりも遥かに発達した科学を見て、その話に一つの仮説を立てていた。

「英雄が死せずに眠ってる。冷凍保存なんてありえるのかな？」

立香が零した疑問に荊軻は杯を傾け、首も傾ける。

「私は学者でないから冷凍こーるどなんたらは分からないが、英雄が死なぬ世界では抑止力が無くなるという話には頷ける。死した希望に誰も手を合わせぬ世界では、人々は何にも祈ることはないだろう。…この世界の者たちを見ていると余計にそう思うよ」

永久に平穏を享受する安寧と調和が続く太平の国。幸福への隷属と引き換えにこの世界の人々は世界に祈らずとも生きる術を与えられた。

祈るのは只一人―唯一ただひとりの人―天子のみ。

「気に食わないのじゃ」

立香と荊軻の細やかな宴会に子供の声が飛び込んできた。声の方へ振り向けばそこには豪華な織物に身を包んだ童女―立香の暗殺者アサシン―武則天が立っていた。

「あ、ふーやーちゃん。マシユの事、呼んで来てくれた？」

「まったく…いくら賭け事ジャンケンの結果とはいえ、妾に従者の様な真似をさせるとか、マスターでなければ第一級絶対さいに許せん罪じゃぞ」

そう悪態をつきながら歩いてくる武則天の傍にマシユの姿はない。

「残念じゃがあのマシユとか言う娘は妾に劣らぬ美を持つ娘と“ちゅー”するので忙しいから来られぬそうじゃ」

「え!?チュウ!?マシユとダ・ヴィンチちゃんがチュウしてるの!?私も混ざりに行かなきゃ!!」

「あ、待て待てマスター。“ちゅー”は接吻ではない。何と云ってい



たか…ちゅーにんぐ」じやったか？」

「あ…そう…マシユはオルテナウスのチューニング中か、残念なんだよ」

「くっふー、しかし安心せよ。妾は優秀故にな！たどえ本意ではなくともお使いから手ぶらで帰る筈があるまい！」

そう言いながら笑う武則天の後ろで動く小さな人影。立香たちが目を凝らせば、其処には小柄な武則天の背に隠れてしまう、武則天と同じくらいの背丈の少年がいた。

それは村での情報収集の際に何度か言葉を交わした少年だった。

「くっふっふー、大人たちは日が落ちて寝静まっていたが、こやつはこの茂みでお前たちを覗いておいたから、ひっ捕らえてきたぞ」

立香と荊軻はそう言いながら武則天に突き出された少年を見る。

二人の視線に少年は顔を赤くした後には頭を下げた。

「ご、ごめんなさい。なんだか眠れなくて、夜風に当たりに出たら、お姉ちゃん達の姿が見えて…その、凄く綺麗だったから、覗いてしまいました。ごめんなさい！」

立香は少し前から視線を感じていた。荊軻が何も言わないので害はないのだろうと放っておいたが、彼だったようだ。

「綺麗だなんて、えへへ、確かに荊軻さんはすっごく綺麗だけど、私もかな？」

「うん。お姉ちゃんも凄く綺麗だよ」

「わーい。嬉しいな。ほら、こっちにおいでよ。君もお酒を呑む？ジュースの方がいいかな？割る用の奴を水で薄めればいいよね。はい。これ上げる」

立香は持っていた朱色の盃に入っていた酒を飲み、盃に果汁を注いで水を足し少年に手渡す。

「あ、ありがとう」

少年は顔を赤らめながら立香から盃を受け取った。

「どういたしまして…ふーやーちゃんは何を呑む？」

「ふむ、カルデアの酒も良いが折角だ。荊軻とやら、妾の盃を満たす榮譽を与えてやっても良いぞ」

「おや。皇帝陛下が私の酒をご所望か。ふふ、良いだろう。今夜は無礼講としようか」

「くっふー、よかろうなのじゃ」

こうして四人となった細やかな宴会は再開する。

その最中に立香達は少年と様々な事を話した。

立香達のいる汎人類史には有って少年の生きる異聞帯にはない儂くも美しく喜びに溢れたもの。

それに触れた少年は目を輝かせて言った。

「自由って、すごいね！」

その言葉を聞いて、立香は思う。この異聞帯——中華異聞帯——安寧の大地は確かに素晴らしいのだろう。

けれど、人が生きるには余りに「つまらない」と立香は思っていた。

人生に刺激を求めるのなら、この異聞帯を退屈だと称した立香の考えは間違っではない。

一見すれば真面なソレは、けれど、強い者の理屈でもあった。人生を楽しみながら生きられる者の考え方だった。

ただ平穏に生きたい。

愛したヒトと共に安らかに生涯を終えたい。

そう考える者からすれば、この異聞帯こそが理想形。

その平穏を維持する為に愛したヒトが存在していると言う一点を除けば始皇帝の統治こそが彼女にとつての理想郷と言つてよかった。

けれど、その譲れぬ一点が有るからこそ始皇帝と完全に仲良くなれない彼女は——大局を動かす為に満月の夜に降りてきた。

「不愉快ね」

言葉のままに不機嫌さを隠すことなく音もなく現れた彼女に対して驚き言葉を失つたのは立香ではなく、荊軻と武則天の二人だった。

酔っているとはいえ暗殺者アサシンのクラスにいる二人の警戒を掻い潜り突頭に姿を現した敵は、そんな二人を鼻で笑うと視線を外して立香を睨みつける。

「サーヴァントが能天気なら、マスターも同じね。その間抜け面は、映像で見るよりも滑稽だわ」

「間抜け面は酷いかも。アハ、お前は資料通りの綺麗な顔をしているね。パイセン」

「その吐き気を催す敬称は止めなさい」

此処に降りるは美しい黒髪を二房に束ねた月下美人。

クリプター―芥ヒナコが其処に居た。

唐突に現れた敵の前に二人の暗殺者アサシンの酔いは冷める。武則天が立香と少年の護衛。荊軻が芥ヒナコの排除。

目配せ一つで通じた二人の動きを止めたのは芥ヒナコの背後から現れた英霊の蘭陵王らんりょうおうと冬眠英雄しんりょうきょうの秦良玉。それぞれが武則天と荊軻の動きを制する。

「あの…お姉ちゃん…」

「しー、なんだよ。こっちにおいで」

動揺する少年を優しく制し守る様に抱き寄せる立香。

それを見て眉を潜めた芥ヒナコ。

周囲から虫の鳴き声すら消えた静寂の中で立香と芥ヒナコの視線が交差する。

互いに本心を見せないまま、唐突に訪れた出会い。状況を動かしたのはやはり立香だった。

立香は人差し指を立てるとその指先を夜空で輝く月に向ける。そして、無邪気に驚いた様な声を出す。

「あっ…あれれ、あれはなんだろう」

「…」

ふざけた言葉だった。少年をこの場から逃がす為に芥ヒナコや蘭陵王の気を逸らすにしても、もっと頭の良いやり方は存在していた。

まるで馬鹿みたいな真似をする立香。故に溜息すら吐かずに動かないでいる三人にとって其処からは正しく「あつ」という間の出来

事だった。

血の匂いがした。

それにいち早く気が付いたのはこの大地において中立を保たんとする始皇帝側に立つが故に立香を必要以上に警戒していなかった秦良玉だった。

立香と対峙する自分たちの背後から香る血の匂い。それに反応して即座に背後を振り返れば其処には血塗れの白い鬼が居た。

「芥ヒナコ様！危ない！」

「…え？」

十字槍を振り上げる血塗れの白い鬼―森長可の狙いが芥ヒナコだと気が付いた秦良玉は芥ヒナコを突き飛ばし―身体を切り裂かれた。

「あぐう!？」

鮮血が舞う。倒れる秦良玉を見て呆気に取られる芥ヒナコに代わり森長可の次の攻撃に備えたのは蘭陵王。

「マスター！私の後ろに！」

剣士のクラスである彼は腰の剣を抜き、森長可の十字槍が次に狙うであろうマスターである芥ヒナコを守る為に対峙するが、しかし、森長可はそんな蘭陵王に目もくれることなく倒れた秦良玉に十字槍を向けると容赦なく首を刈る。

秦良玉の躰から血が噴き出す。鮮血せんけつしたた滴る首級それを掲げて、森長可は

白い鬼の兜の下で笑う。

「ぎやははははは！やったぜ！オラァ！この女はサーヴァントか！何点だ？なあ、マスター！」

美しかった秦良玉の顔からは文字通りに血の気が引き白さが際立ち美しさに磨きがかかっている。

それを玩具の様に扱う森長可。あんまりにもあんまりな光景に言葉を失ったのは芥ヒナコと蘭陵王だけでなく荊軻もまた引いている。武則天は森長可が秦良玉の首を振り回す度に飛び散る血が身体に掛るのを器用に避けていた。

森長可の蛮行に唯一反応するのは無論、それを命じた立香だ。立香はあんまりにもあんまりな光景を少年に見せない様に少年を背中か

ら抱き寄せ、その眼を両手でふさぎながらに森長可に笑顔で答える。  
「血が流れてまだ消滅していないから、その綺麗な人はサーヴァント  
じゃないのかも」

「ああ？…ちっ、なんだよ。なら、女子供は三点じゃねえか」

森長可はつまらなそうにそう言うのと秦良玉の首を無造作に地面に  
捨てた。それを見てキレたのは蘭陵王だ。彼は仮面の下の美しい貌かお  
に怒りを滲ませながらに森長可に詰め寄ろうとして―それを芥ヒナ  
コに止められる。

「止めなさい」

「マスター！しかし、秦良玉は！」

「私たちの完全な味方では無かったわ。彼女は始皇帝の英雄よ」

「…しかし、我々の敵ではありませんでした。素晴らしき武人です。  
あの様に扱われていい筈が無い」

「お前は相変わらず優しいわね。でも、止めなさい。状況が悪い。  
さっきまで二対二だったのに、今は三対一よ。堪えて。お前は私を守  
りなさい」

「…御意」

立香と言葉を交わすこともなく死亡した秦良玉。狂戦士バーサーカーに暗殺を  
命じた頭のおかしなマスターとそれを成したサーヴァント。早すぎ  
る展開に呆気にとられていた芥ヒナコがそれでも冷静で有れたのは  
秦良玉の死にショックを受けていないからだった。

それを察した立香は秦良玉の正体を悟る。森長可の攻撃に反応し  
て芥ヒナコを庇うことの出来た時点で秦良玉が名高い武人であるこ  
とは立香も分かっていた。そして、芥ヒナコから出た「始皇帝の英雄  
」という言葉。

ならば、名前も知ることなく殺された彼女こそ村で得られた情報の  
一つ。霊山『驪山』に眠る「冬眠英雄」なのだろう。

(冬眠英霊。ダ・ヴィンチちゃん算出した脅威度はS。個々の武力  
に差があるとしても、森君の攻撃に反応する事が出来た彼女が最低ラ  
インだとして、それが何百人も居たら確かに脅威的なんだよ)

「…、…、…」

視界を塞いでいようと風にも風に乗り香る血潮。それに気が付き身体を僅かに震わせる少年。それでも立香の言葉の通りに静かにしている姿を可愛く思いながら、立香は少年の後頭部に胸を押し当てて色々考える。

(でも、パイセンはそんな彼女の死に驚きはしても動揺してない。一緒に行動していたから、臆病者カドックよりは異聞帯の王と良好な関係を築いているかもだけど…完全じゃない。なら、恐れるに足らずなんだからね)

芥ヒナコの言うように今の立香の状況は良い。

武則天&荊軻 対 蘭陵王&秦良玉という均衡は立香の切った森長可というジョーカーに壊された。これにより芥ヒナコが作りたかった対話の場は台無しになった。

状況は三対一に変わり立香の優位は揺るがない。

「お前には本当に私たちと話し合う気がないのね」

芥ヒナコの言葉に立香は笑う

「当然かも。男の子の臆病者カドックとは仲良くしないのに、女の子のパイセンとは仲良くするとか、そんな差別を人格者な立香ちゃんはしないよ。皆、みんな一緒にいっしょたに、言葉も発さずに死んでほしいな☆」

「あつそ。気色が悪い笑顔ね。私としては話し合いで終わるならそれが良かったのだけれど、それが無理ならお前は無駄に戦うことになるわ」

この異聞帯に於ける芥ヒナコの願いは空想樹の成長ではない。故に彼女はこの地に根付いた空想樹の内側が腐っていることを始皇帝に隠している。

「この異聞帯に未来は無い。お前が何もせずとも何れ消える運命にある。故にお前が戦う理由が無い。だから、此処を去れと言いに来たのだけれど…その眼は私の言葉なんて信じないわね」

「まさか、私がパイセンの言葉を信じない訳ないんだよ。信じた上でこう言うの！お前が其処に居るんだから、戦う理由はあるよ！この人類の裏切り者め！」

立香の宣戦布告に芥ヒナコは嘖き出して笑う。美しい顔を歪ませ

ながら、我慢が出来ずに漏れた声は艶に満ちていて男を虜にする魔性に満ちていた。

「ふふ、あはは、あははは！私が、私が人類の裏切り者？的外れも良い所ね」

月下の元で黒髪を解き、長く美しい髪が風に揺れる。そして、眼鏡を外し捨て去れば、その瞳は血の様に赤い。

「私にとって人類たちなんて、初めから塵芥ちりあくたでしかないじゃない。私が気にかけるべき人類は、此処に居る蘭陵王の様な特例を除き居ない」

その言葉と姿を見て立香は芥ヒナコの正体を悟る。立香は魔術師としては三流以下だが、察しは良い。加えて経験だけで言うなら一級品だ。

故に立香はソレに属する者達に出会ったことがある。流石に始祖となると話は別だが、話だけならダ・ヴィンチちゃんから聞いていた。

この星の守護者とも呼ばれる存在。

人類を超越した最強種。

始祖の吸血鬼。

それがこの状況下でなおも芥ヒナコが揺るがずにいられる理由だと知り立香は目を細めた。

「そっか。確かに私が間違っていたね。最初から人じゃないなら、裏切りも何も無いもんね。でも、ならどうして人ではないパイセンが人類史の生存競争に参加しているのかな？カルデアに参加した理由も分かんないけど、関係ないなら、引っ込んでなよ」

「私だってそのつもりで居たわよ。元々、カルデア初代所長のマリスビリーが死んだ時点で見切りは付けていたの。二代目の娘に期待なんて出来なかったし、マリスビリーとの契約も切れていたから適当に死んで身を隠す気でいたわ。でも、その時に事が起こった」

マリスビリーへの義理を通して参加したレイシフト。それは人類焼却を目論んだ魔神王ゲーティアの配下の手によって失敗に終わり、芥ヒナコは死んだ筈だった。

それは彼女にとって都合の良い展開だったと言っている。

元より彼女は人類に興味がない。故に人理修復も本心から言えばどうでも良かった。

それでも一応は期待したマリスビリーは死亡して、レイシフトに参加したことで義理も通した。故に芥ヒナコが死んだなら、その名を捨てて再び始祖の吸血鬼―虞美人として生きるつもりでいた。

けれど、どういう因果か芥ヒナコは生きていて―そして、この異聞帯で彼に出会ってしまった。もう二度と出会うことは無いと諦めていた虞美人にとつての最愛の人。

項羽がこの異聞帯ではまだ存命だった。

「だから私はクリプターとしてこの戦いに参加した。項羽様と一秒でも長い時間を共に過ごす為に、異聞帯の王である始皇帝にも協力するわ。その方が都合が良いもの」

「でも、この異聞帯の勝利は望んでいないんだよね?」

「ええ、どの道、キシユタリアには敵わない。あの男の異聞帯は異常よ。それこそイヴァン雷帝程に巨大な化け物がごろごろといるわ。勝てはしない。なら、私は戦いを望まない。戦いが続けば続く程、項羽様が傷ついてしまうもの」

「だから、一緒に腐り堕ちることを願うんだ。仲間みたいな顔をして。パイセンは、小狡いね」

「なんとも言いなさい。お前如きに理解されようとは思わない。それにこの世界を滅ぼそうとするお前に非難される謂れはないわ。そうして庇う振りをしている子供すら、消し去ろうとするお前より私の方が幾分か真面よ」

「…え?」

芥ヒナコ―虞美人の言葉にそれまで立香の言いつけ通りに静かにしていた少年から声が漏れる。立香の背後から抱き寄せられて、両手で視界を塞がれたままに少年は言う。

「お姉ちゃん達は、僕たちを滅ぼす為にやって来たの?」

「そうだよ」

思わず言葉に詰まる質問に二もなく立香は答える。その返答を武則天と森長可は当然のものとして受け取り、荊軻は主人の抱える深淵



を見る。

「勝者が生きて敗者は滅びる。そう言う単純な生存競争たたかを貴方たちとする為に、私たちは世界を越えてやって来たんだよ」

「…お姉ちゃんは、僕たちの敵なの？」

「それは君が自分の目で見て決めることかも」

そう言うって立香は抱き寄せていた少年を介抱する。

少年の視界は開けて立香の手で隠ひらされていた光景を見る。

首を落とされた始皇帝の使いとそれを成した血塗れの鬼武者。立香と対峙する黒髪の美人とそれを守るように立つ仮面の剣士。そして、自分を見つめる立香とそれに従う二人の女性。

激動と言える光景を目にした少年は最後に縋つるように立香を見て、その場から走り去っていった。

「厄介払いは済んだようね」

虞美人の言葉に立香は微笑み答える。

「待っててくれるなんて優しいね。じゃあ、始めようか、殺し合い。パイセン」

「ええ、そうね。後輩」

最早、其処に問答は無用。

互いに許せぬ敵を見据えながら月下の元で対峙する。

## 芥ヒナコには戦う理由がある

月下の元で立香と対峙した芥ヒナコは決して立香を侮らない。

秦良玉が討ち取られて大勢は一对三。

眼前に居る立香を守るように立つ二人の英<sup>サイヴァント</sup>霊——武則天と荊軻。

そして、背後で蘭陵王と対峙する森長可。

<sup>サイヴァント</sup>戦力の差は三対一。其処に芥ヒナコは自身を含まない。始祖の吸血鬼であり本来であれば英<sup>サイヴァント</sup>霊すら圧倒するチカラを持つ彼女であるが、今は人間——芥ヒナコとして生きてきた<sup>ガワ</sup>身体がある。彼女が始祖の吸血鬼——虞美人としてチカラを取り戻すには少なくとも英<sup>サイヴァント</sup>霊一体分の純粹な魔力を吸わなければならなかった。

(なら、蘭陵王を喰らうか？ふざけるな。どう考えてもそれは悪手でしよう)

この状況下でそんな隙を立香が与えてくれるとは芥ヒナコは考えない。目の前に居るのは三流以下の魔術師。しかし、経験だけで言うなら一級品。

「…面倒ね。逃げようかしら」

芥ヒナコは不意に立香から視線を外し、月を見上げる。その隙を付けと言わんばかりのあからさまな態度に武則天と荊軻は動きを止めてしまった。それが——悪手だった。

もし、この時に武則天と荊軻が虞美人の首を刎ねる為に武器を振るって居たのなら、決着はあまりにあっけなく付いていただろう。

しかし、だからと言って二人を責めることは出来ない。見事なのは芥ヒナコの計略。彼女は戦いを宣言する前の会話から今に至るまで、彼が到着するまでの時間を稼いでみせた。

不意に月を見上げた芥ヒナコ。まさかそれに釣られて視線を敵から外す訳にも行かない三人の英<sup>サイヴァント</sup>霊たち。故に彼の者の襲来にいち早く気が付いたのは立香だった。

立香は芥ヒナコの視線に素直に釣られて、月を見上げて、月より飛来する異形の影を見た。

「ッ!?ふーやーちゃん!荊軻さん!」 緊急回避“!”

立香の手の甲にある令呪が輝く。頭が理解するよりも早く動く身体に従い荊軻はその場から飛び退き、武則天は立香と共に闇に紛れた。

次いで轟く大地を割る轟音。――否。

果たしてどれ程の技量があればそんな真似が出来るのか、月よりの来訪者は大地を割れども其処に一切の音を鳴らしはしなかった。

無音による暗殺術。それを成した武人が狂戦士だと語ったとして、それを誰が信じるだろうか。

「…見事。よもや我の不意の一撃を持つてしても首一つ刈れぬとは…」

無音の破壊。偉業を成した異形は高い知性と気品を感じさせる声色でそう言いながら、四つの矛に込める力を強めて、闇に紛れ姿を隠した武則天と立香を真つ直ぐに見る。

「…むう、ふーやーちゃん。見破られているんだよ」

「なんと、妾の雲隠れを容易く看破するとは、あやつはなかなかやるのじゃ」

居場所がバレているのでは仕方がないと姿を現した立香はその異形の徒をまじまじと見る。

見上げる程の巨軀。四つの腕に四本の脚。一見するとギリシャ神話に登場する半人半馬の種族であるケンタウロスにも見えるがそうでは無いのだろう。

立香はその姿を見ながらに微笑み問いかけた。

「アハ、おつきくて厳つくて格好いいね。ねえ、素敵な貴方の名前は何て言うの?」

「我が名は会稽零――」

「項羽様に色目を使うなッ!」

――そうであったな。其方がある限り我は会稽零式に非ず、我が名は項羽。我が妻、虞の呼びかけに応え参上した貴公の敵である」

月下の元で威風堂々とそう名乗りを上げた項羽に立香は驚く。

芥ヒナコが語っていた項羽の姿が人ではなく異形であったことは別にいい。差別主義者ではない立香ちゃん人は人を見た目で判断しな

いし、何らな獣姦もいけるくちだ。前に新宿のアヴェンジャーことヘシアン・ロボに性的な意味で襲い掛かって返り討ちに遭い、食事的な意味で食べられそうになったことがある。

故に驚いた理由は別にある。

「妻、ねえ。私の記憶が確かなら、虞美人は項羽の妾めかけだった筈なんだよ。：パイセン、愛されてるんだ。羨ましいな」

言葉の最後を尻すぼみ気味に消しながら、立香は芥ヒナコと項羽を見る。その二人の背後では既に森長可と蘭陵王が打ち合っている。

戦いの時間はあまりないと考えていいだろう。長引かせてしまえば異変に気が付いたシャドウ・ボーダーの面々がやってきってしまう。

実は立香にとってそれは歓迎すべきことではないのだ。

（芥ヒナコの姿が擬態だったとしても、一見すれば物静かな文科系美少女だったんだよ。：マシユとは、仲が良かったのかな？）

立香の疑問には答えが出ない。代わりに浮かぶのは哀し気な顔を浮かべながらマシユが自分に対して絞り出した言葉。

“クリプターの方たちにも、何か理由があったのかも知れません”

ああ、その通りだった。少なくとも芥ヒナコには汎人類史を敵に回しても戦う理由が存在してしまっていたことを“この立香”は認めよう。

「共に死ぬと言うパイセンの言葉が、タダの独り善がりでは有ればよかった」

月下の元、森長可と蘭陵王の剣戟になる。

その祭囃子を聞きながら、立香は世界を越えて出会ってしまった二人を睨みつける。

芥ヒナコと会稽零式。

否、虞美人と項羽。なんだそれは、ふざけている。それを引き裂く自分は正しく悪役では無いかと立香は笑う。

その笑みに芥ヒナコは怪訝な顔を浮かべる。

「：お前は、何を言っているの？」

「ただの悲劇ヒロイズム取りなら良かった。パイセンが平行世界の本人誰かに惚れ

た尻軽なら良かった」

「チツ、誰が尻軽だと――」

「なのにな！」

立香のあんまりな言葉にキレた芥ヒナコの言葉を遮ったのは、他ならない立香の叫びだった。

月下の元で剣戟が鳴る。それを祭囃子として立香はまるで踊るように“怒り”を表す。それに呆気を取られる荊軻とは違い、武則天には立香の気持ちがよく分かった。

誰にも語らず。故に誰にも理解されていなかった。

立香自身が一番恐れていた事態が起きてしまっていた。

「お前に私の気持ちは理解できない”？わかるよ！汎人類史を敵に回して尚も戦う理由なんて、愛以外にある筈が無いもんね！」

立香にはわかる。多くの英<sup>サーヴァント</sup>霊と不純でありながらも数多くの絆を築いた“この立香”だからこそ理解ができる。

汎人類史の虞美人と異聞帯の項羽。

出会う筈の無かった二人の出会いがどれ程の奇跡かを理解できる。そして、其処に紡がれた“愛”が真実のモノであると理解しよう。

項羽と共に出来るだけ長い時間を過ごして、共に滅びたいと言う<sup>虞美人</sup>ヒナコの言葉。

「そこに愛はあったんだ！それは愛であつたんだ！そう呼ばなければ許されない感情が確かに存在していたの！凄いよ！パイセンはかっこいいな！」

優秀なる復讐者である立香ちゃんが一番恐れていた事態。それはクリプター達に共感してしまうこと。

端的に言おう。

立香は芥ヒナコの叶わぬ恋を応援したくなってしまった。

混乱する頭でそれに気が付き思いのままに叫んで、その直後に絶望しそうになった立香を、だからこそ武則天は「おろかもー！」と可愛らしく言いながら殴り飛ばした。

「なっ!?武則天！何をしている！」

「…サーヴァントがマスターを殴り飛ばした？お前たち、本当になん

なの？」

「…我が演算能力を持ってても理解不能である」

武則天の突然の暴挙に敵である芥ヒナコと項羽だけでなく味方である荊軻も驚く。

しかし、武則天は悪びれる様子もなく殴り飛ばした立香を見ながら言う。

「マスター、ちよつとは頭が冷えたかの？」

「…うん。ありがとうなんだよ」

立香はそう言いながら立ち上がる。その姿は泥に塗れ、着ていた力ルデア戦闘服は所々が破れてボロボロだったが、身体には不思議なほど傷がない。

何故なら武則天の拳にもまた立香への愛が込められていたからだ。愛は痛い傷つかない。

「やると決めた。ならば、やるのみなのだじゃ。そうであろう、マスター」

「うん。そうだよ。ふーやーちゃん」

例え芥ヒナコ―虞美人がどれ程に素晴らしく素敵に立香の眼に映ったとしても、もはやそれは関係のない事だ。

クリプター達と対立する道を立香は選んだ。

ならば後は武則天の言うように“ヤル”のみなのだ。

「私は怒り。私は嘆き。私は恨み。私は、私の世界を取り戻す為に戦うんだから、誰にも邪魔なんてさせないんだから。勿論、自分自身にもね！」

立香は拳を天に突き上げて高らかに叫ぶ。それは余りに単純であり、原初の頃から変わらない人間が戦う理由。

だからこそ人間は何時からかソレを声高に叫ぶことを忘れてしまった。

「私はお前たちに怒っているんだ！烈火の如くにね！だから、力を貸してよ！ノツブさん！」

その声に応え魔王信長は三度、異聞の地に顕現した。

そこから先の戦い。シャドウ・ボーダーの面々が気が付きやって来

るまで続いた二人の魔王の戦いを事細かく記すことは残念ながら出来ない。

何故なら、立香でさえ二人の戦いを目の前で見続けることは出来ず、戦闘開始から三十秒で武則天と荊軻に抱えられてその場から逃げ出さなければならぬ状況になり、傍で戦っていた森長可と蘭陵王は戦いの余波で吹き飛んだ。

唯一、戦いが止まるまでの間、見ていた虞美人が語る事をしない以上、それは仕方のない事だった。

故に結果だけを記す。

その日、山が一夜にして消えた。

そして、立香たちはシャドウ・ボーダーに乗り中国異聞帯の王―始皇帝のいる咸陽へと向かう事となった。

立香ちゃんは救われた！

汎人類史 対 中国異聞帯。

互いの世界の滅亡を掛けた戦いは、驚くことに咸陽に辿り着く前に最終決戦クライマックスを向かえることとなる。

「聞いて驚き、見て感涙せよ。この大地に朕が降り立った。即ち之が天命である！」

立香達が咸陽に向けてシャドウ・ボーダーを走らせている最中にその軍勢は現れた。

人ではない機械兵―傀儡兵を率いる者もまた人ではない。―否、彼の者こそがこの異聞帯せかいに置ける唯一の人である。

唯一神としてではなく唯一人として世界に君臨する天子が何故、鉄の聖軀を捨てて創り上げた生身の身体で立香達の前に現れたかを語る為、時間を少し巻き戻そう。

それは始皇帝が立香が情報収集を行った村を“衛星落とす”にて滅ぼした時の事。

数時間前の出来事だった。

中国異聞帯の王―始皇帝は話の分かる善き王だった。民の繁栄を宿命として自らに課し生き続けること数世紀。国は富み、民は安寧を約束されている。始皇帝の執政の元で世界は統一され、喰うに困らず病は無く、故に争いも無くなった世界に置いて、たとえ異世界からやってきた敵である立香達に自国の情報を漏らす者がいたとしても始皇帝は気にも留めなかった。

元より民たちから“敵”という概念を消し去ったのは始皇帝本人である。無知は罪でなく安寧の為に必要なものである。

故に“咸陽”に“驪山”という国の要の情報を立香達―カルデアに伝えた民が居たとしても、善君たる始皇帝は民を罰することはない。己が治世の在り方に疑問を覚えることも無く淡々と情報として



収集するのみである。

ただし、立香達、中でも暗殺者―荊軻から情報を与えられたことは、許されざる事だった。

村の人々に立香達から与えられた者。荊軻が月夜に詠んだ詩。それは始皇帝が禁忌として数世紀前に根絶した“儒”。即ち世界を破壊に導く人の知。一度、目覚めれば癌細胞の如くに増殖し世界を蝕む疫病に対し始皇帝は一刻の猶予も慈悲も与えはしなかった。

愛すべき民たちと守るべき村々の上に天命―この異聞帯にかかる帯―衛星軌道上に設置された長城の一部を落とすことに迷いはない。「無知は罪ではない。知を積み上げることが罪となる。重なる罪は大罪となり世界を滅ぼすだろう。利己がある限り人は欲望に打ち勝てない。それに耐えうる真人は唯一、朕のみである」

故に“儒”の芽は摘ままれねばならないものだった。

此処にダ・ヴィンチの警告は真実のものとなり立香手の届かない場所ので立香に良くしてくれた誰か達は死んでいく。

それは仕方のない事だ。どうしようもない事だった。だから、始皇帝の心は揺るがない。

愛すべき民と守るべき村々を滅することに幾ばくかの痛みは覚えるが、之は世界に恒久的な繁栄と平穏を齎す為にも何度も行ってきた天命が故に眉一つ動くことはなかった。

だから、始皇帝の心を動かしたのは村々の滅亡という小さすぎることで無く、もっと大きくて、そして、ちっぽけなことだった。

天より下る天命。衛星落としを見上げながら、これから滅ぶ村人たちは膝を折り始皇帝に祈りを捧げていた。慈悲を求めるものも居た。眠るような死しか知らないから突然死の意味も解らない者たちが多く居た。兎も角として、天を仰ぎ見ることしかできない者達の中に―彼は居た。

少年は墜ちてくる星を前に涙を流していた。

始皇帝により失われるモノの大きさに涙を流し、奪われるモノの尊さに悔し気に齒を見せていた。

死とは終わりだ。其処に少年が焦がれた“自由”は無い。あるい

は死という自由すら始皇帝に奪われた気がして、悔しくて仕方がなかった。

けれど、何も出来ない自分の弱さに絶望し、他の大人たちと同じように膝を屈さずに最後まで天を睨みつけることが出来たのは“自由”を教えてくれた人が居たからだだった。

『怒りたいなら怒っていい。許せないなら許さなくていい。許すことが大切だつていう人がいるけれど、怒ることは滑稽と言われるけれど、そんなことは関係ないよ。いつからかな。いつから人は、他人の目からでしか自分を見れなくなったのかな。そりゃ、他人の気持ちは大事だよ』

それは酒の席で語られた子供の駄々の様に我儘な理屈で、理性的なモノでは無くて、滑稽だと笑われて然るべきもので、全人類が彼女と同じになってしまえば世界は三日で終わってしまうだろう。

『でもそれ以上に、君は君の心を自由にしているんだよ』

それでもその言葉には少年を想う気持ちが溢れていたから、そう笑う彼女の笑顔が少年の眼には空に浮かぶ太陽や月や星よりも美しいものに映ったから、だから、彼は天に向かい吼えたのだ。

大人たちに止められても止めずに、口を塞ぐ指を噛み千切りながら、天に向かい吼えた。

「■■■■■■■■■■」

それは天子たる始皇帝を貶める言葉だった。

そして、自由を唄う詩だった。

その詩を聞いて始皇帝は既にカメラへと変わっている目を見開き愕然とする。無知であるが故に死に怯えることなく死する筈の民たちは“儒教”に晒され恐怖を覚えてしまった。故に一瞬で全てを終わらせる衛星落としては始皇帝の慈悲であった。光に包まれ彼らは一瞬で蒸発して失せる。其処に少しの恐怖は有っても痛みはない。

その筈だったのに――心を痛め泣いている者がいた。そして、その者

は死の間際に天に祈ることはなく天を呪った。

自由の賛歌を唄いながら、己が生まれた世界を呪った。

それは聞き間違いのような天の統治の敗北であり、故に荒野と化した村々を見下ろしながら始皇帝は知らねばならないと理解する。

もう二度と目の前で起きた痛々しい惨劇を繰り返さない為に始皇帝は藤丸立香という個を理解しなければならぬと決意した。

そこから先の始皇帝の動きは迅速だった。元より一つ決めれば国家総動員が彼の国の強みである。全ての工程は一時間の内に終えられた。

始皇帝は手始めに身を隠していたコヤンスカヤを見つけ出し捕らえた。この異聞帯にいる限り始皇帝の天眼からは逃れられないと言った芥ヒナコの言葉に偽りはなくコヤンスカヤは驚くほどあっさり囚われの身になった。自分の身に降りかかるだろう拷問に内心、戦々恐々としたコヤンスカヤだったが、始皇帝が口にしたのは意外にも商談だった。

始皇帝が所望する商品は藤丸立香の情報。それも既に芥ヒナコから得ている人類救済のブランド・オーダー、カルデアでの藤丸立香ではなく“今の立香”の情報。料金はコヤンスカヤがちよろまかした傀儡兵五十ダース。

その商談を断れる筈もなくコヤンスカヤはロシア異聞帯での情報を始皇帝に提供した。

その中で始皇帝は立香に率いられる6人の英霊と妄執の果てに神の如き獣となった皇帝の戦いをみた。

それは世界の命運を賭けた戦いだった。互いが互いの世界を滅ぼすと決めながら拳を握り殴り合う、余りにも非文化然とした人間性のぶつかり合いだった。

その戦いに始皇帝は目を奪われる。

「——うむ、適だ」

始皇帝はその戦いを肯定した。

「星の命運を賭け、世界を一つの盤として見た時、殴り合いほど分かり易い決着が他にあるか。のう、衛兵長よ。朕が今、考えていること

「がわかるか」

「天の御心は私如きには理解の及ばないものでしょう。しかし、陛下の傍で150年に渡り仕えていた身から言わせていただくのなら、本当に宜しいのですか？」

「善哉。朕はこの決着を善きものとする。芥の話の全てを信じるのなら、決着はこうして付けるべきである」

「驪山では既に百名の冬眠英雄を解凍する準備が終わっています。私がこうして戻ってきたのも、それを陛下に伝え直接の命を賜る為。この戦いの勝敗は既に付いているのですよ？」

「であればこそ、朕は世界に向けて問い質す。朕の治世を袋小路とし剪定したことは間違いであったと。…そして、何よりこの者の言葉には朕としても同意せざる得ないぞ」

始皇帝は拳を握る立香を想う。

「編纂事象の地球に居座る上で、どちらの『人』がより相応しいか…：これは人と人との殴り合いで決めるべきこと。握った拳を振り下ろす先が無いなど、有つていい筈がない」

「では、芥ヒナコとの約束は反故にするのですか？」

「否。朕は約束は違えんぞ。星詠みには総力を持って対処する。その中に絶対的力である朕自身も含むというだけのこと。…衛兵長。よもや朕が負けると思っているのか？」

「まさか。陛下は絶対にして完全。たとえ生身で相対そうとも負ける筈がありません」

「で、あれば何の問題もないぞ」  
「確かに」

偉大なる皇帝とちっぽけな人間の世界の命運を賭けた戦いを見た。

予想を覆し最後に拳を天に掲げていたのは人間だった。その光景に真人たる始皇帝は目を奪われた。

「汎人類の民草よ誇れ。其方らの代表は朕と雌雄を決するに値する英傑である」

その一念を持って、持てる利の大半を捨てることを理と呼びながら、やはり人である衛兵長には始皇帝の御心を推し量ることは出来な

かった。

確約された勝利を手放すことは機械であるなら有り得ない判断。  
—そう考えて、衛兵長は何を馬鹿なと聖軀せいこを前に膝せきを折る。

「全ては陛下の御心のままに」

「うむ」

始皇帝は鉄の聖軀を持ちながら機械ではない。心を持つ人であり  
真人である。

故にこの不合理も言ってしまうえば簡単だ。言葉にするには幼稚に  
過ぎるが、戦いをみて始皇帝は立夏ちゃんツァーリのファンになっていた。

偉大なる皇帝・イヴァン雷帝が蒸気王・バベツジと戦い彼らの旅  
路に敬意を抱いたように、始皇帝もまた本来なら見る筈の無かった異  
なる異聞の戦いを見て藤丸立香という人間に敬意を抱いた。

故に訪れた対決の前に始皇帝は傀儡兵の大群を率いながらもそれ  
らを使うことを良しとしない。

これは世界の命運を賭けた人間同士の戦いである。

「故に鉄の聖軀を捨て朕は立つ。感涙し拜謁せよ。今、其方らは世界  
の王の前にいる」

始皇帝は全てを語った。戦う理由と意志を語り、対等に大地に立つ  
矜持を語った。

それを受けての立香の反応はクスリと小さく笑うことだった。

アハハと笑う。

ウフフと嗤う。

キヤハハと晒う。

「意味わかんないかも。支離滅裂なんだよ。ねえ、始皇帝さん。私の  
ロシア異聞帯での戦いを見て、まるで物語を読んで登場人物の気持ち  
を理解した気になるのは、楽しいよね？」

それは始皇帝を前にして許されざる嘲笑でありながら、歓喜にも満  
ちていた笑い。

「わかるよ。そして…私は嬉しいの！」

相反する感情の渦巻くままに立香は笑う。

「だから愛して！恋しいの！貴方は人で！自分の世界を守る為に私の前に立ってくれているよ！どこかの負け犬とは大違いなんだよ！アハ、アハハ、アハハ！嗚呼、ようやく私は…救われるんだね！」

始皇帝―中国異聞帯の王である自分を前に嬌声を上げる時点で分かっていただけだが、この少女は何処が壊れていた。

そして、それで良いのだと始皇帝は思う。

世界の命運の責任。天下万民の運命を背負い立てる人―真人は己おのれ唯一人。ただひとり

その判断に間違いはなく―只人ただひとでありながら世界の命運を背負い立つ少女は壊れてしまっている。

その姿を美しく思い、哀しく思い、救いたいとも思うからこそ始皇帝はこうして彼女の前に立ったのだ。

「其方の藻掻き苦しむ旅路はもう終わらせよう。其方も、其方の仲間たちも朕の世で安息せよ。芥より全ては聞いている」

始皇帝は優しき王である。

故に敵である立香達すら救うと明言する。

始皇帝の後ろに後光が輝き救いの光が立香を照らす。

「喜べ！汝が救われる時は来た！人の世界の命運は朕が任せよう！」

それに対して立香は光に手を伸ばす。

その光は始皇帝の光でなく天に唯一輝く太陽ほしの光。

ではなく太陽の光に消え霞んでいる昼間の星々の光。

眼に見えないが確かに存在するか細いそれを掴みながら立香は言う。

「それは嫌かも！世界を救うのは美少女マスター☆立香ちゃんとその愉快な仲間たちなんだから！傲慢にも、ねっ！」

人よ。誇れ。人であることを。

何処かで誰かが言った言葉を吠えながら、か細き光は世界を照らす。

そう信じる。

世界の命運を戦い。  
始まりの大将戦。  
始皇帝 対 藤丸立香。  
いざ、尋常に始め。